コードギアス　絶望エトランジェ

月城十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス　絶望エトランジェ

【Ｎコード】

Ｎ２１００Ｍ

【作者名】

月城十夜

【あらすじ】

枢木神社での殴り合いの対話の後、再び共に手を結んで打倒ブリタニアを誓ったルルーシュと枢木スザクは、「ラグナレクの接続」を阻止した後、ゼロの仮面を共有する道を選んだ。だがしかし、集合無意識に対してギアスを用いた影響で、魔女であるＣ．Ｃ．とは別に、「先代のＣ．Ｃ．だ」と名乗る男のＣ．Ｃ．が現れて――。「ゼロ・レクイエム」が存在しない設定の半パラレル。

第一話 ： 邂逅

「なんだ、おまえか」

部屋に一歩足を踏み入れた瞬間に、本当はドキリと大きく心臓が高鳴った。

薄いライトグリーンの美しい長髪。

人形のように華奢な肢体。

ハチミツ色に蕩ける双眸は蠱惑的な眼差しでルルーシュをじっと悩ましげに見上げていて。

ついさっきマンションのドアの前まで送り届けたばかりだというのに、ひょっとすると別れを惜しんでついに自分のほうから逢いに来てくれたのかと思わず期待してしまったのだ。

なにしろ以前から、神出鬼没な行動で何かとルルーシュを悩ませてくれた彼女のことである。

今のルルーシュならむしろ積極的に彼女の気まぐれを心待ちにしていることくらい彼女のほうでも十二分に自覚しているわけだから、思わず浮き足立ってしまうのも当然だった。

だが、しかし。

直感的に肝心の中身がまったくの別人であることを察したルルーシュは、我ながら現金だと思える低音で吐き捨てるようにして言い放つ。

アッシュフォード、クラブハウスの一室。

この八年間ルルーシュが身を寄せている仮の住まいである。

もっとも直近の一年間は、実父であるブリタニア皇帝の監視を受

ける形でずいぶんと窮屈な思いをさせられたものだったが。その彼も、母親も、現在はCの世界に吸収された形で形式的にはとうに故人である。

その代わりに、ナナリーを無事に奪還することに成功していたルルーシュは、改めてルルーシュ・ヴィ・ブリタニアを過去の人間として捨て去って、今現在はルルーシュ・ランペルージとして温容な学生生活を営む毎日だ。

同時に、枢木スザクと協力して、超合衆国の代表として『仮面の男・ゼロ』としての役割も続けている。

対する敵は、神聖ブリタニア帝国第９９代皇帝シュナイゼル・エル・ブリタニア。

基本的には融和政策を好んでいる彼を相手に、もっぱら外交面での冷たい戦争を継続させていた。

日常的にはスザクにゼロの仮面を譲り、厄介な外交に相対する時だけルルーシュがゼロとして現地に赴く。

ルルーシュが直接ゼロとして働かないのは、体力的な効率を優先して。

そして何よりも、ギアスの抑止を目的としてのことだった。

そんな回りくどいことをしないでも、俺を信用して、おまえもアッシュフォードに戻ればいいだろうとルルーシュはその提案を固辞したが、ようやく日本を取り戻す目処のたった今、長年軍務に関わってきた自分には、今さら学生生活は似合わないと他ならぬスザクが断言するので、一ヶ月にも及ぶ説得の果てに、ついにはルルーシュが折れてしまった形だ。

かくいうルルーシュも将来的には、まもなくアッシュフォードの高等部を卒業し、大学、大学院へと進学を果たした後には、その能力を『偶然』ゼロに買われて、公式に参謀として政治に関わる手筈を用意している。

ともあれ、ようやく平和な毎日を取り戻したわけだから、今しばらくは平凡な学生として平穏な毎日を満喫していられるはずだった

が。
よっぽど彼は運に見放されているのであろう。
憮然とした表情を隠しもしないで、無遠慮に彼の私室のソファに腰を下ろした人物の姿を眺める。

◇　◇　◇

「――C．C．、おまえも行くのか？」
彼女にそう訊ねたとき、正直言ってルルーシュの心の中でも彼女に対する気持ちが明確に固まっていたわけではない。
だがそれでも、彼女とこのまま別れてしまうつもりは毛頭なかった。
だからこの際、彼女の口からはっきり否定してもらいたくて、あえてそんなふうに訊ねたのだ。
だがC．C．が、相変わらず後ろ向きな発言を止めないものだから、腹の立ったルルーシュは、「好きだ」と告白してやったのだ。
「いいから、おまえは俺の女になれ」とも。
それを傍で聞いていたスザクは呆気にとられた様子で、「いくらなんでも、その誘い方は横暴だよ」と差し出口を挟んできたのだが、当のC．C．が拒みはしなかった。
「しばらく考えさせてくれないか？」と、しばしの猶予を申し込んできた。
どっちにしろC．C．を離すつもりのなかったルルーシュは、スザクとの話し合いの後、アッシュフォードにC．C．を一緒に連れて帰ってきた。

ルルーシュが告白してから一ヶ月。
依然として色好い返事は聞かされてなかったが、当然ながら自分の部屋で以前と同じように生活を始めるつもりでいたルルーシュは、「外に部屋を借りてくれないか？」と言われて正直かなりショックだった。
思わず、「それがおまえの返事か？」と詰め寄った。
C．C．は、「しばらく一人で暮らしてみたいんだ」と答えた。
「おまえのそばにいると、ちっとも考えが纏まらないんだ」とも。
ルルーシュは当然納得できるはずもなかったが、いつになく切羽詰っている様子で神妙に「頼む」と重ねて要求されれば、嫌でも叶えてやらないわけにはいかなかった。
結果的に、それが良かった。
離れている時間を設けることで、お互いのことを冷静に考える時間が増加した。
少なくとも、ルルーシュのほうではそうだった。
現在のところC．C．も、表面上はごく普通の学生としてアッシュフォードに通っている。
高等部の一年生だ。
生徒会の副会長権限をここぞとばかりに行使して、何くれとなくルルーシュが世話を焼く機会も多かったが、ひと月も経過するとC．C．は基本的に自力で学生生活に馴染んでしまっていた。
どこかしらミステリアスな雰囲気に惹かれるらしく、気がついた時にはクラスの女子にも大変な人気で。
そうした連中と過ごす時間が増えてゆくほどに、行動の把握できない場合も増えていたから、用のあるときには普通の男女がしているように携帯に電話をし、またメールを送って約束を取り交わす。
今までのように惰性で常に一緒に過ごしているのではなく、明確に逢いたい気持ちを伝えた上で、たまの休日に時間の空いたときには、朝から二人で待ち合わせをして遊びに出かける。
クラシックの演奏会や、美術館の催し物、映画は先行上映や試写

会のスケジュールまでいつしかチェックするクセがついていた。ピザを偏愛しているところは相変わらずで、ルルーシュも新しい店を発掘するのがずいぶん上手くなっていて、つい先日などは、ある小料理屋の裏メニューで出されているタラバガニのピザを発見して、C．C．を本気で感涙させたばかりである。そのうち近場に日帰りで『ピザ食い倒れ』の旅にでも出かけてみたいな、というのが目下のところ最新の話題だった。

「こんなことを言うと、また笑われそうなんだがな」

C．C．がどうしても食べたいと言うので、ひとつ3，700円もする巨大パフェ。

それを二人で突きながらルルーシュが何気ない様子で呟く。

「こういうのって、普通に恋人同士みたいじゃないか？」

プリンとアイスとシュークリームとエクレアと、ケーキは抹茶とチョコレートとミルフィーユ。

それが全部一緒に盛られているのだからワケがわからない。

二人でひと匙ごとに文句をいいながら、90分以内に食べ切った。

次回入店時に使用できるというクーポン券目当てだった。

普段は別の名前を名乗っているC．C．は、ずいぶんと年頃に慣れた表情を見せて微笑む。

「ああ、そういうのを一度やってみたかったんだ」

完全に、ルルーシュをあしらうことに慣れ切っている表情で。

それでいて、平然と見せ付ける笑顔だけは、どうしたわけか最近めっきり可愛くて。

おまえ本心では俺を動揺させて愉しんでいるんだろう？　と内心では憮然と呟きながら、ルルーシュは、慣れない甘味にグッタリ頬杖を付きながら息を吐く。

「だったら、そろそろ一度素直になってみるのはどうだ？　おまえのひとことで一度が一生に変わるぞ？」

C．C．は、待ってましたとばかりにたちまち瞳を輝かせて、澄ました表情でそれに応じる。

「言ったろう？　あいにくそっちはまだまだ考え中だ」
「ああ、ああ、そうやっていつまでも焦らしてろ」
露骨に拗ねた様子でやり返しながらも、ルルーシュも最近では案外それを愉しみ始めている。
どっちにしろ自分がゼロにスカウトされる際には、Ｃ．Ｃ．も一緒に連れて行く事実に変わりはないのだから。
だったら、今はむしろ寛容に好きな女を甘やかしてやっているような余裕を示して、デートの別れ際まで紳士的に部屋の前まで送り届けるのを習慣にしていた。
アッシュフォードの近場に借りてある、セキュリティ重視の小さなマンション。
入居しているのはすべて独身女性で、２４時間体勢で管理人が詰めている。
契約時に部屋を下見して、家具を入れて以来ルルーシュはまだ一度もそのドアをくぐったことはない。
もちろん、Ｃ．Ｃ．のほうから誘ってくれるのを待っている。
そしてＣ．Ｃ．も、ルルーシュがそれを待っているのを知っていた。
ここ数回のデートの後には特に心の揺れ方が顕著で、すぐ喉元まで誘いの文句が出掛かっているをルルーシュのほうでも知っている。
おそらく、ルルーシュのほうから「どうした？」とでも促せば、Ｃ．Ｃ．も素直に思いを口に出せるのではないかと予感させる程度には。
何が原因で彼女が躊躇ってしまっているのか、ルルーシュにはまだ漠然とも察することは出来てなかったが、あんまり追いつめすぎてＣの世界に篭もられることを考えると全然マシだった。
傍にいるかぎり一緒に話して、気持ちを解きほぐすための努力に時間を費やすことも可能なわけだから。
「じゃァな、また明日学校で」
「そうだな、また明日学校で」

いつもそう言ってからが長かった。
帰宅してから必ずメールを送りあうのがわかっているのに、すぐには別れがたくてドアの前で最低でも３０分は話す。
おかげで、近所の住人とはすっかり顔なじみだ。
いつも顔を合わせると、くすぐったそうな顔をして笑われる。
理由は気付いているから、二人して照れたふうに笑い返す。
いい年をして、いまどき中学生でもやらないウブな付き合い方をしている自覚はあった。
だが、せっかくだからルルーシュも、一度はそういうのをやってみたかったのだ。
生まれて初めて自分のほうから誰かに好きだと告白して、普通の学生たちがやるように会う時間を重ねて、すこしずつ愉しい記憶を共有してゆきながら、ゆっくり心の距離を近づけてゆく。
今までにも十二分に分かり合ってきた自分たちではあるけれども、お互いしか信じられる相手がいないというような切羽詰った状況ではなく、ごく平穏な毎日で、それでも必要としているのはお互いだけと改めて実感できる瞬間の積み重ねが、今のルルーシュには結構悪くなかったのだ。
――それなのに。

◇　◇　◇

ルルーシュは、憮然とした表情を隠しもしないで、無遠慮に彼の私室のソファに腰を下ろした人物の姿を眺める。
平然と自分を見つめ返す瞳の色は琥珀色。

愛しい彼女と同じ色。
髪の色もC．C．と同じ薄いライトグリーンで、肌の色までまったく同じ白磁のようなすべらかさだ。
人形のように華奢な肩幅。ただし、完全に厚みはC．C．のそれとは違っていて。
何が一番ムカつくといって、鎖骨から下に繋がる魅惑的なふくらみが皆無であることだ。
何の感動も生み出さず、まっ平らに腰から下のラインに続いている。
顔の造作もC．C．と同じものでありながら、どこから見ても少女のそれではあり得なくて。
中身と性別が違うだけでこんなにムカつくものかと自分自身で感心しながら、ルルーシュは高飛車に目前の相手を睨め付けた。
大きな瞳を心外そうに細めた「彼」は、皮肉げに片方の口角だけ持ち上げるとひどく寛容な笑い方をした。
「こんばんは。相変わらず、私はきみに嫌われているようだねぇ？」
まるきり彼のほうこそ部屋の主人のような顔をして、ルルーシュの部屋のソファに優雅に寛ぐ。
それを言う声音は艶のある怜悧なバリトンだ。
ルルーシュは、不快げに右目の下に皺を刻んだ。
「おまえを好く理由がないからな、当然だろう？」
言って、顎の先でドアを示して暗に「帰れ」と命じるが、男は意に介した様子もなくクスリと微笑んだ。
「彼女のことは、あんなに大好きなのに」
「おまえには関係ないだろう、帰れ」
「おやおや、忘れたとは言わせないよ？　いったい誰のおかげで、私がここにいると思うんだい？」
以前のC．C．と同じに無断でルルーシュの服を拝借している男は、ルルーシュの黒のジーンズに包まれている長い足を組み直すと、腹が立つくらい優雅な仕草で肩をすくめた。

ルルーシュは、思わずグッと激しく奥歯を噛み締める。

◇　◇　◇

神殺しを阻止するために、ルルーシュは集合無意識に対してギアスを使用した。
言うなれば、一度に数百億の対象にギアスを使用したわけだ。
それがいったいどういうふうに作用したのか知らないが、間接的に集合無意識の干渉を受けているらしいC．C．のコードにも変化をもたらした。
ある一定の条件下で、正体不明の男がC．C．の心と身体を乗っ取ってしまうのである。
一番初めに男が姿を現したとき、驚愕に声も出せなかったルルーシュが辛うじて「誰だ？」と訊ねると、男は深みのあるバリトンで「生前はC．C．と呼ばれていたね」と答えた。
「果たして自分が何代目か？　興味がないから私の知ったことではないけれど、それでもきみは誰かと訊ねられたら、C．C．だと答えるしかないだろうね。本当の名前はとうの昔に忘れてしまったよ」
言うなり、男は聞きもしないのにペラペラと身の上話を始めた。
自分も以前はギアス能力者で、コードを継承した後はおよそ千年の時を生きたこと。
もっぱら気に入りの女性にギアスを付与して願いを叶えてやる代わりに、自分は囲われ者の人生を満喫しながら悠々自適の生活を続けていたのだが、あまりに羽目を外しすぎて、嫉妬に狂ったギアス能力者の彼女に無理やりコードを奪われる形で死んでしまったこと。
――などの一切を、いかにも無念そうなジェスチャーを交えて語っ

た。
「それが驚いたね、次に目覚めたときには彼女の身体で風呂に入っていたわけだから」
「なん……だと？」
「いや、正確に言うなら彼の身体だね。上から下まで立派に男の身体だよ、いや本当に残念だ」
「〜〜〜触るなッ！！」
言いながら、自分の身体を思わせぶりに撫で回してみせる男の仕草にキレてルルーシュが叫ぶと、男は煙たそうな顔付きで「余裕のない御仁だねぇ」と感想を洩らした。
「彼女の記憶によると、きみたち二人は単に共犯者なのだろう？」
「俺の女だ」
「よく言うよ、まだ指一本入れたこともないクセに」
「ッな、ぁ…ッッ」
「ああごめんごめん、間違えた。指一本触れたこともないクセに。入れたらマズイよね、キスもまだなのに」
「〜〜〜〜〜ッッッッ！！！！」
顔の造作はC．C．とまったく同じ表情筋を用いて、どこから見ても好色なオヤジ臭漂う雰囲気で笑う飄々とした男の態度にキレて、その日は会ってから数分でルルーシュが彼を追い返した。
その後も似たようなことが続いたが、それでも多弁な男のおかげで嫌でも知らされた条件は一つ。
要するに、３８度以上の湯に３分以上浸かると、入れ替わりが発生してしまうらしい。
そして、元に戻る条件は、ふたたび同じ条件で湯に浸かること。
それだけだ。

◇　◇　◇

ルルーシュは、心底忌々しげに男を睨みつけていたのだが、自分のこうした態度が相手を調子付かせてしまうことには気付いていた。
なにしろ、会った初日から１２回連続で最後にはルルーシュが彼を怒鳴って追い返しているのである。
そして、実に大人げないこの相手が、記録の更新をひそかな愉しみにしていることにも気付いていた。
２度目にここを訪れた際に、むやみな場所への外出を禁止されてしまったものだから、その意趣返しをしているわけだ。
ルルーシュは、意識的に視線を外すと、日常的に被り慣れている冷静の仮面を被り直して部屋の奥に足を進めた。
窓際の椅子に腰を下ろして、机の上のパソコンを操作し始める。
日常的にゼロの仮面はたしかにスザクに譲ったが、依然として作戦の総指揮権はルルーシュの元にゆだねられている。
言ってみれば、今現在のスザクは影武者のような立場を強いられているわけだったが、近い将来時機を見て、ごく内輪の者にだけゼロの正体がスザクであることをバラす予定だ。
中身がブリタニアの皇子では到底受け入れられたものではないだろうが、元日本国首相の息子となれば当然扱いは違ってくる。
だったら、今まで彼らがさんざん手こずらされてきた『白き死神』はいったい何者だったのかと当然疑問が生まれるだろうが、ブリタニアの内と外から打ち崩すために用意したフェイクだとでも言って聞かせればいい。
強引なのは承知の上だが、論より証拠、それまで彼らの邪魔をしてきた枢木スザクは皇帝シャルルの失脚と同時に姿を消していて、ゼロとしてふたたび姿を現すわけだから嫌でも納得せざるを得ないだろう。
いずれにせよ、彼らにはゼロに従うしか生き残る道は用意されて

ないわけだから。
秘匿回線を経由して、定期的にスザクから送られてくる報告書に目を通して異常のないのを確認すると、ルルーシュは新たな作戦のために用意しておいた資料を添付して、イカルガのゼロの私室宛に送信した。
スザクがそれを受信したのを確認したところで、今度はまた別な作戦のために用意しておいたファイルを開いて戦略のために知恵を絞り始める。
その頭の先で、しばらくして退屈を持て余している様子の男がつまらなさそうにボヤくのが聞こえた。
「その態度は要するになにかい？　晴れてめでたく外出を許可されたと受け取っても構わないのかね？」
ルルーシュは、簡単にそれを聞き流して定型の文句だけを呟く。
「論外だ。さっさと帰れ」
男はギシリとソファを鳴らしてルルーシュの背後まで歩み寄ってくると、わざとあてつけがましく頭上で大きく息を吐き出した。
「いいかね、きみ？　私は飼い猫ではないのだからね？　外には出歩くな、家の中にも誰も連れ込むなでは、そのうち繊細な私の神経が孤独に寂れて擦り切れてしまうよ。せめてきみが私の相手をしてくれなくては、…ね？」
言って、思わせぶりに肩の上に手を乗せてきたのを、ルルーシュは視線も向けずにすばやく払い除け。
手元の作業が一段落ついたところで、ようやく男のほうに視線を返した。
「殺されたいのか？」
男は愉しげに声を上げて笑った。
「それはつまり、この私から、果ては彼女からコードを継承するという意味になるのだが。果たして、きみにその覚悟があるのかね？」
「おまえのようなゲスに、こいつの身体を好きにさせるくらいならそのほうがマシだ」

大袈裟にそれを口にする様子は微塵もなく、いざとなったら彼女と心中するのも止むなしといわんばかりの迫力に押されて、男はうんざりした顔付きでふたたび盛大に溜息を吐き出した。
「やれやれ、何の因果でこんな世界に甦ってしまったのかねぇ？　これでは私にとっては拷問だよ」
ルルーシュは構わず手元の作業に意識の大半を集中させると、鼻の先でどうでも良さそうに嘲笑う。
「どっちもイケる口なのか？　最低だな」
今はこれ以上の直談判はあきらめた様子で、おとなしくソファにドサリと腰を下ろし直した男は、しみじみと鬱屈を溜め込んでいる口調で呟いた。
「どっちもイケなくなってしまったから嘆いているわけなのさ」
「――なんだと？」
何を言われても相手をするつもりは毛頭なかったが、言われたことがあまりに意外で瞬間的に思考が凍り付いてしまったルルーシュは、とっさに振り向きそう訊ね返してしまっていた。
あまりに現金なルルーシュの態度に、男は憮然とした表情で唇の先を尖らせる。
「私には元々男色の趣味はないから安心したまえ」
「誰がそんなことを聞いている？」
相手が本物のC．C．だったらあんなに可愛らしく思える表情も、この男が相手だとただただひたすらに腹が立つだけだから不思議だ。
いいからさっさと話せと顎の先で促すと、腹の上で両手を組み、ルルーシュに向って足を向ける格好でソファに仰臥する男は不貞腐れた態度で吐息した。
「前にも一度話したろう？　彼女から私への入れ替わりは3分経ったらすぐだけどね、どんなにきみが強要しても、風呂から上がって、平熱に戻って、一時間経過した後でなくては私から彼女への入れ替わりは発生しない。要するに、その条件を満たしさえしなければ、私はいくらでも好き放題に酒池肉林を愉しんでいられるわけさ。そ

れを承知している私が、どうしてきみのような男に少々うるさく言われた程度で、おとなしく言うことを聞いていると思うんだい？」
先の読めたルルーシュは、思わず口角が震えてしまうのを感じる。
「ひょっとして、――」
「ああ、集合無意識の嫌がらせとしか思えないのだがね、私の性別に合わせて身体は変化を遂げているが、本来コードの持ち主は女性だからね、残念ながら」
男がそこまで言ったところで、ルルーシュは我慢できずに大声で笑い始めた。
男の性格がアレだったから、これでもかなりその動向を心配していたのだ。
仮にもC．C．の身体を使って、奔放に女遊びなど始められてしまった日には目も当てられない。
その心配が霧散したわけだから、思わずホッと胸のつかえが取れて笑いも零れてしまうと言うものだ。
いかにも晴れ晴れとした様子で笑うルルーシュを上目遣いに見つめながら、男がやがて淡々と呟く。
「それでも、抱かれることは可能なのだよ？」
ルルーシュは即座に笑い止めると、冷静に呟く。
「殺す」
男は嫌そうに顔を顰めた。
「またそれかい？　不愉快だから、物騒な物言いは止めてくれたまえ。言っただろう？　私は千年も数多の女性を愛し続けてきて、それでも飽き足らずに最後は寝首をかかれるような男だよ？　仮にこの美貌にとち狂った男に襲われるような羽目に陥っても、逆に丁重に半殺しにして差し上げられるからね。きみはもっと私に感謝して然るべきだよ」
「黙れ。おまえが出歩かなければ問題はない。いいから、さっさと帰れ」
言うだけ言って、清々した様子でルルーシュは中断していた作戦

の準備を再開させたが、数分待っても男が腰を上げる気配がなかったので、さらに5分待ったところで憤然と振り向き声を荒げた。
「――おまえは、いったい俺に」
「25分」
「……はあ？」
男はつまらなさそうな表情で、壁掛け時計を見上げている。
「ここから彼女の部屋まで私の足なら10分だ。それでも15分余る計算だね」
「だからどうした？」
「わからない男だねェ、気を利かせてやっているんじゃないか。恋人のきみがまだ一度も過ごしたことのない部屋で、私が優雅に寛いでいる姿を想像してみたまえ。何かの間違いで、ついうっかり洗濯前の下着など発見してしまっても私の責任ではないからね？　ああ、イイね、そうしよう。きみの仏頂面を眺めているよりも、彼女の部屋で過ごしたほうが充実した時間を愉しめそうだ」
言って、そそくさと腰を上げて見せる男を、ルルーシュは震える拳を握り締めながら引き止めた。
「……15分あれば、ワンゲームくらい可能だろう？　チェスに付き合え」
男はしみじみ感心している口調で、「つまらない男だねぇ」とボヤいたが、ルルーシュはそれには相手をしないで、さっさとチェスボードの用意を始めた。

◇　◇　◇

「客観的に鑑みて、きみたち二人の関係は特殊だよ」

カチリ。
ルルーシュよりもよっぽど手馴れた仕草で、男の指先がチェスの駒を操る。
おそらく千年のうちに飽きるほどゲームを重ねているのだろう。
ただし初めの数手でルルーシュは、既に自らの勝利を確信していた。
はっきり言って腕前のほうは、片手間に付き合うのでも退屈しそうな相手だったのだ。
それでも途中で放棄しなかったのは、ひとえにC．C．を守りたい一心である。
同居していた時代のC．C．の暮らしぶりを知っているだけに、ものすごくナチュラルにパンツの一枚くらいその辺に転がっているような気がしてならない。
よっぽど部屋の中まで監視目的で押しかけてやりたいと思ったが、それではC．C．を騙すことになってしまう。
そのあたりの事情を、この男は察しているものだから、わざとルルーシュをからかう態度に終始する。
ルルーシュは、溜息混じりに惰性のようにチェスの駒を操る。
「今更おまえに言われなくても、誰から見ても特殊だろう？」
「おや。言っておくけど、私の言っているのは、コードやギアスとは関係のない話だからね？」
だったら、何だ？　とは素直に聞き返しづらいものがあった。
だから、むっつり口を噤んでいると、男は無造作に次の一手をさした。
ルルーシュは、胸の内であっと呟く。
それではまた一段と、俺の勝利が近付いてしまうだろうが。
時間潰しが目的なわけだから、ルルーシュは必要もないのに長考を強いられるのがストレスになってきた。
この男に限って、それを真っ正直に受け止めている筈もないのだろうが、どっちにしろルルーシュを困らせているのは事実なワケだ

から、露骨にそれを愉しんでいる様子で鼻歌混じりに続ける。
「だいたい彼女のように素敵な女性が、きみのような青二才に従う意味がわからないよ。よっぽどきみが何か卑劣な手段を弄して、人には言えないような彼女の恥ずかしい弱みでも握っているんじゃないだろうかと疑いたくなるのが必死だね」
ルルーシュは努力も空しく、怒りを握り潰すようにして盤上に駒を打ち据えた。
「人聞きの悪いことを言うな、俺とあいつは決して」
「彼女、泣いてたよ」
カチリ。
ルルーシュはふたたび呆気にとられる。
そろそろ時間稼ぎをしている自分のほうが、無駄な努力を費やしているような気分になってくる。
これならまだしもさっさとワンゲームやり終えて、次のゲームを始めたほうがマシだ。
あっさり次の一手をさすと、いつもの命令口調で訊ねた。
「それはいつの話だ？」
「一年前。って答えたらきみはどうするつもりだい？　今日だよ、今日。私たちが交代する直前」
「直前？」
ルルーシュはムッと顔を顰めながら顎の先を反らせる。
「あり得ないな」
男は少しのあいだ「う～ん」と唸りながら盤上を睨んでから駒を動かした。
ルルーシュは、ロクに形勢を眺めもしないで次の一手をさす。
男が小さくうっと呻いた。「う～ん、う～ん」と繰り返しながら、また少し長めに考え始める。
「何をそんなに自信満々に言っているのか理解できないけどね、私が女性でもアレは泣くよ。あんな切ないキスをした後で、よく一人で放り出せたものだね。それとも、きみは案外マニアックなのが趣

味なのかい？」
「……どういう意味だ？」
カチリ。
「女性の気持ちを弄ぶのが趣味かと訊ねているんだよ」
そこで男は次の一手をさしたが、ルルーシュはすぐには動き出せなかった。
男の言わんとしていることがまったく理解できなかったせいだ。

◇　◇　◇

今日のデートは二人で映画を見に行った。
意外にC．C．はスプラッタとかホラーの類いが苦手で、同じく恋愛映画が苦手だった。
いずれも理由は、「子供だましだから」。
最初の二つはともかく、最後のそれを「子供だまし」と一蹴するのはどうなんだ？　とさすがにルルーシュも複雑なものを感じてしまったが、そんなC．C．が珍しく自分のほうから「見たい」とリクエストしてきたのがド真ん中ストライクに恋愛映画だったから驚いた。
なんでも試写会での評判が上々で、C．C．のクラスでももっぱら話題の作品らしい。
本上映は来週だが、金曜の夜に先行上映があるからと、ルルーシュにお鉢が回ってきたわけだ。
正直言ってルルーシュも恋愛映画は苦手だ。
たいていの場合ルルーシュには理解できない感情的な理由で盛り上がり、あげくの果てに恥も外聞もなく肉体的な接触を繰り広げる。

そんなものを大画面で平然と眺めていられる女性客の存在が不可解だった。
だからそんな映画だったら困るなと、正直言えばあんまり乗り気ではなかったのだが、ルルーシュの好みを熟知してくれているC・C・の選んだ映画らしく過激な描写は控え目で、幼馴染みの男女が人生の岐路で何度となく邂逅と離別を繰り返し、やがて死ぬまでを淡々と描いた抒情詩めいた作品だった。
それでもやっぱりルルーシュには、「だからどうした？」と感想に困ってしまったが。
C・C・の様子を見るかぎり、まんざら悪くもなさそうな感じだったので、せっかくの余韻を壊さぬように無難に黙っていることにした。
作品時間は１４４分で、２１時からのレイトショー。
終電に間に合うように少しだけスターバックスに立ち寄って、後はまっすぐC・C・の部屋の前に送り届けた。
時計の針はとっくに深夜零時を回っていて、まもなく1時。
カレンダー上は土曜日だったが、学生の自分たちと違って近所の住人がすべて休みだとは限らない。
深夜のひそひそ話は結構耳についてしまうから、いつものように話すこともできず、だからと言ってすぐに帰る気にもなれずに沈黙を持て余していると、明らかに気を遣っている様子のC・C・が、「ちょっとだけ上がっていくか？」と声をかけてきた。
ルルーシュはその気持ちだけ受け取って、「朝が早いからな」と断った。
実際、この土日は朝から蓬莱島に向って、ゼロとして終日行動する必要があったのだ。
ルルーシュの希望で、今のC・C・は完全に前線から退いている。
C・C・は、「そうか」とひとことホッと安堵したような、残念そうな微妙な反応をしてみせた。
それさえなければ、それを機にそのまま帰るつもりでいたルルー

シュは、少しだけ恨めしいような気分で、「キスしてもいいか？」と訊ねた。
おそらく今のC．C．にとっては、安堵したのも、残念に思ったのも、どちらも本心なのだろう。
だが、どちらにより天秤が傾いているか次第で、この週末のルルーシュの心構えが全然違ってくる。
C．C．が自力で迷いを払拭する日まで黙って男らしく待ち続けてやりたい気持ちもあるのだが、さりとてこんなふうな謎掛けをされてしまうと、ルルーシュのほうこそ安閑とは過ごしていられなくなってしまう。
C．C．は瞬間的に困ったような表情で頬を赤めて視線を外して。
けれども、大して待たせもしないで、こくりと小さく頷いた。
その態度がまたルルーシュを気遣って妥協しているだけなのか、それとも単に恥ずかしがっているだけなのか判断するのが難しくて、いっそのこと単刀直入に「だからどっちなんだ？」と問い詰めてしまいたいような衝動にも駆られてしまう。
おかげでルルーシュのほうから求めるのは初めての要求を、あんまりそうとは意識する必要もないままに、自然に身体が動き出していた。
キスをするのにちょうど良い場所まで引き寄せるために肩口に腕を回して、残ったもう一本を腰のくびれた辺りに回した。
そうしてみると、あんまりすんなり腕の中に収まってしまう体格差であるのに気付いて、今更の事実に軽く驚く。
そのまま互いに反対側に傾けた顔を近づけると、唇の先端のやわらかな弾力が心地好いクッション加減でルルーシュの唇を迎えた。
もうすこしその弾力を確かめてみたくて顔をグッと押し付けると、同時に密着した頬の弾力も味わうことができたので、思いがけない気持ち良さに思わず笑ってしまいたいような気分を誘われる。
いっそのこと顔中に唇を押し当てて、どの部分が一番心地好いと感じるのか確かめてやりたいような気もしたが、一回分の呼吸が不

足する以前にC．C．があっさり顔を離してしまったので、ルルーシュは不満を伝えるために薄目を開くと至近距離から黙って睨め付けた。
今度はわかりやすく眉を顰めて困っている内心を伝えてきたC．C．は、だがルルーシュがそのまま強引に顔を傾けてしまうと、案外素直にそれを受け止めた。
なんだかもう妥協だろうが何だろうが、別に構わないような気持ちになってくる。
どっちにしろ本気で嫌なら我慢しない相手だと知っているので。
「……C．C．、…」
ほとんど溜息のような声音で囁きかけながら、語尾にあわせてふっくらした下唇に軽く歯を当ててみると、今度もスルリと逃げられてしまう気配を感じたので、ルルーシュはとっさに肩口を抱いていた腕を外して、C．C．の首の後ろを抱きしめた。
んっ、と微かに喉の奥のほうで抗議する気配を感じたので、ルルーシュは唇を重ね合わしたまま薄目を開けてふたたびC．C．の様子を窺った。
C．C．のほうも同じように長い睫毛の下から歯止めを訴えかけていたのだが、ルルーシュに離す気のないのを察すると、切なそうに眉間に薄く皺を刻んでギュッと強く目を閉ざした。
もちろんルルーシュは、それを容認の合図と受け取って、下唇のラインに沿って軽く舌の先を這わせると、尖らせたそれを迷いなく唇の隙間に差し込んだ。
「んぅ、…っん…」
エレベーターの動く気配すらない深夜のエントランスホール。
いかにも女性が好みそうな温かみの感じられる白熱灯は、無粋でない程度に辺りの空間を照らしている。
完全防音を施されている壁に囲まれているフロアの性質上、外界よりも徹底した静寂に満たされ切っていたけれど、いつ何時隣人がガチャリとドアを開けたものだかわからない。普段ならそうした心

配を忘れずに理知的に行動できているはずのルルーシュが、自分でも気付かぬうちに従順に、初めて味わう甘やかな舌の感触に酔っていた。
いつしか両手で首の後ろと顎のラインを囲い込むようにして口接けている唇の隙間から、時折ピチャリと濡れた水音が夜の静寂の邪魔をする。
初めにその音が零れ落ちた瞬間に、C．C．は両手でルルーシュの胸元を軽く押し返していたのだが、逆にやんわり体重で押し潰すようにしてドアに背中を押し付けられてしまうと、それ以上はあっさり逃げ場を失ってしまったものだから、すっかり観念してしまった指先が、いかにも恨めしげにルルーシュの胸元のシャツをクシャリと握り締めている。
最近でこそピザ以外も頻繁に食べるようになっているが、それでも週に最低でも三度はそれに齧り付いているこの唇。熱く蕩けるチーズを伸ばしながら食べるのが大好きで、最後は器用に舌の先で巻き取るように口の中に収める。
あれだけの枚数を食べているわけだから、そろそろC．C．の身体自体がピザの風味がしやしないかと思ったが、噛んでみた食感はピザよりずっと弾力があって柔らかで、味は少し前に飲んだキャラメル・マキアートの風味がわずかに残っていた。
まさに食べ心地を味わうようにして丹念に貪っているうちに、C．C．の顎に添えている指先がヌルリと湿っているのに気付いた。ルルーシュは唇への愛撫を続けながらその正体を覗き見て、てらてらと濡れて光っている唇の端から唾液の筋がひと筋流れ落ちているのを目に収めた。
身長差でどうしてもルルーシュが上から覆い被さるような格好になってしまうから、重力の問題と今の状況から冷静に考えて、『ああ、俺のか』と気付いたら、年相応の男の生理としてけっこう身体の芯にゾクリとクるものを感じた。
こんなふうになるまで従順に受け入れて、惜しみなく甘い舌の感

触を与えてくれている時点で、いちいち告白の返事を待つ必要があるのだろうか？　と疑問に感じなくもなかったが、それはそれとしてルルーシュのほうがどうしても一度は聞いておきたいものなのだ。
待たせるおまえが悪いんだからなと、ほんのり八つ当たり加減でずいぶん長々と甘い唇を貪って、最後は濡れた口の周りを丁寧にハンカチで拭ってやってから顔を離した。
すかさずルルーシュの胸元に顔を埋めてきたところから察するに、今はむやみに顔を見られたくないのだろう。垣間見える首筋まで真っ赤に色づいているC．C．の後ろ頭をやさしく撫でながら、ルルーシュはその耳元にそっと囁く。
「じゃァな、逢うのはまた月曜日だ。時間を見つけて電話する」
浅く息を乱しているC．C．は、ルルーシュの胸元に顔をくっ付けたままこくりと頷いて。
しばらくして息の少し落ち着いたところで、顔を伏せたまま「待ってる」と小さく呟き、すばやく部屋のドアの内側に逃げ込んだ。
ルルーシュは、後ろ髪を惹かれる思いでしばらくその場に佇んで、数分経過したところでようやくきびすを返した。

◇　◇　◇

「……おまえに、あいつの何がわかるんだ？」
そのうちC．C．が素直に気持ちを伝えてくれた暁には、「また二人で一緒に暮らしてみないか？」なんて、絶対誘うつもりで、本当はその日の到来を心待ちにしていた。
その愉しさを一瞬で台無しにしてくれる男の存在。
どうしておまえなんかが、俺たちの関係を邪魔する権利があるの

かと恨みに思う一方で、奇妙な敗北感にまみれてしまうのは、心のどこかでルルーシュもそれを認めている部分があるからだ。
自分には、まだ到底理解し切れていないＣ．Ｃ．の部分が存在している。
だが、そんなものはこれから先いくらでも、じっくり時間をかけて埋めていけば支障はないはずだ。
そんなふうに無理にも自分に言い聞かせるようにして、胸の内側に立つさざなみを見ないようにしているルルーシュにすっかり気付いているのだろう。
男は、Ｃ．Ｃ．とまったく同じ造作で、Ｃ．Ｃ．なら絶対して見せない表情でくふんと鼻を鳴らすと、鼻先から息を抜くような話し方でルルーシュをからかう。
「それはつまり、私がコード能力者だからかね？　それとも私には彼女の記憶が覗けているから？　それとも私には千年の人生経験があるから？　どれでも好きな口実を選ぶがいい。私の言葉程度に動揺する自分が悔しいならね」
「黙れッ！」
「フフン、本当に呆れた皇子様だね。どうして私がきみなどに従わなければならない？　きみは何か根本的に誤解してやしないかい？
私も、彼女も、きみの所有物ではないのだよ？」
「～～～黙れッッッ！！！」
ルルーシュは苛立たしげに盤上の駒を腕でなぎ払うと、その足で部屋のドアに向った。
その背中に、露骨な嘲笑を含んだ男が声を掛けてくる。
「出て行ってもいいけれど、その場合はきみのベッドを好きに使うよ？　別に勃たなくても女性を愛することは可能だからね？」
「～～～あいつの身体で、そんな言葉を口にするなッッ！！！」
叫んでしまってから、ルルーシュはハッとする。
こんな深夜に。
それでなくてもこの男に会った翌日は気分がささくれ立っていて、

ナナリーに言い訳をするのが大変だというのに。
　ルルーシュは、崩れ落ちるようにしてベッドの上に腰を下ろすと、片手の上にガックリひたいを預けてうな垂れた。
「……なんなんだよ、おまえはッ。……いったい俺に何の恨みがあるんだ？」
　力なく苛立ちに掠れた声音でそんなふうに呟くと、男はむしろ気分を害している様子で冷淡に突き放す。
「恨むなら、まず我が身を呪いたまえ。ガラにもなくこの私が男などを相手に親切心を発揮して差し上げているのだからね、いい加減きみも少しはその希少価値を知るべきだ」
　重々しく言い置いて、フウと嘆息しながら腰を上げた男は、厳めしい面持ちを崩さずにまっすぐルルーシュの部屋から出て行った。
　後にひとり取り残されたルルーシュは、茫然と男の消えた部屋のドアを見つめてしまう。
「おい、おまえ……」
　肝心の用件は？　と思っていた矢先、シュンッとわずかな音を洩らしてドアが開いた。
「いけない、いけない、きみをからかい倒して、うっかり満足して帰るところだったよ。年かな？」
「～～～やっぱりおまえはいっぺん死ねッ！　考えてみれば、俺が直接手を下さなければ、コードの継承には関係ないだろうがッ！！」
　ルルーシュが憤然とそう息巻くと、男はチッと小さく舌を鳴らして、「気付いたか」と悔しそうに呟いた。
　ルルーシュはぶるぶると全身を小刻みに震わせながら、殴りかかりたいのを必死で我慢する。
　これがC．C．の身体でさえなければ、とうの昔にその顔面に固めた拳を叩き込んでいたはずだ。

　そう、
　思った、

瞬間に。

ルルーシュは、全身から猛烈な勢いで血の気が引いてゆくのを感じる。

あまりにその勢いが凄まじかったものだから、一時的に軽い脳貧血状態にすら陥って、そのまま立っていられたことが不思議に思えたほどだ。

蒼白な表情で茫然と立ち尽くしているルルーシュに気付いた男は、口角をニヒルに吊り上げると、

「ようやく気付いたのかね？」

と含み笑った。

「……ちょっと待て。……おまえ……C．C．と……身体……俺……え？……ええ？」

考えが纏まらないというよりも、それを認めたくない一心で切れ切れに言葉が口から先について出る。

男はしたり顔で歩み寄ってくると、慰めのポーズでポンポンとルルーシュの肩を叩いた。

「その通り。きみが彼女と念願のキスを交わしたということは、間接的にこの私とも情熱的に愛し合う結果になってしまったわけだねぇ？　かわいそうに」

響きの良いバリトンが、冷酷にルルーシュの認めたくない事実を反芻した。

ルルーシュは瞬間的に全身に鳥肌を立てながら、肩に触れていた男の手をなぎ払う。

「〜〜〜なんなんだよ、おまえはッ！！　ええっ？！　俺がいったいおまえに何をしたんだッ？！」

まさしく全身の毛を逆立てながら息巻くルルーシュの眼前で、男は叩かれた手の甲をヒラヒラ振りながら嫌そうに呟く。

「まったく彼女は本当に素晴らしい女性ではあるけれど、男の趣味が悪すぎるね。何も早まらなくても、世の中にはもっとイイ男が五

万といるのに…ねえ？」
「〜〜〜黙れッッッ！！！」
「そ〜ら、またそれだ」
言って、男はチラリと上目遣いにルルーシュを睨め付ける。
「今回ばかりは、黙って従ってあげたい気分だねぇ。そのほうが、きみを効率的に苦しめられそうだ」
ルルーシュは、これ以上何を言って聞かせるつもりだと、怒りに全身を震わせながら男を見上げる。
男はにわかに半眼に目をすがめると、殺気さえ漂わせながらルルーシュを見下ろした。
「少しは冷静に考えてみたまえよ。万が一きみの心配していることが事実だとして、その場合は、きみが私を殺す以前に、私が、きみを、殺しに訪れるはずだとは思わないのかね？　ええ？」
「……え？」
ルルーシュは、茫然と目を見開いたまま散逸する思考を持て余し気味に呟く。
身長差で、相手を見下ろしているのはルルーシュのほうなのに、男はその居丈高な雰囲気で露骨にルルーシュを見下しながら続ける。
「まだ、わからないのかね？　せっかく私がわかりやすく、きみは根本的な誤解をしているよと教えてあげたばかりだというのに」
「……そんなの、いつ……」
ルルーシュは呟いて、突然ハッとした様子で目をしばたたいた。
「おまえっ……ひょっとして……ッ？！」
男はヤレヤレと疲れた様子で首を振る。
「あんまり同じことを何度も言わせないでくれたまえ。集合無意識の嫌がらせでどうやって人の性別が簡単に変えられると思うのだい？　私と彼女は肉体も含めた存在そのものが、入れ替わって、いるのだよ。今ごろ彼女はCの世界でぐっすりお休み中さ。私はピーピングが趣味だからね、遠慮なくコードを媒介に記憶を覗かせてもらっているが。賢しいきみのことだから、いずれは気付いて誤解する

はずと察していたからね。親切心でわざわざこうして訪れてやったわけだが、人の言うことを素直に聞かないきみが悪いのだよ？」
「〜〜〜だったら、最初からまともな順序で話せばいいだろうがッ！！！」
ルルーシュが至極もっともなことを憤然と息巻くと、男はフッと肩を揺らして笑って、これ見よがしに乱れていない前髪をかき上げた。
「それのどこが面白いんだい？　私の唯一の愉しみは、きみを弄ぶことだというのに」
「〜〜〜帰れッッッ！！！」
ルルーシュは、思わず手近にあったクッションを掴んで投げつけた。
男はヒョイと必要最低限の動きでそれを避けると、少し慌てた様子で壁の時計を眺めた。
「おっと、いけない私としたことが、５分過ぎてしまっているよ。それでは、またね」
男は華麗に「アデュー！」と言い残して、「ハッハッハッ！」と笑い声も高らかに颯爽と帰っていった。
まんまと男の策略に嵌る形で、連続１３回まで記録を更新してしまったルルーシュは、閉まるドアに向って手当たり次第に物を投げつけた。
はーっ、はーっと荒々しく肩で息をしながら、念のため閉じたドアの向こう側を確認してみたのだったが。
「おまえ……ッ」
驚いたことに、男はまだそこに立っていた。
思わず威嚇するようにしてそう呟くと、男はどことなく憮然とした表情で、
「ちょっと落ち着きたまえよ、きみ」なぞとほざいて前置きし、
「肝心の忠告を忘れていたのを思い出したのだよ、感謝したまえ」
と言い訳がましく続けた。

「はァ？　さっきもおまえ、同じことを言ってなかったか？」
ルルーシュが至極冷静に事実を指摘してやると、チッと小さく舌打ちして嫌そうに顔を顰める。
どうやらルルーシュをからかうのに夢中になりすぎて、本気で来訪目的を忘れていたらしい。
不快げに肩をすくめた際にサラリと流れ落ちてきた、そこだけは腹の立つほどにC．C．と同じ美しい緑の髪を無造作に払いのけると、言った。
「きみのような男はね、最初の一歩が歩み出せると案外あとが早いのだよ。だから、私もいささか身の危険を感じてね」
ルルーシュは、沈黙を守ったまま顎をしゃくると「いいから、さっさと話せ」と促した。
男は、言う。
淡々と。

「お願いだから、近い将来きみの希望が叶っても、彼女とバスルームで愛し合うのだけは止めにしてもらえるかい？」

「どうしておまえにそんなことを言われなくてはならない？」
の、「どうしておまえ」まで言ったところで、ルルーシュは立っている気力を失くして、ガックリその場に蹲る。
そして、拳を固めると手近な壁をガンッ！　と力いっぱい殴りつけた。
男は、「気付いてくれたようで満足だよ」ともっともらしく頷いた。
「風呂の湯に浸かって3分で私と交代してしまうからね？　そのスリルを味わうというなら話は別だが、頼まれてもサカってる男の裸なんか見たくないものでね。万が一の場合は、遠慮なく私がきみを殺すよ？」
では、頼んだからねと言い置いて、男はスタスタと去っていった。

おそらく今から部屋に戻って、風呂に浸かり直して、Cの世界で眠っているC．C．と何事もなく交代するのだろう。
ルルーシュは、その背中を見送る気力もなく、手当たり次第にガンガンと手近な壁を殴り続けた。
実はひそかに念願だったのに。
あの綺麗な髪を洗ってやって、自分の髪も洗ってもらって。
もちろん、他の部分も洗ってやって、洗ってもらって。
そのあとは……。
ようやくキスを交わせたわけだから、男子たるもの期待して当然じゃないか？
自分達の性格だったから、早々簡単にコトを進められることもないくらい重々承知していたつもりだったが。
「……なんなんだよ、このイレギュラーは……ッ」
問題は、肝心のC．C．に入れ替わりの自覚がないことだ。
万が一、億万が一、このまますんなり恋人関係が進展して、
ある日突然C．C．のほうから、「ルルーシュ、一緒に風呂に入らないか？」なんて誘われてしまった日には……。
ルルーシュは暗澹と絶望的な心境で、人知れず暗い溜息を吐き出した。

第一話 ： 邂逅（後書き）

ちょっと特殊な設定ですが、こんな感じでしばらく続きます。
宜しければお付き合いくださいませ♪

第二話 ： 困惑

私の名前は、セラ・チャールズ。
もちろん偽名だ。
アッシュフォードで暮らしてゆくために、ルルーシュが用意した仮の名前だ。
シャルルたちの計画していた神殺しを阻止した後、私を連れてアッシュフォードに戻ったルルーシュは、「おまえも一緒に通え」と当然の顔をして命令した。
いったい何の冗談かと訊ね返したら、ルルーシュは怪訝そうに、「前に約束しただろう？」と答えた。
私は、「ああ、そういえばそんな話をしたこともあったかな」と少し懐かしいような気分でそれを思い返した。
ブリタニアをぶっ壊すために毎日戦いに明け暮れていた日々。
ルルーシュの知らないところで着実に私たちの関係は破滅の道を歩んでいたけれど。
ふとした際にそんな日々にすら愛しさを感じないではいられなかった私は、真実魔女の心を宿しているのだろう。
私が騙していることにも気付かずに、いざとなったらいつだって惜しみなく心からの優しさで接してくれた私の愛しい共犯者。
だからそのときも私はルルーシュの気持ちだけをうれしく受け取って、約束の実行にはさして興味を抱いてなかったのだ。
しかしルルーシュは、まんまと約束を実行して叶えてしまうと、私の目前に編入手続き用の書類を山ほど用意して、「おまえの真名を公表するつもりだが、構わないか？」と書類を書き込む片手間に訊ねてきた。
私は一瞬ためらって、「勘弁してくれ」と答えた。

自分でも何がマズイのか良くわからないのだが、ルルーシュ以外の人間にその名前で呼ばれるところを想像して、なぜだか無性に胸の奥のほうが不快にざわめいた。
ルルーシュは、そんな私の表情を何も言わずにじっと見つめて、「本人が嫌というのに、無理強いをする必要はないからな」と話題を変えてしまった。
「だったら、好きな名前は？　自分で決めるのが一番だろう？」
妙に優しげに聞こえる声でふたたび問われて、私はまず一番に、『ルルーシュ』がいいなと考えた。
シャルルの命名だが、舌の上に乗せると響きがとても心地好く、何より耳触りの良さが気に入っていた。
だが問題は、ルルーシュは既に目の前に存在していることだ。
「今日から私がルルーシュだ。おまえのほうが改名しろ」
とためしに言ってやるのも面白そうだったが、実際には「おまえに任せる」と私は早くも責任を放棄した。
この調子でいちいち頭を悩ませ続けていたのでは、十中八九編入前に飽きてしまうことが想像できてしまったので。
ルルーシュはそんな私をまたじっと見つめてきて、じきに溜息を噛み殺しているような顔をして見せた。
ひょっとして、面倒だと思わせてしまったのだろうか？
だったら、適当に知人の名前でも借りれば良いと思ったが、そのときにはもう既に次の話題に移っていたので、私は結局名前の件にはノータッチが確定してしまった。
ルルーシュは、こういうところが余裕がないなと私は思う。
それとも単に、私と感じている時間の感覚が違うせいだろうか？

そして、翌日。

「セラ・チャールズという名前ならどうだ？」
と顔を合わせるなり、ルルーシュは私に聞いてきた。

セラ・チャールズ。
チャールズ。
あいにくセラという名前に覚えはなかったが、記憶の中の数多のチャールズが一瞬私の脳裏に錯綜して、明確な形をなす前に記憶の片隅に消えてしまった。
けれども、そう悪い人間はいなかったような感じがする。
「何か思い入れのある名前なのか？」
ひょっとして、何か意味のある名前なのかと疑問に思いながら訊ねると、なぜだか目の下に薄いクマをこしらえているルルーシュは、憮然とした表情で私の片手を掴み取り、Ｃｅｌａ　Ｃｈａｒｌｅｓとスペルを記入した。
なるほど、言われてみればイニシャルがＣ．Ｃ．だ。
「ひょっとして、この先も私をＣ．Ｃ．と呼ぶつもりか？」
「そのつもりだが？」
それ以外に何と呼ぶんだ？　と怪訝そうな顔をして言われて、私は即座に「この名前でいい」と答えた。
自分でも理由はわからなかったが、たしかに私はうれしかったのだと思う。
その足で、私たちは町のデパートに買い物に出かけた。
私が住む予定のマンションは、既にルルーシュが勝手に決めて契約を済ませてしまっていたので、この週末にも家具が揃い次第移り住む予定だ。
今回新たに私のために仕立て直した学生服。体操着にスクール水着、学生鞄に筆記用具、教科書などが揃い始めると、さすがの私も『冗談ではなかったのだな』と観念するような気持ちが沸いてきた。
だから必要に迫られて、もう少しだけルルーシュに、いやルルーシュの財政力に甘えることにしたわけだ。
「どうして俺が」とこの期に及んで嫌がるルルーシュを連れて行った先は、女性ものの下着売り場。
下はともかく、上のほうは詳しいサイズを測る人間がいなかった

ので、今までずっと私がいらないと断っていたのである。
けれども、さすがにノーブラで学生生活を送るのは、私は良くても周りの学生たちが迷惑だろう。
「なァ、ルルーシュ？　この寄せて上げるのと、そうでないのとでは、どっちが学生にふさわしいんだ？」
単純にわからなくて訊ねると、ルルーシュは首元まで真っ赤に染めながら、
「そんなの俺が知るわけないだろう」
ロクにこっちを見もしないでそう答えて、通りすがりの女性店員にアドバイス役を押し付けると、自分はさっさと最寄りのカフェに逃げ出してしまった。
その後ろ姿を見送りながら私は、『まだ童貞だったのか』と少しばかり驚いた。
ブリタニアの皇子でも何もなく過ごしていた一年のうちに、付き合っていた女の一人くらいいても不思議ではないと思っていたので。
「本当にお優しいお兄様ですね」
そんなルルーシュの背中を熱っぽい視線で見送りながら、年若い女性店員に「どのようなデザインがお好みですか？」と訊ねられ、私はニッコリ上品に微笑みながら、
「今の男が喜びそうなのを」
と答えた。
たちまち店員の笑顔が凍りついてしまったが、要するに初対面の女すら、ものの数分で簡単に惚れさせてしまうのがルルーシュなのである。
そんな男がなんでまた…と私は、釈然としない心境で物憂い溜息を吐き出した。

◇　◇　◇

見た目の年齢が近いというだけの理由で、一緒に過ごすことになった高校一年の男女たち。
彼らに囲まれながら過ごす環境にもちろん緊張など感じはしなかったが、ただひたすらに厄介だった。
どうしてそんなに他人に対して熱心に興味を抱けるのかと感心させられる。
もっとも、男子学生たちの興味は、ルルーシュが意図的に予防線を張ることでそのうち薄れてしまったが。
逆に一段と騒がしさの増してしまったのは、女子たちのほうだった。
「ねえねえひょっとしてセラちゃんってさあッ！」
「ああん言わないで～ッ！　ルルーシュせんぱいィ～ッッ！！」
心配性で、構いたがりのルルーシュが私の前に姿を現すたびに、いちいち絶叫する勢いで慌てふためく。
その様子を眺めながら、よくもまァそんなくだらない内容でいちいちエネルギーを消費できるものだなと、私は呆気にとられた。
まさしくこれが、彼らが生きている証なのだ。
毎日こんなふうに理由を見つけて騒いででもいなければ、若さというエネルギーを持て余してしまうから。
見た目の年齢が近いだけの私には、逆立ちしても真似できないことだなとつくづく思った。
そして。
本来ならばルルーシュも、彼らにごく近しい存在なのだ。
けれども、ルルーシュの精神構造は既にもう枯れている。
彼が過ごしてきた今までの人生経験が、彼から若さというエネルギーを過剰に消耗させてしまったのだ。
そうした時間の果てに、ルルーシュは今、私に恋をしているなど

と告げている。
馬鹿馬鹿しい。
子供のうちに枯れてしまった少年が、人生の果てに枯れてしまった女に特別な感情を抱いてしまうなんて。
馬鹿げた錯覚をするにも程がある。
ルルーシュから「好きだ」と言われた瞬間に、とっさに私は「考えさせてくれ」と答えてしまったが、本当に言ってやりたかったのは、「お願いだから早く目を覚ましてくれ」だ。今のルルーシュは、たまたま私が女で、ルルーシュが男だったから、戦友に対する特別な執着心を恋情と履き違えているだけなのだから。
よっぽど無断で姿を消してやろうかと思ったが、それを実行に移すためにはルルーシュに対する自責の念が過剰でありすぎた。
正直、どう対応すればいいのかわからぬままに漠然と過ごしていた一ヶ月間。
けれども、次第にルルーシュが私に求めている立ち位置が明確になってゆくつれ、少しくらいならルルーシュの若さを取り戻すために協力してやるのも悪くはないかと考えるようになっていた。
今まではすべてのエネルギーを注ぎ込み、世界に反逆し続けてきた男。
その男が、ようやく望んでいたのに近しい安寧の場を手に入れて、ひとときホッと安堵したがっているだけなのだ。
基本的に頭の良いルルーシュのことである。
そのうち平和な日常が当たり前になってしまえば、放っておいても憑き物が落ちたように目が覚めて、ごく自然の成り行きとして世間一般の女子たちにも心を開くようになるであろう。
それまでしばらくの間なら、付き合ってやるのも悪くはないと私は考えた。

◇　◇　◇

やがて表面上は何事もなく開始された新生活。
返事を待ってもらうという口実で、結局はまたルルーシュを騙しているだけ。
その自覚に、しばしば私は胸を痛めたが、今回ばかりはルルーシュに自力で目覚めてもらわないことには私にはどうしようもないことだ。
だから、この際私もスッパリ割り切ることにして、積極的に与えられた学生生活を満喫した。
毎日の授業についてゆくのは、それまで一度も経験のない私にはけっこう大変なことだったが、編入する前後一ヶ月のあいだにルルーシュに付きっ切りで基礎学力を叩き込まれていたおかげで、なんとかボロを出さずに済んでいた。
どころか、物心がついて以来、毎日当然のように学生を続けている少年少女たちに比べれば、我ながら勤勉な学生ではないかと感じている。
とにかく毎日新しい知識を習得してゆくのが、自分でも意外に思えるほどに愉しくて。
生まれて初めて、『学ぶ』という権利を与えられているのが、純粋にうれしかったのだと思う。
ルルーシュもまた、そんな私の向上心を巧妙に煽り立てるのが本当に上手くて、毎日の家庭教師を続けながら、簡単なミスを発見するたびに、「授業でいったい何を聞いていたんだ？」と容赦がない。
そして、何よりムカつくことに、ルルーシュは私が意外に飽きやすい性格であるのも知っていた。
その対策として用意したのが、毎週末に実施している小テストである。

満点を取れたらピザ食べ放題。
逆に、平均点以下だったら、ルルーシュの分まで一週間、昼の弁当を作らされる羽目に陥る。
今のところの勝率は、５勝２敗でルルーシュのほうが優勢勝ちだ。
「おまえ、歴史と語学は得意だと油断しているだろう？　だからほかの教科よりも授業に身が入らないんだ」
ほくそ笑みながら、採点したテスト用紙をヒラヒラと私の面前に差し出して。受け取ってみれば、どちらも９０点台だったそれに、業を煮やした私が本気を出して、辛うじて勝ち取ったのが満点２勝。
もちろんその足で町のピザ屋に向かって、吐きそうになるまで好きなだけピザを注文してやったが、散財させられたルルーシュはなぜだか終始ご機嫌だった。
告白の返事を催促されたのは、別居を切り出したときの一度だけ。日常的にはもっぱら、『こいつのどこが惚れてる女に対する態度なんだ』とむかっ腹の立つ場合のほうが多かったが、ふとした際にうまいこと手のひらの上で転がされているのを自覚させられるたびに、平然と澄ましている横顔にピシャリと平手打ちをお見舞いしてやりたいような気分に駆られてしまう。
「セラちゃんって、本当に良くそんなことまで知ってるよねえ」
それに比べれば、クラスメイトたちの反応の何と清々しいこと。
編入してしばらく後に実施された学力試験では、ルルーシュの張ったヤマがドンピシャだったせいもあり、私は学年でも１０位以内の成績を収めていた。
だもので、仲の良いクラスの女子には勉強を教えてくれとせがまれる。
教えるためには、自分がまず確実に理解していなければならない。
その頃ルルーシュは、もう既に毎週末ごとの小テストを終了させていたのだが、何のことはない結果的に私をそうした状況に追い込むのが目的だったのだ。
そして、気付いたときには遅かった。

ルルーシュだけを相手にしていた時代には、
「本当に、ロクでもない知識だけは豊富だな」
と大変可愛らしくない言葉一つであしらわれていた私の耳には、クラスメイトから何気なく言われる賛辞がクセになるほど心地好く。勉強以外にも知識の開示を求められると、ついついうっかり「ああ、そういえば、人から聞いた話だが」とロクでもない知識の一つをポロリと口走ってしまいたくなってしまう。
だからと言って、歴史の教科書にまでダメ出しをしてしまったのは、正直やりすぎだったと反省している。
担当の教師も、「何をバカなことを」と鼻先であしらっておけば良いものを、変に真面目な性格だったものだから、関係各所に律儀に問い合わせをしてしまって。逆に専門の研究を進めていた大学から、「いったい誰からその話を聞いたんだッ？！」と追求される騒ぎに発展してしまって、結果的にルルーシュの手を煩わせる羽目に陥った。
「おまえは今まで何百年も生きてきて、言っていいことと、悪いことの区別もできないのか？」
ひたいに青筋を浮かべながら言われた苦言が今でも耳に痛い。
しかし、そもそもおまえがいつもそういう態度だからと内心で愚痴を吐いていると、ルルーシュは、
「だが、積極的に馴染んでいる点には感心だ」
などと、今にも私の頭を撫でそうな雰囲気で、ひどく寛容な笑い方をして見せた。
もちろん私はとっさに、「おまえは私の保護者か」と毒づいてしまったが、その感覚が決して悪くはないと感じている自分が、目下のところ最大級に不可解な変化の一点だ。

◇　◇　◇

やがて二ヶ月も経過した頃には、既に家庭教師の必要もなくなっていた。
ルルーシュはもちろん不服そうに期間の延長を要求してきたのだが、私のほうからきっぱり断った。
そうやって少しずつルルーシュから離れてゆくのが目的だった。
しかしルルーシュは、意識的にそれを皆無にさせないために私にある習慣を押し付けた。
毎日のお弁当作りである。
くだんの小テストの罰ゲームとして勝ち取った5週を利用して、ルルーシュはせっせと自分の好みを私に教え込み、小テストの期間が終了すると、「明日から毎日作ってくれ」と当然の顔をして要求した。
何もわざわざ私の作るマズイ弁当を食べなくても、むしろ「おまえが作れ」と言ってやりたい気分だったが、『好きな女に料理を作らせる』という行為に憧れを感じる年頃なのだろうと納得して、渋々作ってやっているような毎日だ。
毎朝マンションまで迎えに来るルルーシュに、できたて熱々の弁当箱を渡して、空いた容器は私が帰りがけにルルーシュの部屋まで取りに出かける。
依然として多忙な男だったから、その際に顔を合わせるのは滅多にないことだった。
だから私も、そのときだけは楽な気分で足を運んで、たまには懐かしの部屋でひととき寛いでから夕飯の材料を買いに出かける。
弁当を作る必要さえなければ、適当に外食で済ませてしまいたいところだが、どうにもその辺りの事情を見透かされているような感じがする。
「なんかおまえ本当に、私の亭主気取りの態度だよな」

思わずそんなふうな愚痴を洩らしてしまったのは、いつのことだったか。
あれはそう、ルルーシュがまだ私の家庭教師をしていた頃。
毎日新しく机の上に用意されているルルーシュ手製の問題集を解くために、私は毎日放課後ルルーシュの部屋に足を運んでいた。
時間にすれば、およそ3、4時間。私がすべての問題を解き終えた頃にルルーシュは部屋に戻ってきて、その場で採点をされると同時に、間違っていた箇所の説明を受けていた。
表面上はルルーシュも平凡な学生の顔を続けていて、何くれとなく私の世話を焼いてくれる一方で、枢木スザクへのゼロの引継ぎも進めていた。
もちろんその間にも作戦の総指揮はルルーシュが一身に担っていたわけだから、時間的にも精神的にもかなりの負担になっていることには当然ながら気付いていた。
だから、怒らせるつもりでそう言った。
たしかに慣れない学生生活ではあるけれど、1週間もしないうちに大体のコツは掴んでいた。
私も子供ではないのだから、わからないことがあれば自力で調べて、適当な人間を捕まえて解決する方法くらい知っている。
何もルルーシュの手を煩わせる必要はないのだ。
けれども、そんな私をあしらい慣れているルルーシュは、いつだって傲然と鼻の先で笑い飛ばしてくれたものだった。
「亭主気取りが不満なら、即刻『気取り』を失くしてやっても構わないが？」
いつも対面で腰を下ろしている勉強机。
決して返事を催促するような真似はしないが、早々にあきらめてくれるほど寛容でもない。
どころか、私が好意的な返事を寄越すものと決めて掛かっているような節がある。
こうなれば我慢比べのようなものだった。

ルルーシュにあきらめて欲しい私は、意識的にルルーシュに愛想を尽かせるための失言をくりかえす。
その理由が理解できないでいるルルーシュは、いつだって寛容なフリをして私の失言に耐えている。
意味のないことなのに。
なぜならルルーシュがどれだけ寛大に私の返事を待ち続けても、私は決してその答えを返さない。
私は、ただの一度もルルーシュに望みを抱いたことはないのだから。

◇◇◇

「……本当に優しい男はな、ルルーシュ？　私のような女には触れずに、自由に放り出してくれるものなんだぞ？」
いったいどれほどの人間と契約を交わしてきたことだろう。
中でも一番多かったのは、最終的に私を憎んだ者たちだ。
中には、まれに最後まで私に優しくしてくれた者もいた。
そして、中には奇特なことに、ルルーシュと同じように私を愛してくれようとした者もいた。
けれども、感情的な問題以前に、不老不死の私が生身の人間である彼らと共に生きられるはずもない。
そのことに気付いた者たちは、なるべくなら傷の浅いうちにと、積極的に私を手放す道を選んだ。
友情程度の情愛ならば、私だって耐えられるのだ。
けれども、ルルーシュが差し出してくれているような愛し方は、私のほうが耐えられない。

だから私は、今日まで独りで生きている。
しかしルルーシュは、これから先の人生を、そんな私と共に生きる覚悟を決めている。
鈍感なのも大概にしてくれと言ってしまいたかった。
おまえは私に、おまえの死に水を取らせるつもりか？
いずれ死にゆくおまえは、それでも構わないかもしれない。
けれども、後に残される私の気持ちはどうなる？
おまえの生涯を通して大切に大切に愛されて、愛された実感だけを心に携えて、ふたたび不死の地獄へ舞い戻らせるつもりか？
おまえが私に与えようとしているのは、そういう愛し方だ。
今まで誰一人として実行したことのない、残酷な愛し方だ。

◇　◇　◇

訪れてみれば、今日も無人だったルルーシュの部屋に私はひとり足を運んで、いつものように机上に置かれた弁当箱を何気なく取り上げた。
その下に挟まれていた手書きのメモを見つけて、思わず泣いてしまいたい衝動に駆られる。

――C．C．、おまえこの週末空いてるか？

メモをめくるとその下に、さりげなく重ねて置いてあった二枚のチケット。

そのときルルーシュはよっぽど虫の居所が悪かったのだろう。私の態度が原因で簡単に追いつめられてしまったルルーシュは、口では何も言わずにソファの端まで私を追いつめた。
ほとんど押し倒されているような格好で強引にキスを迫られて、とっさに臆してしまった私は、卑怯にもそこから逃げ出すためにＦＭラジオをＢＧＭに選んだ。
そのとき流れていたショパンの調べ。
なんとなく二人で何も言わずに最後まで聴き終えて、私は途中からしか聴けなかったのを理由に、ルルーシュを音楽室にせき立てた。
ルルーシュは決まり悪げに、「勉強中だろう」と口では文句を言いつつも、曲の途中でしっかり理性を取り戻していた様子で私のワガママに応えてくれた。
だから私は、もうすっかり満足していたというのに。
「……自覚のないというのは、本当に罪だよなァ…」
今日はもう帰ってくる予定のないことは、事前に聞いて知っていた。
だから決してルルーシュの前では見せない表情で、震えてしまう声を隠しもしないで私は呟く。
おまえの自制心とか、私に対する過剰なやさしさとか。
そんなものがあまりに意味もなく費やされてゆく空しさ。
おまえが愛するにふさわしい人間は、もっと別にいくらでもいるはずだろう？
それでも真実魔女の心を持ちえる私は、平然と与えられたチケットを一枚だけ抜き取ると、大切にそっと懐の中に忍ばせた。
そして、一枚目のメモの余白に、『仕方がないから、付き合ってやる』と出来るだけそっけない文字で書き殴る。
「もっとも、おまえの人生には……まだ付き合ってやれる自信はないけどな」
愛情というものは、思いあう二人で育ててゆく感情だ。
すなわち、私がルルーシュの気持ちに応じれば、嫌でも育ち始め

てしまう感情だ。
そんなものを育てて？
その先の人生を私ひとりでいったいどうして歩んでゆけばいいんだ？
こんな思いをするくらいなら、いっそのことシャルルたちと一緒にCの世界に呑まれて消えてしまえば良かった。
そうすれば必然的に、放っておいてもルルーシュは、私という存在の呪縛から解放されたはずだから。
心優しいおまえのことだから、そのうちきっと気付いてしまうのだろう。
二つあるコードのうちのひとつは、シャルルの消滅と共にCの世界に呑まれて消えてしまった。
ルルーシュがコードを継承していない事実は、ほかでもない私が一番良く知っているのだから。
ひょっとするとルルーシュは、時機を見て私から無理やりコードを奪うつもりでいるのかもしれない。
けれども、まさしくその瞬間が、私たちの別れの瞬間だ。
おまえに私の味わってきた地獄を味わわせるくらいなら、私はおまえに恨まれても離別の道を選択する。
だからいっそそうなる前に、誰でもいいから適当に好きな女を見つけて、勝手に幸せになってくれたほうが今より数倍ありがたいのに。
私のほうこそ、心置きなく幸せな世界を満喫できるのに。
人知れずおまえの幸福を見届けることで、私は今まで誰からも味わうことのできなかった最上の幸福を味わうことができるのだから。
「……お願いだから……助けてくれよ……マリアンヌ……」
本当に頼りたいときにかぎって、頼れる人が誰もいない。
このままではきっと、取り返しのつかない事態にはまり込んでしまうのが目に見えている。
最悪の事態に陥っても構わないから、たとえひとときだけでも構

わないから、心ゆくまでルルーシュに愛されたいと望んでいる。
Cの世界でルルーシュに「好きだ」と伝えられた瞬間に、本当はそう叫んでしまいたかった。
今なら私がそれを望みさえすれば、それこそ喜び勇んでルルーシュが望みを叶えてくれるのだ。
それを知っていて、どうしてその誘惑から逃れ続ければよいのだろう？
そのうちきっと、我慢なんて瓦解するに決まっている。
与えられるままにルルーシュの愛情を独り占めにして、自分のほうからも心ゆくまでルルーシュを愛してみたいと思ってしまうに決まっている。
ゆくゆく苦しむのは私自身だとわかり切っているのに。
「……どうして私に、こんな決断を迫るんだ……ルルーシュ…」
今まで私が騙し続けてきて、今もまだ最悪の方法で騙し続けている男。
結局それ以上は我慢することができなくて、私はルルーシュの弁当箱を腕の中にしっかり抱きしめながら、無人の部屋で声を殺して泣いた。

番外？：十二月

今にも小雪が舞い始めそうな曇天の昼下がり。
ルルーシュは、自分の隣りでハフハフと物を食む音をさせながら、しきりにモクモクと白い湯気を立ち上らせている相手の様子を、視界の端ギリギリのところで眺めながら、ハァ…と嫌そうな溜息を吐き出した。
「……よくもまァ、そんなに食べられるものだな？　しまいには、見ているこっちの胸が悪くなる」
「やらんぞ？」
「要らん！」
そもそも人の話を聞けよ。
ルルーシュは、気だるくハァ…と濃い息を吐き出しながら、憂い顔で少々伸び気味の前髪を掻き揚げた。
本当は、髪を切る予定だったのだ。
それなのにC．C．が、「ヒマだ」と騒いで見せるから、目的も無いのに早朝から外出させられる羽目に陥った。

◇　◇　◇

『どこか景色の良いところで、朝陽が見たい』
寝る前に、毎日交わすのが定番になっている携帯メールで。

目的の無いまま、行動を起こすのが気持ち悪かったので、『どこか行きたいアテでもあるのか？』と訊ねたら、返って来た返事がそれだった。

『どこかっておまえ、明日の予定は？』

『特に無い。一日ヒマだ』

『一応試験休みのハズなんだがな』

『フン、どこかの誰かと違って、毎日真面目に勉学に勤しんでいるからな、大丈夫だ』

たしかにアッシュフォードに編入した当初には、一部の教科で随分と教えていたルルーシュを手こずらせたものだったが。最近は、放っておいても自主的に、学年でも優秀の部類に入る成績をキープし続けているのは知っていた。

一方、学生の身分を続けながら、傍らでは枢木スザクとゼロの仮面を共有する形で、黒の騎士団のＣＥＯも続けているルルーシュは、相変わらず多忙な毎日を続けていた。

それを承知で皮肉を言う相手に、ルルーシュはフンッと鼻の先で苦笑を洩らした。

『放っておけ。単に、俺は短期集中型なだけだ。本当に大丈夫なんだな？』

『しつこい』

『うるさい』

『黙れ』

『こっちの台詞だ』

矢継ぎ早に短い送信を繰り返して、ルルーシュは返事を待たずに自分のほうから先に訊ねた。

ルルーシュに比べれば、まだまだ携帯電話の扱い方に慣れていなくて、余計に入力時間が掛かるのを知っているから出来る早業だ。

『朝陽なら、今から寝て起きても三時間ほどしか眠れないが。おまえ、起きられるのか？』

『おまえが起こせば問題ない』
『論外だ。携帯のアラームをセットしておけ』
『使い方がわからん』
『毎朝使っているはずだろう？』
『あれは、おまえがセットした時間に勝手に鳴るだけだ。私の関知するところではない』
どうりで、学年の行事などで起床時間が変更になる場合には、「私の指定する時間に、おまえが朝から電話をかけて来い」とうるさく求めてきたはずだと、ルルーシュは軽く頭を抱えた。
『わかったから。俺が部屋を出る前に電話してやる。１５分もあれば、着替えには充分だろう？』
ルルーシュがＣ．Ｃ．のために借りてやっている単身用のマンションへは、ゆっくり歩いても１５分ほどの距離だった。
だからルルーシュの気持ち的には、かなり妥協したあげくにそう切り出したつもりだが、
『必要ない、着たまま寝るからな。着いたら、部屋のチャイムを鳴らしてくれ。すぐに出られる』
ルルーシュは、やっぱり頭を抱えながら軽く唸った。
『おまえな…、一応こっちはデートのつもりなんだからな？　前に買ってやったブラウスと、チェックのスカートがあるだろう？　アレを着ろ。部屋の前で待っててやるから』
その返信には、３０秒ほど余計に時間を要した。
『悪いな。どっちも洗濯中だ』
どうやら確認のために席を外していたらしい。
ルルーシュは、グッタリ疲れの増したような気分で、溜息混じりに返信を打ち込んだ。
『洗濯前の間違いだろう？　無精をするのも大概にしろ。そろそろ寝るぞ』
『おやすみ』
そっけなく返されてきた返信をしばらく無言で眺めて、ルルーシ

ュはそのまま携帯電話を閉ざした。
どうせその返信すらC．C．は、『O（オー）』の一文字しか入力していないことを知っているからだ。
おはよう、おやすみ、おまえな、おまえが――
携帯アラームの扱い方も知らないクセに、変換予測機能で楽をする方法だけは知っているのだから。
ベッドの上で寝たままメールしていたのを幸いに、ルルーシュは手早く携帯アラームのセットを済ませると、適当な枕元に邪魔にならないように放った。
そのまま自然と、自分の傍らに空いている空間を眺める格好になり、ルルーシュは、我ながら勝手な男だなと苦笑を洩らした。
毎日C．C．がこの場所に転がっていた時分には、ロクにその女の存在を返り見ることもしないで。いざ、こんなふうに離れた場所で生活を始めてみると、途端にあの女の存在が恋しいように感じてしまう。

――どのみち、今はまだ俺の片想いなんだがな…。

ルルーシュは、気だるく寝返りを打ち直すと、眉間に濃い皺を刻みながら大きな溜息を吐き出した。

◇　◇　◇

そんな風にして、あんまり寝た気のしなかった数時間を経過して、とりあえず無事にC．C．の願いを叶えてやったルルーシュは、こうして今、とあるコンビニエンスストアの前で濃い溜息を繰り返し

ている。
　ものの３０分ほどで、昇る朝陽を眺めるのに満足してしまったＣ．Ｃ．は、真っ白い息を吐き出しながら、「腹が減ったな。ピザが食べたい」とのたまった。
「こんな早朝から、開いているピザ屋など無い」と答えると、Ｃ．Ｃ．はたちまち憮然とした顔付きで、機嫌を４５度ほど斜めに傾けてしまった。
　そのとき初めて、Ｃ．Ｃ．の機嫌の良かったことに気付いたルルーシュは、『勘弁しろよ…』と内心では苦虫を噛み潰しながら、妥協案としてコンビニに足を運ぶことにしたのだ。
　後で冷静に考えれば、そのまま最寄りのファミレスにでも向かっていれば、後々あのような面倒には巻き込まれないはずだったが、そのときのルルーシュには思い付かなかったのだから仕方ない。
　パンやサンドウィッチの類いを中心に、目に付いた商品をいくつか選んで、いざレジに向かった途端に、Ｃ．Ｃ．が不思議そうな声を発した。
「ルルーシュ、これは何だ？」
「は？　――ああ、そういえば、中華まんという手もあったか」
　レジ脇に設置されている保温ケースには、『とろけるチーズ・ピザまん』とＰＯＰが貼られた場所に、手頃なサイズのピザまんが一つ並んでいた。
「食べたいのか？」
「ああ」
「だったら、こっちのブリトーはどうする？　温めずに持って帰るか？」
　Ｃ．Ｃ．は「論外だ」といわんばかりに、「今食べる」と即答した。
　本当に、ピザには異常な執着心を燃やす奴だなと、内心では呆れた息を吐き出しながら、退屈そうに客の訪れを待っていた店員に促して、先にピザまんだけを渡してもらうと、会計を済ませたルルー

シュは数分遅れで先に店を出ていたC．C．の後に続いた。
ところが、ガランと静まり返っている駐車場のスペースで、ひとりでぽつねんと立っていたC．C．は、全身で苦虫を噛み潰した様子を露骨に示していた。
「なんだ、どうした？」
「――なんだ、どうしたじゃないッ！」
「はァ？　ひょっとして、口に合わなかったのか？」
チーズを食べさせておけば、まず文句は言わない女にしては珍しいこともあったものだなと、軽い驚きを感じながらルルーシュが訊ね返すと、C．C．は全身の毛を逆立てながら遠慮なくルルーシュに噛み付いた。
「違う！　これを見てみろ！」
言って、ルルーシュの目前に差し出されたのは、ひとくちだけ齧られたピザまんの断面図。
しかしルルーシュは、その断面図を覗くより先に、ごく薄く生地の表面に残っていたピンクの口紅の跡に気付いて、『なんだ、こいつ化粧をしているのか？』と、なぜだか少しドキリとした。
さりげなくC．C．の顔を横目に盗み見れば、どうやら塗っているのは口紅だけで、ほんのり唇の表面が色付いている程度だったが。怒っているせいで、血色の良くなっている頬の赤みと合間って、何だかひどく可愛らしいようにルルーシュの目に映った。
そんなルルーシュの内心の動揺にはまるで気付かずに、C．C．は憤然とした様子でいきり立っている。
「わかるだろう？　これは、ピザの名を冠するものに対する、許しがたい冒涜だ！」
C．C．が興奮しているおかげで、逆に冷静になれたルルーシュは、じきにピザまんが充分に温もり切っていないことに気付いた。
おそらく仕込んだばかりで、必要な時間の経過してなかったことを、店員がうっかり見過ごしてしまったのだろう。
ルルーシュは溜息混じりに肩をすくめると、ゴソリとビニル袋の

中身を探って、熱めに温めておいてもらったブリトーを代わりに手渡した。
「こっちで我慢しておけ。ピザまんには縁がなかったんだ、あきらめろ」
C．C．は、子供のように素直にそれを受け取ったが、ハラペーニョ味のブリトーを、ものの一分足らずで食べ切ってしまうと、ルルーシュが捨ててしまったピザまんの行方を恨めしそうに見送った。
「……本当は」
「ん？」
「アレはもっと美味しい食べ物なのだろう？」
ルルーシュは、付き合いで選んでしまったカレー味のブリトーを極めて上品に完食して、ハンカチで唇を拭った後でそれに答えた。
「さァな、俺自身は食べたことが無いからな。リヴァルの話では、店によって微妙に味が違うらしいが、結局どこも似たようなものだろう？」
所詮は、１００円程度で売られているようなジャンクフードだ。たいして美味いはずもない。そう、話を続けるはずだったが、
「そうなのか？」
辛うじて、ルルーシュにはわかる程度に語尾を弾ませたC．C．の金色に輝く瞳は、「店によって微妙に味が違う」という部分しか耳に入ってないことを如実に露呈させていた。
C．C．のピザに対する執着心を、まだまだ甘く見積もっていたのに気付いたルルーシュは、あまりの自分の迂闊さに、思わず内心では『勘弁してくれ…』と繰り言を発しながら、相当不本意なセリフを吐き出した。
「……食べたいのか？」
C．C．は、それはもう見事なまでに、嬉しそうに頷いた。
かくして、まったく予定になかったはずの、コンビニ巡りが始まってしまうわけである。

◇　◇　◇

ローソン、セブンイレブン、サークルKサンクス、デイリーヤマザキ、ミニストップ、ａｍ／ｐｍ、ココストア、タイムズマート、ｅｔｃ――

ルルーシュ自身、初めて足を運んだような店が大半で、携帯のナビ機能を活用して、周辺のコンビニ情報をしらみつぶしに集めた。

そのたびピザまん一つを買うのも気が引けて、ルルーシュの手には各店から提供された小ぶりなサイズのビニル袋が、用も無いのに無粋にぶら下がっている。

その傍らでＣ．Ｃ．は、ほど良い加減の上機嫌で、すっかり『にわかピザまん評論家』気取りの風情だ。

「店によって、結構使っているチーズのランクが違うんだな。それが温め具合に左右されて、ピザまんとしての完成形を成している」

「……ああ、そうかい」

他には何とも答えようの無かったルルーシュは、ブルリと軽く身震いしながら真っ白な息を吐き出した。

初めのうちは、缶コーヒーで暖を取っていられたが、そうそう水分ばかり摂取できるものではないし、そもそもルルーシュは、缶コーヒー独特の安っぽい酸味があんまり得意ではなかった。

その様子に気付いたＣ．Ｃ．が、不思議そうな表情で小首を傾げる。

「なんだ、軟弱な男だな。これしきの寒さで」

「おまえな…」

ただでさえ自分は、不老不死の身体をして。その上に、温かい食べ物を引っ切り無しに腹の中に収めているわけだから、寒さを感じ

なくても当然なのだ。
思わずそう憮然と腹の中で呟くルルーシュだったが、
「ッ、……」
次から次にピザまんを抱えていて、身体の内からも、外からも、ほっこり温もりを宿している柔らかな手のひらの中に突然頬を包み込まれて、ルルーシュは一瞬頭の中が白くなる。
C．C．は何だかひどく得意そうな顔付きで、瞳の中にやさしい微笑をたたえている。
「ふふっ、思ったとおりだ。さっきのアレは、チーズの蕩け具合に文句は無かったが、生地の部分が熱すぎだ。食べ切る前に、火傷をするかと思ったぞ？」
そんな話は、すっかり右から左に聞き流してしまったルルーシュは、フラリと誘われるままに、前のめりに頭を傾けた。
「――お、おいっ、ルッ…！」
驚きの表情も露わに、大きく金の瞳を見開きながら、一度逃げてしまった唇を丁寧に口で塞ぎ直した。
その頃には、すっかりピンクの口紅は剥げ落ちてしまっていたのだが、代わりにピザまんの温度に熱せられていた唇は、健康そうな色味で赤く艶やかに濡れていた。
柔らかく唇の間に挟んで食むたびに、ほんのりピザの風味のするのにまたひときわ興味を誘われて、ルルーシュがスルリと口腔内に舌の先を忍ばせると、腕の中で硬直していたC．C．の細い肩がビクリと弾んだ。
ルルーシュは、まるきり間接的にピザを食んでいるような心境で、得られた実感にクラリと思わず脳髄を痺れさす。
――熱すぎだろう？
じきに見つけた舌先といい、上蓋といい、頬の内側の粘膜に感じる温度は、ルルーシュの知っているよりも数倍の熱さを感じた。

これなら少々火傷をしても構わないから、このまま最後まで完食したいような心地に誘われる。
けれども、C．C．が心底困っている様子には、気付いてやれるだけの精神的な余裕があいにくまだ手元に残っていて。ほんの数秒で名残惜しげに唇を離して、ルルーシュは鼻先の距離から言ってやる。
「……こんな安物のチーズで安易に喜ぶな。俺の作ったほうが、よっぽど美味いものを食わせてやれる」
C．C．は、また先とは違った色味に赤く顔の全体を火照らせながら、上目遣いにルルーシュを睨んだ。
「……私は初めて食べたんだ。作り方など、知ったことか」
「だから、教えてやると言っているんだ」
いいから、もうさっさと帰るぞと、ルルーシュがそっけなく腕の中から解放してやると、なぜだかその場に立ち止まってしまっているC．C．は動こうとしなかった。
「……おまえの部屋に行くのか？」
その返答に、ためらう理由を察したルルーシュは、意識的にフンッと人の悪い表情で鼻を鳴らしてやる。
「ああ、掃除をするのに人手が必要なら、遠慮なくおまえの部屋に上がってやるが？」
「お断りだ。勝手に女の部屋に訪ねて来るな」
「人を目覚まし代わりに使っておいてよく言う。いい加減、おまえも肚を決めたらどうなんだ？」
「うるさい、黙れ。何の話だか、皆目検討が付かないな」
そう言いながらも、それを言う目元はしっかり赤いのである。
ルルーシュのほうから、ときおり一方的に親密なキスを仕掛けるようになって以来、C．C．は露骨にルルーシュの部屋を訪れるのさえ倦厭するようになっていた。
他人の目の届かぬ状況で、今のルルーシュとふたりきりになるのが怖いのだ。

だから、平日には毎朝強制的に作らせている弁当の空き箱を回収しに訪れる際にも、事前にナナリーにルルーシュの不在を確かめているのを知っていた。
そんな心配をしないでも、ルルーシュには彼女の意思を無視してまで、関係を急ぐつもりは無いのだ。
が、今の場合のように、思わず理性のほうが勝手に手綱を見失ってしまうような場合もある。

――案外、C．C．に助けられているのは、俺のほうなのかもな…。

ルルーシュは、苦笑混じりに胸の内だけで呟くと、ごくごくさりげなくC．C．の片手を握った。
C．C．は、たちまち驚いた顔をして、とっさに振り払おうと邪険に振る舞いかけたが、
「別に、いいだろう……これぐらい？」
言っている自分の耳が痒くなってしまうくらいに、拗ねているような憮然とした口調で呟くと、しばらく沈黙を守り続けていたC．C．は、ややあって高飛車にフンッと鼻を鳴らした。
「カイロ代わりか？　仕方が無いな、軟弱なおまえに風邪を引かせてしまっては、私がスザクに恨まれる」
ルルーシュも、同じように鼻を鳴らしながら、指を絡めて掴んだC．C．の片手ごと、コートのポケットの中に無造作に手を突っ込んだ。
「そう言えばおまえ、クリスマスには何か予定があるのか？」
「ああ、例の如くミレイが計画を立てている様子だぞ？　『今年はサンバが熱い！』とか叫んでいるのを、クラスの友人が見かけたらしい」
「ナナリーも似たような話をしていたな。その頃俺は、あいにく本当にブラジル周辺に居るわけだが」

「どこが『あいにく』だ。露骨に声を弾ませておいて」
「弾ませたくもなる。年末年始は、あいにくフランスのお偉方と会議ずくめだ」
「フッ、狙って予定を入れているな？　こっそりミレイの耳に入れてやろうかな？」
「止めてくれ。おまえはまだ会長の本性を知らないから」
「おまえの代わりに、スザクをこっちに寄越せば良いだろう？」
「そして、俺の変装をあいつに？　論外だ。天然の咲世子以上に、俺の人格が疑われる」
「何を言う。本性は、立派な性格破綻者が」
「フンッ、そうでもなければ、誰が今のような生活を続けていられるものか」
おたがいに気持ちの面では、臆して逃げているのを自覚しながら、『それでもいい』とルルーシュは思った。
こうした平和な暮らしも、どのみち、そうそう長くは続けられないわけだから。
C．C．の洩らした一言で、彼女が学生生活に憧れているのに気付いた。
だからルルーシュも、迷い無くその願いを叶えてやる道を選んだ。
だが、まもなくルルーシュがアッシュフォードを卒業し、大学に進学する頃には、C．C．を含めた彼の生活が、今より格段に多忙を極めることを知っていた。
だからこそ呑気に愉しんでいられるうちに、ほとんど野放し状態で、C．C．の好きなように振る舞わせている部分もあるのだ。

「――ルルーシュ、きみは本当にそれで後悔しないのかい？」

数日前、スザクに言われたセリフが脳裏に甦る。

――後悔なんか…、するに決まっているだろう？

それでも俺は、その道を歩むことを選んだ。

その上で、おまえとゼロの仮面を共有する生活を続けているわけだから。

無意識のうちにもルルーシュの指先に、力強い圧力が加わっているのに気付いて、控え目ながらにC．C．が横顔を窺っているのに気付いた。

ルルーシュは、肩から力を抜きながらフッと息を吐き出すと、「こんな季節には、やっぱり猫でも飼いたくなるな」と何の脈絡もない呟きを発した。

「猫？　そんなもの、いったい誰が世話をするんだ？」

「別に、咲世子でも、ナナリーでも、喜んで世話をしたがる人間には事欠かないと思うが？」

「だったら、おまえが飼う意味が無いだろう？　そもそも、部屋を汚されるのが嫌いなクセに」

それを言っている本人が、以前には毎日のように口うるさく言われていた時代を思い出しているのだろう。

憮然と言う女の口調に、ルルーシュはここぞとばかりに、人の悪い表情でのたまった。

「誰かさんが、ずっと不在を続けているおかげでな。そろそろ、ひとり寝が寂しくなってきたんだ」

だから代わりに、猫でも抱いてみる気になったのだと匂わすと、一瞬で顔を赤く染めてしまったC．C．は、とっさに邪険にルルーシュの手を振り払った。

けれどもルルーシュは、まったく動じもしなければ、機嫌を損ねもしなかった。

ひとときとは言え、上質なウールとルルーシュの体温に温められていた指先には、にわかの寒風が鋭く感じられた。
その頃にはもうとっくに、ピザまんで温められていた体温も、冬の温度に奪われていたから尚更だ。
もちろん、それを察しているルルーシュは、余裕の態度でC．C．の様子を横目に眺める。
「ん？」
ややあって、小脇の力を緩めながら促すと、C．C．は苦虫を噛み潰した顔をして、それでもじきに自分のほうからルルーシュの腕に腕を絡めてきた。
「……猫を飼う余裕があるなら、代わりに私がもっとこき使ってやる。とりあえずは、手作りのピザまんで手を打ってやるからな、ありがたく思え」
ルルーシュのほうでもごく自然に、掴んだ指先をポケットの奥までリードしてやりながら、口先ではそっけなく続ける。
「なんだ、本気で俺に作らせるつもりか？」
「私は冗談がきらいだと、前から言ってあるだろう？」
「おまえの態度そのものが、今の俺には冗談のように映っているんだがな」
「なッ…私のことをそんなふうに言うのは、おまえくらいだッ！」
「当然だろう？　俺以外に、誰がおまえの本性を知っているんだ？」
他人の目から眺めれば、それこそ子猫同士が戯れているような小競り合いを続けながら、やがてクラブハウスに帰着したルルーシュとC．C．は、ちょうど試験勉強の中休みにお茶をしていたナナリーとリビングで合流して、ひととき雑談を愉しんだ後で、ルルーシュはC．C．を相手に、中華を中心にした料理教室を実施した。
もっとも、C．C．は途中で飽きて放棄して、ナナリーの部屋に逃げ出してしまったが。その代わりに合流した咲世子の手を借りる形で、ルルーシュは中華の満貫全席を作り上げ、久方ぶりに和やかな雰囲気で夕餉のひとときを満喫した。

その帰り道、C．C．の部屋の前まで送って行ったルルーシュは、ふいに思い出した疑問を唇の上に乗せさせた。
「結局、朝陽しか見られなかったが。もっと別に行きたいアテは無かったのか？」
何しろ、丸一日休めるのは、ほとんど一ヶ月ぶりのことだったのだ。
ルルーシュ自身も多忙な学生生活を送っていたから、以前のように同居の関係でも続けていなければ、休日でさえ自由になる時間を確保するのは難しい。
それもあって、今夜はナナリーも、ひときわ嬉しそうな笑顔を振り撒いていたわけだが。
しかしC．C．は、言われるまで朝陽の一件すら忘れていた様子で。なんだかひどく面映そうな表情で、瞳を細めて微笑した。
「願いは叶ったさ。最初に考えていたよりも、二つだけ余分にな」
「ふたつ？　――ああ、朝陽とピザまんと…」

――あとひとつは、いったい何なんだ？

にわかに首を傾げるルルーシュの面前で、C．C．は温和な顔付きで表情を緩めた。
「どうせおまえは、明日も早いのだろう？　咲世子がこっそり愚痴を零していたぞ、少しはあの女の面倒も考えてやれ」
しかし、そうは言っても、機密情報部に監視されていた時代に比べれば、ルルーシュの行動の自由は完全に保障されているも同然だったし、よっぽど生徒会関係で逃れようの無い厄介ごとでも発生しない限り、咲世子の出番は確実に減っているのだ。
要するに、今のそれは純粋に俺の身を案じているのだなとルルーシュは察して、如何ともしがたい気分で眉間に薄く皺を刻んだ。
「ああ、…まァ、そうするさ」
「じゃァ、また月曜日な」

「ああ、そうだな」
そのまま、たがいを見つめあったまま、微動だにしない沈黙の間が幾許か。
ややあって、ルルーシュが顎の先で促すと、C．C．は唇の動きだけで「えらそうに」と呟きながら、愉しそうなクスクス笑いを残して、ドアの向こう側に姿を消してしまった。
ルルーシュは、その背中を見送りながら、噛み殺し切れない溜息をこっそり深く吐き出した。
本音を言うなら、もちろん別れ際にキスを求めてしまいたかった。
けれども、あんまりC．C．が幸福そうに笑ってみせるので、そんなふうな彼女の笑顔を、胡乱な欲求などで曇らせたくなかったのだ。

――おい、片想いってのは、想ってる側が断然不利な関係じゃないのか？

そうした実感を、まるきり思いがけなく手中に収めてしまうが、以前ならそっちの問題を相談していたはずの彼女が、当の恋している本人なのだ。
こんな場合は、いったい誰に相談すればいいんだ？　とルルーシュは眉間に濃い皺を寄せ合わせるが、とっさに浮かんだ友人の顔を、ルルーシュはひとり黙然と歩き出しながら振り払った。

――アイツに、相談できるか。

今でもまだスザクが、ユーフェミアに心を預けているのは知っている。
だが、ラグナレクの接続を阻止した後、ふたりで話し合った一ヶ月の間に、スザクはルルーシュの選んだ道行きを全面的に支持する側に回っていた。

だからこそ、今もああしてルルーシュの命じるままに、ゼロの仮面を秘かに被り続けていられるのだ。
ルルーシュは、にわかに取り戻した現実感に、勝手は承知で物憂い溜息を吐き出しながら、重い足取りでクラブハウスへの道を辿った。
そして、十中八九予想していた通り、風呂から上がって部屋に辿りついた頃には、今は一番対峙したくなかった相手が、定番のソファに優雅に腰を下ろしていたのだ。

「成長したねェ、きみも。彼女も大変喜んでいたよ。まァ、私の話をありがたく拝聴したまえ」

パッと見だけは、C．C．とまるきり同じ顔をして。
けれども、その正体は、まるきり彼女とは別人である謎の男は、信じるならば、自称『先代のC．C．』だ。
彼自身もコード保持者でありながら、千年にも及ぶ放蕩暮らしを満喫し続けた果てに、持ち前の女癖の悪さから身を滅ぼしてしまったらしいのだ。
そんな人物が、何の因果でC．C．のコードと関係を持ってしまったのか。その一点だけに限っては、神殺しを阻止するために、集合無意識にギアスを使用してしまった自分を呪い殺してやりたい気分だが。
ルルーシュは、いつになく冷静な態度を貫き通して、まるきり興味もない様子で、「黙れ」と一言相手の言葉を遮った。
「必要ない。さっさと帰れ」
C．C．と同じ顔をしている男は、もちろんそれを自覚した上で不安そうに、頼りなく瞳を揺らしながら上目遣いでルルーシュを見つめた。
が、それにもルルーシュが、まるきり反応を示さないものだから、じきにつまらなさそうな表情でフゥンと鼻を鳴らした。

「どうやら本当に成長してしまった様子だねェ、つまらない。彼女が語ろうとしなかった願いにも、興味はないのかね？」
ルルーシュは、そんな質問すらあっさり黙殺して、余裕の垣間見える足取りでパソコンのある机の前に腰を下ろした。
そのまましばらく、毎日定期的に送られてきているスザクからの報告書に目を通して、必要な指示を出し終えた後で、おもむろにクルリと振り向いた。
「案外、C．C．の語らなかった願いに興味があるのはおまえのほうじゃないのか？」
その反応を予測してなかった男は、思わずグッと喉の奥を詰まらせた。
ルルーシュは、蔑みの態度も露わにフンと鼻を鳴らすと、クックッと喉の奥を振動させながら、残りの作業を片付け始めた。
背後の男が呆気に取られた様子で、自分の姿を眺めているのに気付いていたのだが、構ってやる必要も感じなかったので、そのまま放置を続けていると、じきに打って変わった静かな口調で、男のほうから訊ねてきた。
「どうしてきみは興味がないのかね？」
ルルーシュは答える。
鷹揚に。
「さァな、俺なら単に、アイツが何を願っても、『アイツらしい』と納得するだけだ。いまさら意外性など感じはしない」
――私を殺せ。
それを言われた瞬間の衝撃を、ルルーシュは今でもハッキリ覚えている。
だが、しかし。
――『私』は誰かに愛されたかった。

数百年前、魔女になる以前の彼女が持ち続けていた願い。
それは、数百年後の魔女の中でも脈々と生き続けている願いであることを、他でもないルルーシュ自身がとっさに願って、信じて、行動を起こした。
「だったら俺は、アイツの願いが何であれ、単純に叶えてやれば良いだけの話だ。叶えてやった内容など、それを願う本人以外が知る必要があるのか？」
本当に嬉しいと感じたとき以外に、あんなふうに笑ったりしない女であることを知っている。
それは、再三共犯者時代に培ってきた経験が、自信の裏づけになってくれている確信だった。
ルルーシュは、自分でそれを言ってみて初めて、胸の内側でほんのりとぐろを巻いていたモヤモヤが、スッキリ晴れていることに気付いた。
誰に相談して、解決できるような問題ではない。
要するに、肝心なのは、自分自身の気の持ちようだ。
考えるほどに、みるみる自信がみなぎってくるような解放感が心地好くて、秘かに上機嫌で作業を続けていたルルーシュの背後で、件（くだん）の男が、それはもう見事に感心した様子で、ハア～と思い入れたっぷりに吐息した。
「……そんなに、人生初の自慰は気持ちが良かったのかね？」
「～～～ッ、～～～～ッ！　～～～～ッッッ！！！」
外部に漏れれば一瞬で、黒の騎士団の存続など露と消えてしまうはずの機密情報を、よりにもよってシュナイゼル宛に送信してしまったルルーシュは、慌てて無線ＬＡＮとパソコン本体の電源ケーブルを引き抜いた。
ハアハアと荒々しく肩で息をしながら、恐る恐る覗いてみたメールの送信状況を確認するまでは、まさしく生きた心地がしなかったが。

思わずホッと胸を撫で下ろした瞬間に、背後から聞こえよがしに言われた男のセリフに、結局ルルーシュは、記録を21回連続まで更新する羽目に陥った。
「いやらしい男だねェ、あんなふうに格好良く彼女をエスコートしておきながら？　返す手で自分は、」
「いいからさっさと帰れッッッ！！！」
手当たり次第に投げ付けられる文房具の類いを、背後に注意を払いもしないでヒョイヒョイと全部避けてしまった男は、いつものように優雅な所作さえ織り交ぜながら、「アデュー！」と陽気に帰って行った。
ルルーシュは、今でもまだ激しく動悸を続けている心臓を抑えながら、そのままガックリ机の上に突っ伏した。

――気持ち良かったに、決まっているだろう？

もちろん、この歳で初めて経験したわけではない。
そこまでルルーシュも初心（ウブ）ではない。
単に今までは、まったくその必要を感じてなかっただけだ。
ナナリーを守ってやるので精一杯で、そんな余裕はカケラもなかった。
だが、しかし。
最近はともすると、そうした緊張感から解放されて、気持ちが一瞬弛緩する瞬間が訪れる。
その隙を付け狙うようにして、思い出して、しまうのだ。
触れたC．C．の唇の感触を。
「――…ッ…」
こんな自分は、自分でさえ浅ましいと思ってしまうから、出来ることなら認めたくはないのだが、それでも実際に身体が反応してしまうのだから仕方がない。
最近C．C．がやたらに警戒心を強くしているのも、案外そうし

た自分の状態を見透かされているのではないだろうかと、思わず頭を抱えたくなってしまう。
こうした反応こそ、スザク辺りに相談してみれば、意外と即座に当たり前のことと頷いてくれそうな気もするのだが。
――考えてみれば、この歳で、そうした相談の一つもできる相手がいないというのも…。
思わず自嘲気味に思考が傾いてしまったルルーシュは、クックッとひとしきり肩を揺らして笑った後で、潔くさっさと寝る準備を始めた。
こうした胡乱な悩みなどを抱えた状態で、シュナイゼルなどに足元を掬われて、黒の騎士団の存続が危うくなってしまったのでは、それこそ笑うに笑えない。
今の自分が、こうして呑気に恋にうつつを抜かしていられるのも、ゼロの仮面を共有してくれる相手があってこその物種だ。
日頃はスザクに頑張ってもらっているわけだから、ルルーシュのほうでも気を抜かずに、選んだ道を歩み続けなければならない。
自分は決して、呑気な男のまま一生を終えるわけには行かないのだから。

◇　◇　◇

風呂上りに使っていたタオルを返すついでに、ナナリーたちを起こしていないか階下の様子を確かめて。
洗面所で顔を洗ってから自室に戻ったルルーシュは、ベッドの枕

元に放置しておいた携帯電話が、メールの着信を知らせて緑色に点滅しているのに気付いた。
さっそく中を開いて確認してみれば、送信相手はもちろんC．C．で、記されていたのは単純に一言。

『おやすみ』

ルルーシュは、丸々一分近くもそれを眺めて考えて、ややあって、手早く返信を打ち込んだ。

『何なら、今から携帯アラームのセット方法を教えるか？　どうせ同じ機種なんだからな、いくらおまえが機械オンチでも、幼稚園児が理解できるくらい簡単に教えてやれるぞ？』

それに返信が返されてきたのは、それからおよそ3分後のことだった。
ルルーシュは、ゆっくり三度ほどその返信を読み返して。
またひとしきり、クックッと肩を揺らして笑った。
やっぱり俺は、この女のことが好きだと思った。
その実感が、なんだかひどく今のルルーシュには心地が好かったのだ。
C．C．は言った。
また例の、変換予測機能を多用して。

『うるさい。黙れ。偉そうな口を聞くな。また必要な時には、私のほうから連絡する。おやすみ』

番外？：三月

――ああ、いまさら確かめるまでもない真実だ。
あの女が、そういった行事全般に興味がないことくらい前々から察していたさ。

それでも、その朝ルルーシュは、妙に浮き足立ってしまう気分を隠して、いつものようにC．C．の住んでいるマンションまで迎えに出向いた。
実際ルルーシュが彼女に惚れている自分を発見したのは、Cの世界で嫌がらせのように「好きだ」と告白してやった瞬間がそれに該当するわけだが、紆余曲折あった果てに、毎朝弁当を作らせる関係に発展し、積極的にスケジュールの調整をしてデートの約束を交わし、たまには一方的に親密なキスまで交わして、俗に言う『付き合っている』状態にあるはずのC．C．は、まったくいつもと同じ顔をして面倒臭そうに作り立てほやほやの弁当箱を手渡すと、
「事前に断っておくがな、昨夜は課題を片付けるのに精一杯で、満足に寝てないんだ。恨み言を言うなら、私でなく社会科の教師に言ってくれ」
と不機嫌そうに言いながら、顎の先でぞんざいに弁当箱を指し示した。
そうは言っても、相手はC．C．だ。妙にずっしり重量感のある弁当箱を抱えながら、ルルーシュはほんのり期待しながら昼食の時間を待ち侘びた。
だが、やっぱり相手はC．C．だった。
「おや、ルルーシュくん。今日の弁当はまた一段と――ある意味、画期的な？」

「――……リヴァル、半分食べたいなら素直にそう言えよ」
「遠慮しまっす！」
ルルーシュは、弁当箱一面に敷き詰められた『おかか御飯（ねこまんま）＋梅干乗せ』を前に無言で肩を震わせた。
しかし、この程度でメゲていたのでは、とてものことC．C．の共犯者は務まらない。
最近、露骨にルルーシュと個室で二人きりになるのを避けているC．C．は、わざわざルルーシュの不在を確認してから、夕方、ルルーシュの部屋まで空いた弁当箱の回収にやって来る。
その後ろ姿を、機密情報部が残していった監視システムでこっそり監視していたルルーシュは、やがてC．C．がクラブハウスを出たのを確認したところで、少しだけ鼓動を早めながら、すばやく自室に足を運んだ。
だが、やっぱり相手はC．C．だった。
「……無い」
監視システムで覗き見ていた限りでは、机の周りでウロウロ、ベッドの周りでウロウロしていたはずなのに、部屋中のどこを探しても、目当てのものは見つからず。
もちろん、手紙の一通たりとも発見することが出来なかった。
これはひょっとして本当に――
いや、まだ決して今日という一日は終わったわけではないのだから――と自分を励まして。
とりあえず毎晩欠かさず寝る前に「送って来い」と強制的に約束を交わしているメールの時間を待ち侘びて、まずは自分のほうから、この先数日のゼロの行動予定などを送ってみたのは良かったが、一時間経っても、二時間経っても、返事が返ってこない。
「……おい、まさか、おまえ……本当に……？」
横目で時計を睨みつつ、呟いてみた時間が２３時５７分。
本当に――本当に、俺は忘れ去られているのか？　と絶望的な心境で睨んでいた携帯電話がわずかな振動を伝えてきた。

ルルーシュは、なぜだか震えてしまう指先を励ましながら、着信したばかりのメールを開封してみた。
だが、やっぱり相手はC・C・だった。
『きょうはねむいまたあすかくにんするおやすみ』
単刀直入に用件だけを伝えてきたメールを読み終えた時点で、午前零時。
ああ、おまえは昔から、そういう女だったさ――とひどく恨みがましい気分で内心に愚痴を吐き出しながら、ルルーシュは、ひとり憮然と眠れない夜を過ごした。

◇◇◇

翌朝、早朝から蓬莱島に出かけたルルーシュは、ゼロの私室でスザクから当面の連絡事項を引き継いで、さっそく艦橋（ブリッジ）に向かっていたところを、別の通路から姿を現したラクシャータに呼び止められた。
「ああ、ちょうど良かったわ。コレ、気持ちだから」
振り向いた鼻先に、ずいと突きつけられたのは、ずっしり重量感のある紙袋。
中には、可愛らしいラッピングのされている小箱が無数に詰めてあるのに気づいて、ルルーシュは、仮面越しにもそうとわかるほど露骨に怪訝そうな顔つきで訊ねた。
『――何かな、これは？』
「あら、知らない？　バレンタインデーだったでしょ、昨日」

『……』
「当日は忙しそうだったからさァ、私が代表で預かっててあげたんだけど。お返しは、まァほんの気持ちでいいからさ」
とにかく受け取ってよね――と煙管（きせる）をクルクル振り回しながら陽気に続けられ、ルルーシュは何とも言えない表情で軽く唸った。
『……そういうわけにもいかないだろう？　せめて礼くらいは伝えておきたいからな、該当するメンバーを教えて貰えるなら手間が省けるが』
「あら、それなら話は早いわよ、玉城とディートハルトを除いた全員だから」
『――全員？』
尋常でない分量から察するに、その可能性は十二分に考慮されたわけだが、そこに至った経緯がわからずに怪訝に問い返すと、ラクシャータはいつもの調子でカラカラ笑った。
「それがねェ、何かの用件で星刻（シンクー）もウチに乗船してたんだけど、カレンちゃんが、ちょっとした軽い気持ちで『一緒にどうですか？』って話を振ってみたら、後で話を聞かされた天子様が間に受けちゃって。天子様が贈るんならってウチの副指令が騒ぎ始めて、隣りにいた藤堂が『それは由々しき問題だ』とか妙なぐあいに深刻に受け止めちゃったもんだからさァ、あとはねェ、もう芋づる式に？」
ちなみに、私からのは一番上に置いてあるのがそれだから――とラクシャータは言い置いて、カラカラと陽気に笑い声を発しながら、颯爽と職場である格納庫のほうに歩み去ってしまった。
ルルーシュは、両腕にずっしり食い込む紙袋を六つばかりもぶら下げながら、途方に暮れていた。
ややあって、ひょっとすると今ならスザクが部屋に残っている可能性を思いつき、その足で自室に戻ってみたが、あいにくスザクは姿を消していた後だった。
仕方なく電話をしてみると、移動の際に暁を利用しているスザクは、まるで他人事のように明るく朗らかに笑いながら言ったものだ。

『でも、それって、ルルーシュ宛てに贈られた品物だろ？　僕が受け取るのってどうなんだろう』
「馬鹿を言うな、あくまで俺ではなくゼロに贈られた品物だ。最近は八割方をおまえが演じているわけだからな、おまえのほうこそ圧倒的に受け取る権利があるはずだ」
　妙な具合に力説するルルーシュの話をクスクス笑いながら聞いていたスザクは、
『さては、チョコレートなんて当分は目にしたくないって心境かい？』
　と、この男にしては珍しく図星を突いてきた。
　義理チョコの１００や２００、万が一Ｃ．Ｃ．に見つかっても、歯牙にもかけないことは百も承知で、それでも念のためクローゼットの中に隠しておいた義理チョコが、今でも甘い匂いを発散させながらルルーシュの帰りを待っているはずだった。
　そっちの始末にも正直困り果てているルルーシュは何も言わずに沈黙を守ったが、スザクは意に介した様子もなくクスリと微笑むと、話を続けた。
『わかったよ、そういう話なら、ありがたく夜食にでも頂戴するから。寝室に運んでおいてくれるかい？』
「無理だな。部屋中がチョコレート臭くて眠れたもんじゃない。隣りの部屋に置いておくから、遠慮しないで食べてくれ」
『はいはい』
　呆れ口調で言ったスザクは、『ところで、ルルーシュ？』と話を続けたが、ルルーシュが唸るような低音で「何だ？」と一声発すると、クスクス笑いながら『なんでもない』と言って、電話を切ってしまった。
　ルルーシュは、ひとり憮然と顔を顰めながら、悪かったな――と憤懣を吐き出した。
　前日あれほど『馬鹿馬鹿しい』と何度も自分自身に言い聞かせつつ、それでもひそかに動揺しながら丸一日中スケジュールを空けて

待っていたにもかかわらず、本命からはチョコはおろか、バレンタインのバの字すら引き出せやしなかったわけだから。
ルルーシュの態度から薄々事情を察しているものだから、スザクも半分状況を面白がっているのだ。
ルルーシュは、腹の底から精一杯に溜息を吐き出すと、改めて仮面を被り直して、艦橋（ブリッジ）に足を運んだ。

◇　◇　◇

――　一ヵ月後。
そういうわけでルルーシュは、アッシュフォードの調理実習室でグツグツと鍋を煮込んでいる最中だった。
用意されているコンロの数は五箇所。
その全部に大鍋を仕掛けてあるわけだから、完成したブツの総重量は一体何リットルになるのだろうか？
いい加減、鍋をかき混ぜるのにも嫌気がさし始めていた背中に、アッシュフォードの制服姿のＣ．Ｃ．が声をかけてきた。
「何だ、ルルーシュ？　ついに店でも始める気になったのか？」
「ちがう」
「なら、いったいどうする気だ？　こんなにカレーばっかり大量に作って」
シナモン、ナツメグ、ローズマリー――ほかにも３０種類ばかり自分で調合した香辛料の匂いが、全身に染み付いてしまいそうな気分のルルーシュは、心の底からうんざりしながら逆に質問を発した。
「……バレンタインデーの一件は、おまえもスザクから話を聞いているのだろう？」

スザクがC．C．の携帯電話の番号を知っているのに気づいたときには、正直衝撃が走ったものだが。
ルルーシュの不在時に、咲世子経由で対応を求められたC．C．が自分でそれを教えたらしい。
以来、互いの近況報告が目的で、ルルーシュの知らないところで不定期に連絡を取り合っているらしいが。
この話になると、いつもこっそり不機嫌になるルルーシュの内心など知らぬげに、小首を傾げたC．C．は、「それがどうかしたのか？」と不思議そうに訊ねてきた。
「藤堂が贈ってきたのが、妙に可愛らしいマカロンで、ラクシャータのがV．S．O．P．入りのボンボンで、千葉と杉山のが手作りだったらしいからな。意外なところで、個人の一面を垣間見れたと感心していたぞ？」
本当にアイツは妙なところでマメな男だなと、内心では精一杯に恨み言を発しながら、ルルーシュは唸るような低音で「だから、だ」と続けた。
「単なる義理チョコなどで手作りまでされてしまった日には、こっちも相応の気持ちで返すしかないだろう？　とは言うものの、いちいち個人に返礼したのでは埒が明かないからな、いっそのこと全員分まとめて昼食を作ってやることにしたまでだ」
ルルーシュの隣りから感慨深げに手元を覗き込んでいたC．C．は、呆れた様子でクスリと笑った。
「まァた変なところにこだわって。おまえも相変わらずだなァ」
「うるさい」
「だったら、何も二度手間をしないで、イカルガで直接作ってやればいいだろうに？」
「馬鹿か、おまえは。ゼロの格好で、今と同じ真似をしてみろ。単なる茶番になってしまうだろうが」
「茶番というより、見世物だな。資金繰りに困ったら、ためしに一度身体を張ってみるか？」

ルルーシュは憮然と顔を顰めながら、ふざけたことを言う女の顔を睨んだ。
しかし、先ほどから妙に甘い匂いがするなと思っていたのも道理、それこそチョコレートの小箱を抱えて、しきりにモグモグと口を動かしているのに気づいて、ルルーシュは怪訝そうに顔を顰めた。
「――何だ、それは？」
訊ねたのは、C．C．が手にしている品物がどう見ても手作りらしきラッピングだったからだが、C．C．は平然と「いや、それがな」と答えたものだ。
「さっきクラスメイトのマリナが、バレンタインのお返しに贈ってくれたんだ。明日はデートで彼氏と一日豪遊するそうだからな。一日早めにわざわざ作って渡してくれたというわけさ。律儀な女だろう？」
おまえが受け取った品物に比べれば、私のほうがよっぽど愛情が篭もっているけどな――とC．C．は自慢げに笑いながらのたまうが、瞬間的にルルーシュの思考を機能停止状態に追い込んでしまうのは、その一言だけでも充分だった。

――結果を求めるなら、何かを成さなければならない。

ああ、そうだとも。
以前それを言ったのはスザクだが、なぜだか唐突にそのセリフを思い出していたルルーシュは、チラリと横目で冷え切った視線を隣りの女に注いだ。
「意外だな、おまえでも聖ウァレンティヌスの命日などに興味を抱くのか」
お返しを貰うということは、もちろんC．C．が先に品物を贈っているというわけだ。
要するにC．C．はその日の存在を知っていて、それでもルルーシュに対しては何のリアクションも起こそうとしなかったわけだか

ら、仮にも片想いである立場上、不満に思う権利などカケラもないのを百も承知で、五箇所に点在している鍋を忙しくかき混ぜる片手間にルルーシュが不機嫌そうに訊ねると、なぜだかその背中について回っているC．C．は、「当然だろう？」としかつめらしく答える。

「私自身が、今でも驚いているぐらいだからな」

「なら、どうしてそんな羽目に陥ったんだ？」

「おまえがそれを言うのか？」

逆に不満そうに目をすがめたC．C．は、それはもう見事に当てつけがましい口調で続けたものだ。

「元はといえば、誰かさんのおかげでなァ、『セラちゃんは、バレンタインには何もしないの？』とそれはもう不思議そうに仲の良い女子から訊ねられたんだ」

C．C．の声真似で、『ああ、あの女子か』と姿を思い浮かべることが可能だったルルーシュは、相変わらず底冷えのする言い方で、「それで？」と先を促した。

ここまでルルーシュが不機嫌に徹すれば、相手がたとえ会長でも「どうかした？」と原因究明に乗り出すところだが、そんなルルーシュの態度にはすっかり慣れっこになってしまっているC．C．は、カケラも気にした様子もなく、むしろ仕方なく口を開いてやっているんだという態度で横柄にのたまった。

「私からしてみれば、そうやって訊ねられることのほうが心外さ。だから『自慢じゃないが、生まれてこの方ただの一度もバレンタインなど祝った経験など無い』と教えてやったのさ」

そしたら相手は心底驚いた顔をしたらしいが、『甘いな』とルルーシュは思う。

おそらく相手は15年そこそこの人生を想像したのだろうが、C．C．の場合、下手をするとその数百倍は軽いのだ。

次第に話が読めてきたルルーシュは、フンと皮肉に鼻を鳴らしながら鍋の火を止めると、適量を小鍋に取り分けて、製氷機から取り

出した氷をボールの中に放り込み、もうもうと湯気を立てている小鍋をしばらくボールの中に放置した。
その傍らでは、念のために用意しておいたフランスパンを、食べやすいサイズに切り分けながら訊ねる。
「それで？」
いつになく熱心な興味を示してルルーシュの行動を逐一見て回っているのに、ちっとも意図が読めないでいるC．C．は、『一体こいつは何をやっているんだ？』という顔つきでルルーシュの手元を注意深く凝視しながら、ほとんどうわの空のような話し方で続けた。
「――ああ、だからそいつが、日本には『友チョコ』という習慣があるのを教えてくれたんだ。ついでに別の女子がフォンダンショコラのレシピも教えてくれたからな、日頃から世話になっている連中に、物は試しで配ってやったというわけさ」
ルルーシュは、切り分けたパンをカゴの中に並べると、冷やしておいた小鍋を再度コンロで熱し始めた。
続けて、スープ皿とカトラリーを一人前用意しながら、「おまえ、あの日は、勉強が忙しかったとか言ってなかったか？」と憎まれ口を叩くと、どうやら覚えていたらしいC．C．は、すかさずムッと顔を顰めた。
「私だって嘘は言ってない。実際、課題が山ほど出されていたんだからな。――ただ、本当の提出期限は一週間先だった辺りが悔しい誤算だが」
「フン、大方授業中に居眠りでもしていたんだろう？」
「おまえと一緒にするな」
「おかげで俺は、おかか御飯（ねこまんま）を食わされる羽目に陥ったんだぞ？待遇に差があり過ぎるだろう？」
「う、うるさい。作って貰えるだけありがたいと思え」
言われなくても『この女が、よくもまァ続けているものだよな』と感心する気持ちが皆無ではなかったので、別にバレンタインデー当日に品物や手紙を渡されなくても、C．C．の口からバレンタイ

ンに関する話題を引き出せただけでも満足したはずなのだ。
　それなのに、あまりにも無関心にやり過ごされてしまったものだから、業を煮やしている部分もあってしまうわけだが。
　そうした気持ちとの兼ね合いもあって、おかか御飯（ねこまんま）の一件に関してはわざと頑なに沈黙を守り通してきたものだから、今ごろになって突然話を蒸し返されて、珍しく露骨にうろたえているC・C・の様子が可笑しくて、ついには我慢し切れずに笑い出してしまったルルーシュは、スープ皿に完成したばかりのカレーを注ぐと、用意した席に「座れ」とC・C・を促した。
「仕方が無いから、おまえにも味見をさせてやる。ありがたく思え」
　状況に戸惑っているC・C・は、ほとんど条件反射で、「えらそうに言うな」と唇の先を尖らせた。
「それこそ待遇に差があり過ぎやしないか？　イカルガの連中は、一晩寝かせて、充分に味の染み込んだ状態で食べるんだろう？　私が味見をする意味が無いじゃないか」
「本当に何も知らない女だな。だから今、一晩寝かせてやっただろうが？」
「――はァ？」
　驚きの色も露わに大きな瞳をぱちくりと見開く様子に、ルルーシュはしみじみ溜息混じりに言ったものだ。
「おまえな、仮にも料理をするなら最低限コレくらいは覚えておけよ。浸透圧の関係で、温度が下がる際に味が染む込むわけだからな」
　ようやく一連の行動に納得したC・C・は、なぜだかフッと憐れむような視線を注いできた。
「ここまで来ると、いっそ主夫の知恵というより、おばあちゃんの知恵袋だな、ルルーシュ？」
「うるさい。いいから、さっさと冷めないうちに食え」
「本当にいちいち横柄な男だなァ」
　そうやって、すぐに憎まれ口で返してくるクセに、ルルーシュの目にはどこから見ても嬉しそうに顔をほころばせながら腰を下ろす

と、C・C・は嬉々としてスプーンを口に運んだ。
ルルーシュは横目でその様子を観察しながら、まったく手の掛かる女だな――と呆れた気分でしみじみ溜息を吐き出した。
自分のほうこそ、イカルガの連中を『羨ましい』と思っている本心には気づきもしないで。
おそらく今と同じ調子で、バレンタイン前に浮き足立っていたクラスの女子の行動に、興味津々で観察の目を注いでいたのだろう。
見かねた誰かが、C・C・にも適当な目的を与えてやったのだろうが。
だからと言って、たとえ義理でもルルーシュにはチョコを渡そうとも考えつかない呆れた精神構造には、当然腹も煮えてしまうが、残念ながらルルーシュは、そんなC・C・の世話を焼くのに慣れてしまっていた。
C・C・がせっせとスプーンを口に運ぶ姿を見下ろしながら、「どうだ、美味いか？」と尊大に胸を張りながら訊ねると、返事もしないで中途で席を立ったC・C・は、自分の隣りに一人前のスープ皿を用意し始めた。
「心配なら、おまえも自分で食え」
「いや俺は、ナナリーと一緒に夕食を」
「どうせ明日もそうやって眺めているだけなんだろう？　いいじゃないか、少しくらい」
言って、手早く席を用意し終えたC・C・は、「目障りだから、さっさと座れ」とそっけなくルルーシュを隣りの席に促した。
それきり自分はまた忙しくスプーンを口に運び始めたが、最前からの行動をずっと眺めていたルルーシュの目には、明らかにカレーに対する注意力が散漫になっているのが丸わかりだった。
この女は――と、また内心で盛大に苦虫を噛み潰してしまったのは、以前C・C・が語ろうとしなかった『もうひとつの願い』に気づいてしまったからだ。
ひとりで食事をするのが寂しいなら、さっさとルルーシュの気持

ちを受け入れれば、こちらにはいくらでも構ってやる用意はしてあるのだ。
それを承知で、それでも余計な意地を張り続けるC・C・の態度に、いい加減ルーシュも匙を投げてしまいたい気分だが、そうそう簡単には、こちらの思うとおり手懐けられようとしないのがC・C・という女のタチの悪さでもあった。

――この女の世話を焼くことに、愉しみを見出している時点で、俺も相当末期だがな。

我ながら、厄介な相手に惚れたものだなと、しみじみ溜息を吐き出しながらC・C・の隣りに足を運ぶと、C・C・は無表情にクルリと振り向いて、「おかわり」とルルーシュに空いた皿を差し出した。
「馬鹿が、人数分しか作ってない。そもそも味見におかわりなど有るか」
「ケチケチするなよ。何なら私が、玉城の分を食ってやるぞ？」
「論外だな、最初からアイツの分など作ってない。ディートハルトと玉城からは何も受け取ってないからな、こっちも返礼をする必要がないだろう？」
「器の小さい男だなァ」
「黙れ。おまえにだけは言われる筋合いは無い」
そこでようやく、自分も玉城たちと同類であることに気づいたC・C・は、ウッと気圧された様子で口を閉ざして。
さっきまでとは少しばかり違った様子でムッと顔を顰めながら席を立つと、小鍋の中に残っていたカレーを洗いざらい自分の皿に移して席に戻り、妙にしおらしい態度で黙々とスプーンを口に運び始めた。
予想外の行動に出られてしまうと、反応に困ってしまうのはルルーシュのほうで。仕方なく用意された席に腰を下ろしてスプーンを

口に運び始めたが、ややあって、そっけなく隣りの女が口を開いたものだった。
「……何なら、おかか御飯（ねこまんま）ではなく、失敗したフォンダンショコラを一面に敷き詰めてやれば良かったな。そしたら私も、胸焼けするほど毎日チョコレート攻めに合わずに済んだんだ」
思わずルルーシュが吹き出すと、危うく奪われそうになったスープ皿を寸でのところで取り返して、いつもの調子でフンと皮肉に鼻を鳴らした。
「そのうち気が向いたときにでも、また作れ。仕方が無いから、俺が食ってやる」
「別におまえが食ってくれないでも、クラスの連中が喜んで食ってくれるがな」
「そうなのか？」
そのセリフは少々意外で、スプーンを口に運ぶ片手間に問い返すと、C・C・はそこでもまた露骨に嫌そうな顔つきで横目にルルーシュを睨んだ。
「どっかの誰かさんのおかげでな、私はすっかり料理も得意な才女だぞ？　少しばかり食に対する知識が浅いのが玉に瑕だがな」
C・C・が簡単にアッシュフォードから逃げ出す心配のないように。
そして何より一番に、少しでも学生生活に馴染み易くするために、ルルーシュが事前に仕込んでおいた数多の策略を盛大に皮肉られているのに気づいて、ルルーシュは人の悪い表情でこっそり忍び笑った。
――たしかに気づいた時点では後の祭りだが、何よりの誤算は、おまえ自身の気持ちだろう？
数百年の長きに渡ってひとりで過ごしてきた魔女の生活とは、あまりに違いすぎる環境に内心ではひどく戸惑いながら、まんざら悪

くもなく状況を受け入れてしまっている部分が有るからこそ、バレンタインなどと言うくだらない風習に付き合ってみる気になったはずだから。
　ルルーシュは小さく喉の奥で笑いを転がしながら目線を手元のスープ皿の上に落とすと、実に何気ない口ぶりで切り出した。
「だったら今度、関西方面に『食い倒れツアー』にでも出かけてみるか？」
「くいだおれ？」
　C．C．は、手のひらサイズのフランスパンに齧り付きながら、金の瞳をぱちくりと見開いた。
　ルルーシュは、手元のカレーをかき混ぜながら「ああ」とそれに応じる。
「京都の湯豆腐に、大阪のたこ焼き、神戸の牛肉、香川の讃岐うどん、広島の広島焼き――コレくらいなら日帰りでも充分往復が可能な範囲内だ」
「見事に食い物ばかりだな」
「だから、『食い倒れツアー』だと言っているだろう？」
　で、どうするんだ？　とそっけなく促すと、C．C．はまたツンと澄ました表情を取り繕って、
「仕方が無いから、私が付き合ってやる」
　と平然とのたまった。
　ルルーシュは、やっぱりおまえはそういう女だよ――とクツクツ笑いを転がしながら、「了解」と伏し目がちに返した。

◇　◇　◇

翌日、１５０人分のカレーを抱えてイカルガに向かったルルーシュは、そのまた翌日、憤然と肩を怒らせながらＣ．Ｃ．のマンションまで迎えにやって来た。
Ｃ．Ｃ．は、もちろんルルーシュの怒りに気づいていたのだが、あえて気づかないフリを装った。
理由など、訊ねるまでもなく既に承知していたからだ。
ルルーシュの気持ち的には、もちろん連中の度肝を抜いてやるつもりで奇襲を狙った作戦だろうが、それではイカルガの台所当番が段取りを狂わせられて迷惑するだろうと判断したＣ．Ｃ．が、こっそりラクシャータにだけ話を通しておいたのだ。
もちろんラクシャータは秘密を守ったが、後に送られてきたメールを眺めてＣ．Ｃ．は爆笑した。
添付されていた画像の中で、なんとルルーシュはゼロの扮装のまま割烹着姿で給仕役に徹していたからだ。
愉しそうな連中の姿を見るにつけ、やっぱり少しくらいは気持ちが騒いでしまうが。
それでも今の自分が置かれている立場こそ、かつての自分が「愉しそうだ」と焦がれた環境のはずだった。
「――なァ、ルルーシュ、おまえはこの先、私を一体どうするつもりでいるんだ？」
ややあって、自嘲気味に苦笑を洩らしたＣ．Ｃ．は、またいつものように慣れた仕草で不安を胸の奥だけに閉じ込めた。

番外？：四月

「今日はたぶん、遅くなると思うから」
その日は平日だったから、朝、出かける間際にリビングに立ち寄りルルーシュが声を掛けると、いつものようにナナリーは満面に笑みを浮かべながら、からかうようにクスクス笑った。
「まァ、お兄さまったら。またＣ．Ｃ．さんの所ですか？」
私立アッシュフォード学園内の、クラブハウスの一角に設けられた居住空間。
この八年間ルルーシュが身を寄せている仮の住まいである。
もっとも直近の一年間は、実父である神聖ブリタニア帝国第９８代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの監視を受ける形で、ずいぶんと窮屈な思いをさせられたものだったが。
現在は、その両親ともに、Ｃの世界に吸収された形で、形式的にはとうに故人である。
その代わりに、ようやく一年数ヶ月ぶりにナナリーを奪還することに成功していたルルーシュは、改めて『ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア』を過去の人間として捨て去り、今現在は『ルルーシュ・ランペルージ』として温容な学生生活を営む毎日だ。
もちろん今でもナナリーには、隠していることが無数にあった。
ルルーシュが今現在も黒の騎士団を率いる影のＣＥＯであり、ゼロの仮面を被り続けていること。
ラグナレクの接続を阻止するためとはいえ、自ら積極的に両親を殺害してしまったこと。
そして、その両親と、実の兄が今までに重ねてきた罪の数々。
その事実のうちの一片たりとも、ナナリーの耳に入るようなことがあってはならない。

そんなことをしてしまえば、責任を感じたナナリーが思い詰めた挙句に自殺でもしかねないからだ。
その可能性を何より一番危ぶんでいるのがルルーシュだったから、最近は度重なる外出の理由に、これ幸いとC．C．の存在を利用しているのだ。
おかげで、今現在のルルーシュは、すっかり妹公認で、毎日女の家に通い詰めずにはいられないほどに熱烈な恋に夢中になっている幸福な男だった。

――実際はまだ、俺の片想いなんだがな……。

そうとも知らずに、妹公認どころか、学校中で彼らを知る全員が認めてしまっている似合いのカップルでもあった。
二人で一緒にいるだけでも「花になる」という理由で、ツーショットの隠し撮り写真が高値で売買されているのを知ったのは、つい最近のこと。
頭痛を感じながら、生徒会副会長権限で即刻禁止令を発布して、洗いざらいネガから写真一式を提出させたが、笑ってしまうくらいに色っぽいシーンは皆無だった。
「何度か街で、デートしてるところを見かけたんで、ちょっと後をつけさせてもらったんですけどね。一日張り付いて、ようやく撮れた一枚がコレですよ」
開き直った元締めが、「一番人気」だと言って見せてくれたのは、二人が手を繋いで歩いているシーンだった。
お互いにまったく別々の方向を見ながら歩いていて、どう贔屓目に見ても、これではルルーシュがC．C．を引きずりながら歩いているようにしか見えない。
「ひょっとして、警戒されてんのかな？　とか疑っちまったくらいなんですけど。本当に、ルルーシュ先輩たちって微笑ましいカップルっすよね」

だからこそ「人気が高い」のだと言われれば返す言葉もなかったが。
その実態は、男のほうから無理やり言い寄って、付き合っていることを偽装しているカップルなのだから、ルルーシュの心情的には内心冷や汗モノの一件だった。
だが、どのみち早晩にも解決する予定でいるのだし、ナナリーに対しても、行き先をハッキリ口に出して言える分、以前のように、適当な口実で誤魔化しているよりもよっぽどマシだった。
ふいに優しげな笑みを浮かべたルルーシュはナナリーの至近に近づくと、何の前フリもなくナナリーの頬っぺたを人差し指でぷにっと突っついた。
「たった一人きりの、兄の繊細な気持ちをからかうな」
「まあ」
照れた子供のような珍しい悪戯に吹き出してしまったナナリーは、ルルーシュの手を掴むと、クスクス笑いながら両手の間にキュッと握り締めた。
「将来C．C．さんを、『お義姉さま』とお呼びするためですもの。応援していますわ、お兄さま？」

精神的な疾患ではなく、実の父、シャルル・ジ・ブリタニアの用いたギアスの影響により、幼少時代からずっと閉ざされたままのその瞳。
裏のカラクリが明白になった今、ジェレミアのギアス・キャンセラーを使用して、せめて『盲目』という足枷から解放してやりたいと考えなくはない。
だが、同時にその選択は諸刃の剣でもあった。
母が殺害された当時、六歳であったナナリーが、どこまで事件の真相を把握しているのか。正直ルルーシュにも判断することが難しい。なにしろルルーシュが現場に駆けつけた時には、もう既に悲劇のシナリオが仕組まれていた後だったのだ。

だが、いずれにせよ、ギアス・キャンセラーを使ってしまえば、封印されている記憶まで暴いてしまう危険性だけは避けようもない。
以前に一度ジェレミアに、「ギアスの一部分だけ、解除することは可能か？」と訊ねたことがあったが、ジェレミアは沈鬱な表情で、「……申し訳ありません」と答えたきりだった。
Ｃ．Ｃ．を通して、Ｃの世界にいる管理人に問い合わせもしてもらったが、いずれにせよ喜ばしい回答を手に入れることは不可能だったのである。

「無責任だと感じるかもしれないがな、ルルーシュ。少なくとも私の知る限り、自力でギアスの呪縛を破った者は皆無だ。ジェレミアの能力を当てにしないなら、おそらくナナリーは――」

皆まで言わせずに、ルルーシュは、「それくらい、言われなくても承知している」と遮った。
否定的な意見など、耳に入れたくもなかった。
だが、それでもＣ．Ｃ．は、さらに厳しい意見を重ねてくる。
「おまえにしては珍しく判断が付きかねているとわかっているから、わざわざこうして余計な口を挟んでいるんだ。ナナリーはまだ１５歳だろう？　どう考えても、先の人生のほうが長い。そして、今ならルルーシュ、おまえがナナリーのそばに居てやれる。思い切るならば、一日でも早いほうがいい」
揺るぎのない力強さで見つめ返してくる金の瞳。
しばらく無言でそれを見つめていたルルーシュは、なんとなく溜息を吐き出すと、Ｃ．Ｃ．の頬をサラリと撫でてすぐに離した。
「だからといって、どうしておまえが思い詰める必要がある？　何だか救いを求めているような顔をしているが」
「責任を感じているだけさ」
シャルルにギアスを与えたのは、ラグナレクの接続を念頭に掲げた実兄、Ｖ．Ｖ．である。

だが、同じコード保持者として、知らん顔もしていられないからな。――そう、C．C．は語った。
「良心の呵責以前に、純粋に、ナナリーには幸せになって欲しいと願っている。そのために出来る努力なら、躊躇うべきではないと私なら考えるが」
「そうだな……」
結局ルルーシュは、「もうしばらくだけ、考えさせてくれ」と答えた。

――そして。
結局はまた、兄の一存で、今後の命運が左右されてしまう立場にあるナナリー。
何も知らない最愛の妹が発した他愛無いひとことに、思い切り動揺してしまったルルーシュは、つくづく困った顔をして、意味もなくこめかみの辺りをポリリと掻いた。
「将来を誓った関係か？　アレは冗談だと言ったはずだろう？」
「では、C．C．さんとは、あくまで一時的なお付き合いなのですか？」
「いや、だから、そういうことじゃなくって……」
困ったな――と、本気で赤面しながら口ごもると、むしろナナリーのほうが「しっかりしてください」とハッパを掛けてきた。
「同じクラスの男子にも、C．C．さんのことを良く聞かれるんです。私が知っているだけでも、C．C．さんを狙っている方は大勢いらっしゃるんですから」
うかうかしていると、お兄さまよりも、もっと素敵な殿方に横からさらわれてしまいますよ？　と真剣な顔つきで苦言を呈してくる。
だが、それを言うナナリー自身、C．C．の化けの皮に騙されている側の一員なのである。
『もっと素敵な殿方』の連中にしたって、いざとなったらC．C．の化けの皮をベロリと剥がしてやった途端に、蜘蛛の子を散らすよ

うにあっさり霧散してしまうに決まってる。
そう考えるだに、物好きにもそんな相手をわざわざ選んで惚れている自分は、「一体どんな趣味をしているんだ？」と頭痛を感じなくもなかったが。
ひとまずその場は「はいはい」と生返事で乗り切って、ほとんど逃げ出すようにして目的の場所へと出発した。
C．C．との付き合いを反対されるのも困ってしまうが、ここまで全面バックアップの姿勢をとられてしまうと、微妙な関係であるのが災いして、正直対応に困り始めているような昨今である。

――恨むぞ、C．C．。

ほとんど八つ当たりに近い文句を呟いて、ふいに真面目な用件を思い出したルルーシュは、これから先数時間の予定をメールでC．C．にも伝えておくことにした。
ルルーシュの希望で、今現在C．C．は、完全に黒の騎士団との関係を絶っている。
だから、本来ならば必要のない連絡のはずだったが。仮にも、C．C．に会っている事になっている手前、口裏を合わせておく必要があったからだ。
事務的な用件だけを打ち込んで、最後に一行空けて改行して、『今夜会えないか？』と打ち込んだ。
だが、打ったはいいがどうしても、そのまま送信する気になれなくて。
結局、送信する直前に、余計な一文は消してしまった。
時折ルルーシュのほうから一方的に親密なキスを交わすようになる以前の関係なら、たとえ夜中の二時であろうが必要であれば呼び出すことが可能だったはずだが、最近はすっかり警戒されているのだ。
そう考えるだに、本当に以前の自分たちは何でも有りだったんだ

な――と他人事のように感心してしまうが。
だからといって、以前の関係には今更決して戻りたくないのである。
なんとなく自嘲気味に肩をすくめると、それから数時間ルルーシュは、ゼロとしての活動に専念した。

◇　◇　◇

ところが、懸念していた問題が、予定よりもあっさり片付いてしまったものだから逆に困った。
さっそく今後の展望を煮詰めなおすためにも、是非とも部屋に戻りたい。
だが、戻ったところを、うっかりナナリーに見つかってしまえば、「まあ、さっそくC．C．さんと喧嘩でもなさったんですか？」と余計な心配をさせかねない。
仕方なくルルーシュは、緊急回線のほうを利用して、こっそり咲世子にナナリーの足止めを依頼すると、つかのま無人になっているクラブハウスの裏口から、他人の家に忍び込むような心境で自宅のドアをくぐった。
こんな場合を想定して、将来的にはC．C．の住んでいるマンションに、イカルガに設置しているのと同規模の通信スペースを用意する予定でいる。
だから、私的な事情ばかりでなく、早急にC．C．の部屋に自由に出入りできる権利を手に入れる必要があるのだが。相変わらずC．C．が煮え切らない態度を続けているものだから、公私にわたって何かと不自由な生活を余儀なくされているわけだ。

恨むぞ、C・C・――と、ほとんど口癖になりかけている恨み言を呟きながら自室のドアを開けたルルーシュは、その場で瞬間的に硬直した。

現在進行形で片想い中の女が、ベッドの上で丸くなって眠っている。

それを発見しただけでも、『この女は……』と思わず怒りを感じてしまったものだが。

さらに煮え湯を飲まされるような気分を味わってしまったのは、寝ている女が胸元にルルーシュの弁当箱を抱きしめながら、明らかに頬を涙で濡らしていたからだ。

その場でしばらく激憤をこらえていたルルーシュは、やがて溜息まじりに部屋の中まで歩みを進めると、窓際のパソコン机に向かって腰を下ろした。

そして、迷いのない仕草で携帯電話を取り出すと、かけ慣れた番号をコールした。

――ピリリリリ……

初期設定そのままの無機質な電子音が、背後の空間から鳴り響く。

ルルーシュは、その間にも休みなく、窓の外の風景に視線の先を固定させていた。

おそらくルルーシュの依頼に従って、ナナリーを買い物にでも連れ出してくれたのだろう。

クラブハウス前の並木道の向こう側に、車椅子を押す咲世子とナナリーの姿が小さく視界に入っていた。

その背後では、ピリリリリ、ピリリリリと苛立つばかりの電子音が続いている。

今にも本当は怒鳴りつけてやりたいのを寸でのところで我慢して、辛抱強く待ち構えていたルルーシュの背後で、ようやく14回目の

コールでC．C．がゴソリと身じろぐ音が聞こえた。
「……はい？」
半分以上眠っているような、不機嫌そうな唸り声。
「俺だ」
それに応じるルルーシュも、負けずに噛みつくような低音を発した。
電話の中と外から同時に同じ声が聞こえたわけだから、一瞬で目を覚ました様子のC．C．が、背後で息を呑む気配が伝わった。
「――……なんだ、おまえ帰っていたのか？　予定では、」
「それを承知で、どうしてそんな所で眠っている？　ナナリーに見つかったら、何と言って説明するつもりでいたんだ？」
背中を向けたまま矢継ぎ早に質問を発すると、しばらく押し黙っていたC．C．は、「すまない」と乾き切った小声で謝罪した。
ルルーシュは、握り潰すようにして乱暴に携帯電話を閉ざすと、
「いいから、出ろ」と振り向きざまにC．C．を急き立てた。
「ナナリーが戻って来てるんだ。――さっさとしろ」
寝起きで乱れた髪のまま、ベッドの上にペタリと内股で腰を下ろしていたC．C．は、気だるそうに大きな溜息を吐き出した。

◇　◇　◇

九割方が青々とした緑に埋め尽くされている葉桜。
この桜が満開だった頃、今は社会人となっている会長も交えて、生徒会のメンバーで桜見物を愉しんだものだった。
そして春、ルルーシュは高等部の三年に進級していた。
黒の騎士団の活動に専念することに決めたカレンは、正式に退学

届けを出していた。
そして、今現在はゼロとして活動しているスザクも。
シュナイゼルの配下に治まる形で、インヴォーグに籍を置いているニーナは、ブラックリベリオンの後すぐに退学届けを出していたらしい。
進級すると同時に、進路別に行われたクラス替えで、リヴァルやシャーリーともクラスが別れていたから、以前に比べると格段に淡々とした学生生活を送っている。
だが、依然としてゼロとしての活動が多忙を極めている昨今だったので、ちょっと一息つくには相変わらずちょうど良い癒しの空間でもあった。
言ってみれば、安穏無事な日常に、一石を投じてくれている魔女の存在。
ルルーシュは苛立たしげに缶コーヒーのプルタップを開けると、ゴクッゴクッと喉を鳴らして中身を一気に飲み干した。
次第に薄闇に満たされつつある無人の公園。
ポツポツと街灯に火の灯りつつある芝生の上には、子供が忘れていったのだろう、七色に塗られた小さなボールと、小さな靴が片方だけぽつんと取り残されていた。
そんな景色を、見るとはなしに苛立たしげにハァと溜息を押し出すと、やがて重たい腰を持ち上げた。
「――それで？」
不自然に距離を離した隣に腰を下ろしているC．C．は、膝の上でレモン味の炭酸飲料を物憂げに弄びながら、視線の先を地面の上に据えている。
「……だから、少しだけ休憩するつもりでいたんだ。……だいいち、訪ねた時間が遅かったからな、万が一見つかった場合でも、今から待ち合わせ先に向かうのだとか、いろいろ」
「誰が、弁解をしろと言っている？」
「……」

ピシャリと鞭で打つような低音でルルーシュが遮ると、たちまち固く唇を引き結んでしまったC．C．は、今はアッシュフォードの制服姿ではなく、淡いピンクのあや織りシャツと洗いざらしのジーンズ姿だ。

あんまり腹が煮えてしまったものだから、ルルーシュはクラブハウスの裏口から抜け出したその足で、まっすぐC．C．のマンションに足を運んだ。

C．C．は無言でルルーシュの後に従ったが、動揺しているのはわかっていた。

なにしろルルーシュは、いまだに一度もC．C．の部屋に足を踏み入れたことはないのだ。

およそ15分の道のりを、さんざんハラハラさせてやったところで、やがてマンションのエントランスホールで足を止めたルルーシュは、「着替えて来い」とC．C．に促がした。

しばらくして、マンションの外でふたたび顔を合わせた二人は、無言のまま駅とは反対側にある、ひと気のない公園に足を運んだ。

ルルーシュが話を促がすまで、C．C．は一度も口を開こうとしなかった。

だが、ルルーシュのほうこそ、今更何を訊ねる必要もなく、大体の事情は把握していた。

事前にルルーシュの行動を把握していたから、おそらくC．C．は油断したのだ。

だから、普段ならば決して長居をしないルルーシュの部屋で、あんなふうに過ごしていた。

悩むなとは言わない。

悩ませているのは、ルルーシュのほうだからだ。

だが、しかし――。

「……学園生活は愉しいか？」

意識的に感情のスウィッチをオフにすると、ルルーシュは突き放している口調で淡々と訊ねる。

最寄りのゴミ箱までゆっくり歩いて、用済みのスチール缶を投げ捨てると、遠くで数台の車が走る音だけが聞こえている静かな公園に、カランカランと耳触りな音が響いた。
その一瞬が過ぎてしまうと、返ってきたのは耳が痛くなるような完全なる沈黙。
足元の地面を凝視したまま、気配だけでその後ろ姿を追っていたC．C．は、小さく吐息しながら顔を上げると、無表情に「問題ない」と答えた。
「なら、しばらくの間、俺と会うのを止すか？」
ゴミ箱の隣に設置されている電燈が、パチパチッと明滅しながらオレンジ色の火を灯した。
そこに背中を預けている、ルルーシュの声音にも一切の感情が含まれない。
C．C．は、まばたきの少ない金の瞳で、しばらく無言でルルーシュの顔を見つめた。
「……おまえが、そうしたほうが良いと考えるなら」
「ふざけるな。俺の気持ちを知っていて、よくもそんなセリフを口に出来るな」
淡々とした口調で、C．C．の逃げ口上を批難すると、ゆっくりまばたきをしたC．C．は、そのまま無表情に俯いた。
ゆったりした足取りでベンチの前まで戻ってきたルルーシュは、腰を下ろさずに、C．C．の目前でぴたりと立ち止まった。
「俺は、おまえにそんな顔をさせるために、アッシュフォードに誘ったわけじゃない。どのみち俺がスザク（ゼロ）にスカウトされる時には、おまえも一緒に連れて行くんだ。それまで約束通り、好きなだけ自由を満喫すればいい。何か別に打ち込みたいことが見つかったなら、俺の気持ちなんかには構わずに、そっちに専念してもらっても構わないんだ。そのために用意した猶予期間なんだからな」
作戦の企画立案と、指示を出すのはルルーシュだが、日常的にはスザクにゼロの仮面を譲って、厄介な外交に相対する場合だけルル

ーシュがゼロとして現地に赴く。
ルルーシュが直接ゼロとして働かないのは、体力的な効率を優先して。
そして何よりも、ギアスの抑止を目的としてのことだった。
そんな回りくどいことをしないでも、「俺を信用して、おまえも一緒にアッシュフォードに戻ればいいだろう？」とルルーシュはその提案を固辞したが、ようやく日本を取り戻す目処のたった今、「長年軍務に関わってきた自分に、今さら学生生活は似合わないよ」と他ならぬスザクが断言するので、一ヶ月にも及ぶ説得の果てに、ついにはルルーシュが折れてしまった形だ。
かくいうルルーシュも将来的には、まもなくアッシュフォードの高等部を卒業し、大学、大学院へと進学を果たした後には、その能力を『偶然』ゼロに買われて、公式に参謀として政治に関わる手筈を用意している。
その際、C．C．も一緒に連れて行くわけだから、それまで自由に過ごしてくれても構わない――と、ルルーシュは提案しているのであった。
伏し目がちに顔を伏せていたC．C．は、しばらくそのまま微動だにしなかったが、やがて疲れたように肩を落とすと、落ち着き払った表情でルルーシュを見つめ返した。
「……なら、そのときが訪れるまで、私のことは放っておいてくれ。――仮に、私がそんなふうに求めても、おまえはその要求を容認できるのか？」
ルルーシュは、瞬間的に激昂していたが、事前に感情のスウィッチは切ってしまっていた。
表面上は、あくまで冷え切った態度でやり返す。
「ああ、容認してやっても構わないがな、そんな要求を突きつけてくる以前に、即刻俺の気持ちを拒絶しろ。恋人の立場が手に入らなくても、おまえの『共犯者』である事実だけは、誰にも覆しようがないんだからな」

「私の、ではなく、おまえの『共犯者』だろう？　私の願いは、とっくに破棄されている」
「こっちは叶えてやると言っているのに、拒んでいるのはおまえだ」
「わたしは別に――」
「死ぬときくらい、笑わせて欲しいんだろう？」
「……」
吐き捨てるようにして皮肉を利かせると、切なげに眉根を寄せて黙り込んでしまったC．C．は、そのまま反論をあきらめてしまった顔つきで視線を落とした。
そんな顔をしてくれなるな――と、ルルーシュは忌々しい気分で思う。
これでは俺が、おまえに無理難題を押し付けているようではないか。

――そんなに俺の気持ちは、おまえにとって受け入れ難いものなのか？

Cの世界で、C．C．の口からその言葉を聞かされた時、ルルーシュは猛烈な苛立ちを感じた。
だから、嫌がらせのように「好きだ」と告白してやったのだ。
後悔はしていない。
だからといって、正直ここまで手こずらされるとは想像もしてなかった。
C．C．に限って、完全に気のない相手を、面白半分で弄ぶような趣味はない。
道徳観念以前に、そこまで他人に執着するバイタリティーが存在してないからだ。
だから、嫌々ながらでも、ルルーシュの要求に従っている以上、「関心がない」という可能性は万に一つも有り得ない。
どころか、むしろ今日の一件で、必死の努力で思いの存在を隠し

ている事実を見せ付けられてしまったも同然ではないか。
そうまでして、一体何を隠す必要がある？
一体何が理由で、本当の気持ちを隠したがるのか？
正解のカードは、おそらく目前に見えている。
それでもまだ素直に口を割る気配など微塵もなく、頑なな態度に徹せられると、いい加減ルルーシュのほうこそ対応の仕方に悩みもする。

――いっそのこと、「いますぐ俺のことが好きだと言え」と脅迫でもしてみるか？

情けないにも程があるだろう？
たがいに押し黙ったまま、三分近くも沈黙を続けたところで、ルルーシュは忌々しげに短くハァと息を吐き出すと、口調を変えた。
「――腹が減った。何が食べたい？　ピザ以外なら、何でも好きなものに付き合うぞ」
「……ん……」
気乗りしない様子で答えたC．C．が、時間稼ぎでもするように足元の小石を蹴った。
ルルーシュは、足元に転がってきたそれを蹴り返して、「早くしろ」と急かした。
C．C．は、蹴り返されてきた小石を、タンッと力なく踏みつけると、顔を上げた。
「ラーメンが良いな。駅前の中華だ」
その選択肢が、まったく頭に無かったルルーシュは、軽く眉をひそめる。
「せっかく奢ってやると言っているのに、もっとマシなものを食え」
「いいだろ、別に」
C．C．は、わずかばかりに唇の先を尖らせる。
「今なら、ラーメンと餃子のセットを注文すると、もれなくクーポ

ン券を一枚くれるんだ」
「クーポン券？」
「そうとも。駅前の商店街でクーポン・ラリーを実施中でな、１０枚集めると、私が贔屓にしているピザ屋のお食事券が貰えるんだ」
今ちょうど八枚集めたところだから、おまえもラーメンと餃子を頼め――と真顔で言うので、「本当におまえは、ピザの化身のような奴だな」と皮肉で返したら、「褒め言葉と受け取っておこう」とＣ．Ｃ．はまんざらでもない顔をして答えた。
「褒めてない」
そっけなく答えて、二人で一緒に駅前の中華屋に向かった。

◇　◇　◇

駅前は、夕飯時ということもあり、雑多な人いきれで賑わっていた。
普段に比べて、スーツ姿の団体が多いように感じるのは、時期的に新入社員の歓迎会でも行っているのだろう。
目当ての中華屋には行列が出来ていて、店の外で１５分ほど待たされてしまったが、Ｃ．Ｃ．の話して聞かせるクーポン・ラリーの話を聞いているうちに、いつしか順番が回ってきた。
よくよく確認してみると、ラーメンと餃子のセット以外にも、ラーメンと炒飯のセットでも同じクーポン券が貰えることが判明したので、おたがいに別々の物を頼んで、二人で餃子と炒飯を分け合った。
「毎日、夕飯にはラーメンと餃子ばかり食っていたのか？」
週に二日は、Ｃ．Ｃ．も交えてクラブハウスで夕食を食べる。

二人が付き合っていることを、ナナリーに印象付けるためのカムフラージュだったが、一家団欒というアットホームな雰囲気で食事の席を共にすることをC．C．も素直に喜んでいた。
それ以外は完全に別行動だったので、心配になって念のために訊ねると、C．C．は麺を啜らずにレンゲの上で数本ずつ丸めて口の中に運ぶという面倒くさい食べ方をしながら、「いいや？」と答えた。
「それではラリーの意味が無くなってしまうだろう？　別にスタンプカードが配布してあってな、一店に付き一枚しかクーポン券を発行してくれないんだ」
自慢げに見せてくれたスタンプカードには、スウィーツの店から美容院まで所狭しと判が押してあった。
地道にひとりでチーズくんをゲットした時もそうだったが、どうやら『何かを集めて対価を得る』という行為が意外に趣味らしい。
「美容院って、髪でも切ったのか？」
まったく気づいてなかったルルーシュがそう問うと、C．C．は横目でチラッと視線を寄越してきて、「ナナリーは翌日気づいたぞ？」と皮肉を利かせた。
そんなことを言われても、C．C．ほどの髪の長さになると、少々切ったくらいでは変化に気づきようが無いのだから仕方がない。
憮然と顔を顰めながらズズッと麺を啜り上げると、どうやら最初から期待してなかった様子のC．C．が、「冗談だ」と言って笑った。
かくいうC．C．も、今年の春で高等部の二年に進級し、同じく一年に進級したナナリーは、何の因果かC．C．の隣のクラスだった。だからC．C．に関する噂も比較的、耳に入りやすい状況に置かれているわけだった。
頻繁に蓬莱島に滞在している割に、ゼロの仮面が邪魔をしておおっぴらに飲食できない環境にいるものだから、考えてみれば何年かぶりに食べた中華は、結構なボリュームだったが、なかなかルルー

シュの口にも合っていた。
ようやく念願のお食事券をゲットしたC．C．がご満悦の様子だったので、その影響も大きかったのかもしれない。
なんとなくまっすぐ帰る気になれなくて、ルルーシュは駅前から足を伸ばすと、桜並木のある河川敷に向かった。
日当たりと、風向きの影響か、今ではすっかり葉桜の並木道。
時折ジョギングやウォーキングを愉しんでいる人々とすれ違うが、２１時を過ぎているだけに比較的閑散と静まり返っていた。
もう少しぐらいは、ひと気のあることを期待していただけに、逆にルルーシュは困ってしまったが。
顔には出さずに、おとなしく隣を歩いているC．C．に訊ねた。
「学園生活は愉しいか？」
さっきも一度、訊ねている質問だった。
通りすがりのスターバックスで、ルルーシュにキャラメル・マキアートを奢ってもらったC．C．は、それに気づいて視線を寄越したが、ルルーシュの口調が気さくなものだったので、ストローを咥えたまま、少しだけ表現に困っている様子で小首を傾げた。
「そうだなァ…おまえの生活を見ていて、ある程度は承知しているつもりだったんだが。正直言って、想像以上に平和すぎて戸惑っている」
ブリタニアの掲げるナンバーズ対策により名前を奪われた諸外国は、依然として『エリア』で始まる通称名で呼ばれている。
それはここ日本――現在のエリア１１でも同様で。
『弱肉強食』を国是に掲げていたシャルル・ジ・ブリタニアが在位中であった時代に比べ、後に第９９代皇帝に即位したシュナイゼル・エル・ブリタニアの選んでいる『融和政策』は、人の目には目覚ましく友好的な歩み寄りのように映っている様子だが、実態は可能な限り手綱を緩めてやっているだけに過ぎない。決してナンバーズ対策を解消するつもりはないのだ。
「そのために、俺とスザクが忙しく知恵を絞り合っているんだろう

？　実際、このエリア１１にしたって、ブリタニアに飼い殺しにされている事実など、日常的には極力忘れたがっている連中ばっかりだ。そんなものは実際に国を動かしている上層部の連中だけが意識していれば良い。超合衆国憲法が世界的に認知されている今、個人の意識レベルなど物の数ではない」

だが、以前に比べれば、活動の幅に劇的な制約を設けられているのも事実だった。

多少の差別は現存しているにしろ、ブリタニアの『飼い殺し政策』を容認する風潮が高まりつつあるのは事実である。

だがしかし、シュナイゼルはその裏で、大量破壊兵器フレイアの開発も続けているのだ。

地上では民衆の士気を衰えさせる『融和政策』で飴を与えて、天上からは『神の目』を気取ったフレイアで人々の行動を監視しようという作戦だ。

フレイアが実戦に配備されるのを阻害するためにも、ルルーシュとスザクは、今現在もっとも頭を悩ませている最中でもあった。

「不公平だとは思わないのか？」

「――ん？」

やはりシャルル・ジ・ブリタニアに比べれば、やり方が陰湿なだけ手強い相手だな――と、考え事に浸っていたルルーシュの背後から、何やら少し憤慨しているようなＣ．Ｃ．の声が静かに訊ねてくる。

振り向いたルルーシュは、しばらく何も言わずにＣ．Ｃ．の顔を見つめ返して。

ややあって、苦笑まじりに肩をすくめた。

「仮に俺が、おまえの言う境遇を『不公平だ』と感じるような男なら、夜な夜な平和な鳥籠から抜け出して、バベルタワーに足を運ぶと思うか？」

母を亡くしたことも、父の裏切りも。

ナナリーの存在さえも、シャルル・ジ・ブリタニアのギアスによ

り植えつけられた贋の記憶で失って、平和的な生活を営んでいたはずの学生生活。
だがルルーシュは、すべての記憶を失くしても、それでも社会に対する不満だけは決して消し去ることが出来なかった。
「たしかに皇族生まれでさえなければ、ここまで極端な選択肢は選びようがなかったはずだがな。だからといって他人の境遇を羨んだことなど一度もない。おそらく俺は根っから開拓精神が豊かなのだろうさ。平和ボケした世界で退屈な人生を送っているよりも、何かに対して常に逆らい続けている今の生活のほうが元からの性分にも合っている」
淡々と語って聞かせるルルーシュの言葉に耳を傾けながら、C・C・は何やら不満そうに眉間に皺を刻んだ。
「だが、ある意味それは、危険思想だと思うぞ？」
「どうしてそうなる？」
「おまえはナナリーのために戦争を失くそうと努力して、今現在も継続中だ。おまえとスザクのことだから、おそらく近い将来それは叶えられるのだろう。やがて念願どおり世界の平定が叶ったら、今度は自分で治めた国を掘り返すつもりか？」
足元にある平和を、甘んじて受け入れる必要は感じないのか？とC・C・は訊ねているわけだった。
人工的に整備されている河川敷。
ところどころ雑草が生い茂っている部分も有るのだが、あくまでそれは建設者（デザイナー）のセンスで残されているだけに過ぎない。
ジョギングや、ランニングを愉しむ人々が足を取られて溺れる心配のないように、三方をすっかりコンクリートで固められている河川敷から得られる印象は、箱庭の中を流れる用水路と違ったところは、さほどない。
だが、流れる水は上流にある岩清水や、山岳地帯から生まれたものだった。
あくまで自然が生み出し、人の手の上を素通りして、やがて母な

る海の中へと帰っていく。
たしかにルルーシュも、その道程までが、『無意味』であるとは考えない。
三メートルほど幅のある橋の欄干を通り過ぎたところで、ルルーシュはいささか唐突にクックッと喉を鳴らして笑い始めた。
「おまえがそういう奴だからこそ、俺はおまえが欲しくてたまらないのだがな」
愉悦げに細まる紫水晶（アメジスト）色の瞳。
額面どおり言葉を受け取るならば、随分と戯けたセリフだった。
だが、半歩ほど前を歩いているルルーシュのC．C．を見る瞳の中には、C．C．の羞恥を誘うような意味はカケラも含まれていなかった。
「今の話をクラスの連中にしてみろ。十中八九、『難しい話は、わかんない』だ。現実に行われている国取り合戦が、世界史や政治経済の授業の延長程度の認識しか持ち合わせてないのだからな」
「あんまり買いかぶられても困る。私とて、五十歩百歩だぞ？　確固たる信念があって話をしているわけではない」
「別にそれでも構わないのさ。おまえには『経験』という名の武器がある。考える事の基本は、凝り固まった既成概念からの脱出だ。人は誰しも『思い込み』の罠に陥りやすいがゆえに、それを自覚するまでが容易でない。その点、客観的に大局を見渡してきたおまえの経験が役に立つ。なにげない一言に、随分と俺は助けられているからな。――だから俺は、『共犯者』として、是非ともおまえに傍に居て欲しいと望むんだ」
――C．C．、俺はギアスに負けたりなんかしない。この力を支配して、使いこなしてみせる。この世界を変えてみせる。俺の願いも、おまえの願いもまとめて叶えてみせる。奴に果たせなかった契約を俺は実現してやる。だから――

随分と昔に言われたセリフが、まるで昨日のことのようにC．C．の脳裏に甦る。
あの当時から、この男は変わってない。
成長はしているのだろう。
運命の転換を迫られるような絶望と、失意を経験して。
それでも、この男は、やっぱり『明日』を生きることを望む。
つい最近まで、死ぬことしか考えてこなかった魔女に、そのための協力を求めているのだ。
何だか久しぶりに、ルルーシュの素顔に接した気分になっていたC．C．は、肩をすくめながら、「いまさらだな」と苦笑した。
「その件なら、とっくに契約を交わしているはずだろう？　まだ一度も破棄した覚えはないからな。おまえが私を必要としているかぎり、魔女はおまえの傍らに寄り添っているだろうさ」
数多の契約者と、それに関係する人々を地獄に送り続けてきた冷血非道な魔女を、ついには屈服させてしまった魔王の膝元に。
ルルーシュは、フッと息を洩らして微笑むと、前を向いて歩き出しながら、少しだけ悪戯っぽい声音になる。
「今のセリフは、是非とも魔女でないおまえの口から聞かされたい気分なんだがな」
魔女の助けも欲しいが、今のルルーシュは、『ひとりの女』としてC．C．を欲しいと思っている。
要するに、公私にわたって一挙両得を狙っているのだと匂わされ。
まったくこの男は、油断も隙もないな――と返事に困ったC．C．は、かなり強引に話を変えた。
「……ちょっと、コンビニに付き合え。おまえが予定にない行動を取ってくれるから、明日の弁当の材料を買いそびれてしまったぞ？」
別の用件なら、いくらでも断ることは可能だったが。
毎朝の弁当作りは、ルルーシュが強制していることでもあったので、仕方なく付き合ってやることにした。

◇　◇　◇

最近のコンビニ事情は目覚ましいもので、ちょっとしたスーパーに負けないほどの生鮮食料品を揃えている。

普段ならルルーシュが献立を考えて目当ての商品を買い求めるところだが、弁当作りに関しては、最初から完全にC．C．の独断に任せ切っていたので、カゴだけ持ってC．C．の背後をブラブラついて回った。

C．C．は、頭の中で冷蔵庫の中身と相談しながら、なにやらブツブツと小声で文句を呟いて見せている。

「いつも不思議に思うんだがな、どうして同じ商品がこんなに高いかな？」

鮮度や品揃えに関しても、どう考えてもスーパーのほうが上だぞ？　と、人件費や流通経路、コストパフォーマンスを一切無視した苦情を申し立ててくれるので、黒の騎士団の活動経費に何かと頭を悩ませる機会の多いルルーシュは、「まァ、おかげで買えるんだからいいじゃないか」と適当にあしらった。

ちなみに、C．C．の生活費全般を面倒見ているのは、もちろんルルーシュである。

別居する際に、C．C．名義の口座を一つ作ってやり、その中に毎月決まった額を振り込んでいる。

いちいち明細を確認することなど皆無だったが、今まで一度も「足りない」と文句を言われた覚えはなかったので、どうやら渡されている範囲内で家計をやりくりしているのだろう。

何かコレ、ちょっとした花嫁修業みたいだな――とうっかり考え

てしまったルルーシュは、さりげなく手のひらの下に口元を隠した。
それでも気づかれてしまったのだろう。
「なに、笑ってる？」と横目で睨まれて、意味もなくゴホンッと咳払いをして誤魔化した。
「それより、ルルーシュ？　咲世子に週末車を出してくれと頼んでくれないか？　そろそろ、かさばる荷物を買出しに行きたいんだ」
C．C．が自分の財布で会計を済ませて、手早く袋に詰めるのを手伝いながら、ルルーシュは思案げに首を傾げた。
「週末か？　荷物持ちが必要なら、俺が付き合うぞ？」
本日予定していた会合が長引くようなら充当するつもりで予定を組んでおいたのだが、おかげで終日丸々身体が空いたわけだった。
さっそく詰め終えた商品を受け取りながら帰り道を歩き出すと、軽く眉間に皺を寄せたC．C．が、何とも渋い顔つきで視線を返してくる。
「おまえには無理だ。１０キロの米に、トイレットペーパーに、調味料の類いだぞ？」
「何とかする」
「必死だなァ」
「黙れ魔女」
淡々とやり合いながら、気づいた時にはC．C．のマンションの下まで帰り着いていた。
「じゃァな、また明日」
「あ、ああ」
あっさり言って荷物を差し出すと、ルルーシュは通りすがりにさりげなくC．C．の頬の上にキスを落として、きびすを返した。
結局、C．C．が泣いていた理由には触れずじまいだったが、最初からその必要は感じていなかった。
一度も振り返らずに３０メートルほど歩いて、携帯電話のミラーを使ってさりげなく背後の様子を覗いてみると、それまでマンション前に立ち尽くしていたC．C．が、なにやら大きく肩を落としな

がら、ようやくエントランスホールに向かって歩き始めたところだった。
そんなふうに別れを惜しんでくれるなら、とっさに引き止めるなり何なり声を掛けてくれてもいいだろう？　と不満を感じていると、手の中の携帯電話が突然ブルルッと軽い振動を伝えてきた。
お知らせランプは、緑の点滅。
C．C．からの、メールの着信だ。
少しだけドキッとしながら、ルルーシュはさっそくメールを開封した。
だが、伝えてきたのは、まったく予期しない内容だった。
『おまえ、私の作った弁当を食べていて愉しいか？』
C．C．からのメールが、そっけないのはいつものコトだったが。いろんな意味で反応に困ったルルーシュは、帰路を歩み続けながら返信を打ち込んだ。
『まァ初めのうちは、いろんな意味で愉しかったがな。おまえ最近、本でも買ったか？』
『そうではないが、クラスに料理好きの女子がいるんだ。昼時には自然と、そういう話にもなる』
なるほどな――と、一応納得はしたが、相変わらず話の意図がまったく読めなかった。
15秒ほど、かなり真剣に悩んだ挙句に、打ち込んだセリフがコレだった。
『で？』
三秒も経過せず、けたたましく電話のベルが鳴らされた。

「――古女房を相手にしてるんじゃないんだからな！　上手い不味いくらいハッキリ言えっ！　このバカモノッ！」

言うだけ言って切れてしまった。

ツー、ツーと無機質な電子音を鳴らしている携帯電話を、しばらく茫然と見つめるしかなかったルルーシュは、ひと気のない往来でひとり爆笑してしまった。

◇　◇　◇

どうやったって、『後悔』というものは先にはやってこないものである。

前日のことがあるものだから、今朝から一度もルルーシュの顔をマトモに見れずにいるC・C・は、そそくさと弁当箱を回収するためだけにルルーシュの部屋を訪ねた。

もちろん事前に、ルルーシュが不在であることは確認済みである。

そもそも昨日は、ルルーシュの予定を把握していたのでうっかり安心して、ついつい長居をしてしまったことが間違いの始まりだったのである。

挙句の果てに、泣いている姿をバッチリ目撃されてしまって。

それをまたルルーシュが、アレきり一度も問い質そうとしないものだから、鬱積していたモヤモヤとイライラが変な形で爆発してしまって。

正直言って、夕べの電話は、穴があったら即刻ルルーシュを埋めてやりたいほど後悔していたので、目当ての弁当箱を鷲掴むと即刻

立ち去るつもりでいたのだが、弁当箱を包んだハンカチの上に、これ見よがしに一枚のメモが挟んであるのに気づいた。
C・C・は、一瞬読まずに捨ててやりたい衝動に駆られてしまったが、そんなことをしてしまえば、地核を掘り下げて、マグマまで到達しかねない勢いで後悔するのは目に見えていた。
かなり渋々、本当に嫌々、非常に不本意ながら目を通した。
手のひらサイズの小さなメモには、見慣れたルルーシュの筆跡でたったの二行。

『卵焼きがうまかった。
明日はハンバーグが食べたい』

「――子供か、おまえは」
本当に、厭味な男だ。
おまえはまたすぐにそうやって、私を手のひらの上で転がそうと懐柔して。
極力、気持ちを動かさないように努力しているにもかかわらず、勝手に胸の奥のほうから「うれしい」という感情が込み上げてきてしまってる。
自慢ではないが、今日の卵焼きはちょっとした自信作だったのだ。
C・C・は、前日まで抱えていた憂鬱とは、また違った意味の溜息をしみじみ大きく吐き出しながら、最近頻繁にコールし慣れている番号に電話をかけた。
コールの音は14回。
この相手は移動までに時間が掛かるので、それくらいが通常の待ち時間だった。
ややあって、ふんわりした独特の甘い声音が耳朶に響いた。
『お待たせしました、C・C・さん』
「あ、ナナリーか？　今からちょっと、そっちに寄っても構わないか？」

『ええ、もちろんです。ひょっとして、明日のメニューの相談ですか？』
クスクスと愉しげな笑い声で冷やかされ。
C．C．は、思わず意味もなく、二の腕あたりの服の皺を伸ばしながら唇の先を尖らせる。
「無理難題を押し付けられた。明日、おまえのお兄さまは、ハンバーグを食べたいのだそうだ」
『ふふっ、子供みたいなお兄さま。いいですよ、今なら咲世子さんも一緒にいますから』
「ああ、いつもすまないな」
C．C．が言うと、ナナリーは途端に笑い出してしまった。
『お兄さまの幸せのためですから』

クラスの女子たちと、料理の話で盛り上がっているのも決して嘘ではない。
だが、C．C．と同じように、付き合っている男子に弁当を作っている女子の数名が口を揃えて、「でも、悔しいけど、やっぱり家庭の味には適わないのよねぇ～」と愚痴を洩らしてくれたのだ。
そんなものか？　とC．C．は首を傾げた。
マリアンヌの手料理は、C．C．も何度か口にした覚えがあったが、あまりに昔の記憶過ぎてハッキリ覚えていなかった。
そこで、ナナリーに協力を求めたというわけである。
ナナリーも、「うろ覚えですけど」と返したが、ナナリーは八年間、毎日のようにルルーシュの作った料理を食べていた。
そして、ルルーシュならば、明確にマリアンヌの味を覚えているはずだった。
妹思いの兄である。少なからず、マリアンヌの味の再現に苦心していたはずだ。
C．C．は、わざとナナリーに聞こえるように苦笑を洩らすと、高飛車な態度を装う。

「アイツにはいろいろ世話になっているからな、この程度なら、まァ安いものだろう」
ナナリーは、笑っただけで取り合わずに、『それでは、お待ちしています』と言って電話を切った。
実際、安いものさ――と、C．C．は閉じた携帯電話に向かって小さく呟く。
私がルルーシュに、味わわせた絶望と失意の味に比べれば。
この程度の努力など、『努力』と銘打つほうがおこがましい――
「……そんなことを言って、結局、私も本心では、少しでもルルーシュに『気に入られたい』と思っているだけなんだろう？」

あの男が、年相応の顔をして、喜んでいる姿を見るのが愉しい。
今まで味わう機会を切り捨ててきた、年頃の少年ならば味わって当然の喜びを、つかのまルルーシュに味わわせてやって、時機を見てC．C．は姿を消すつもりでいた。
それなのに――気づいた時には、自分のほうこそ、どんどん深みに嵌ってしまっている。
今まで味わう機会を切り捨ててきた、年頃の少女が味わう他愛無い喜びを、日増しに実感しているのが、素直に「愉しい」と認めざるを得ない状態まで欲が芽生え始めてしまっているのだ。
自分では何も出来ない、する気の無い無精者の『共犯者』。
そんな状態のまま留まっていられたなら、決して味わう必要の無かった欲の部分。
その自覚を、C．C．に目覚めさせるために、ルルーシュが手を変え品を変え策を弄しているのを知っている。
だが、それを承知でC．C．も、ルルーシュの気持ちを「愛しい」ものとして認識し、決して手放したくないものとして、我欲が芽生えてしまいつつある事実を認識しているのだ。

――困ったなァ……。

あんまり無闇に迫って来られるのも対応に困ってしまうが、その辺はルルーシュのほうが一枚上手で、C．C．が負担に感じないギリギリのラインで静観の立場を装い続けている。

後に引くのも、前に進むのも、C．C．の一存で「決めろ」とバトンを渡されているわけだった。

本気で嫌なら、とっくにそんなバトンなど投げ捨ててしまってる。

だが、正直言えばC．C．は、後に引くのも、前に進むのも嫌なのだ。

出来れば、現状のまま温存して欲しい。

そんなふうに欲張り始めている本心を自覚しているからこそ、対処に困ってしまうわけだった。

結局は、堂々巡りの元の木阿弥。

この世に、『コード』なんてものが存在しなかったら。

自分が、『不老不死』の魔女なんかじゃなかったら。

「他人の境遇など、一度も羨んだことなど無い」と断言してしまえる、ルルーシュの強さがC．C．には羨ましかった。

いい加減、グルグル同じことばかり考え続けるのもうんざりし始めていた矢先、メールの着信があるのに気づいた。

ルルーシュが勝手に設定していった紫のランプではなかったので、『誰だろう？』と首を傾げながら開封してみると、相手は蓬莱島でゼロの仮面を被っているスザクだった。

『最近どう？　変わりない？』

「――まったく、おまえは。ルルーシュとはまた違った意味で、毎回毎回、返答に困ることを平気で訊ねてくる奴だなァ」

ひとしきり携帯電話に向かって愚痴を呟いた後、C．C．は、そそくさと返事を打って送信した。

『毎日が平和すぎて、逆に困ってる。たまには私が、こっそりゼロの影武者を務めてやろうか？』
スザクからの返信は、いつもに比べて３０秒ほど余計に掛かった。
どうやら、笑っていたらしい。
『正直言って、時々お願いしたくなるけどね。僕がルルーシュに怒られるから、鄭重に遠慮しておくよ』
『つまらない男だな』
『そうは言うけどね、きみ本気で恥ずかしくないのかい？』
『恥ずかしいって、なにが？』
『演説の際に、不必要に格好付けたがるオーバーアクションだよ。アレだけは、本当勘弁してもらいたい』
『そうか？　どうせ笑われるのは、私でなくルルーシュ（ゼロ）だからな。私は結構愉しんでいたぞ？』
それどころか、あんまり随所でビシィッ、ビシィッとポージングを決めすぎて、顔を赤くしたルルーシュに、「俺はあそこまで、表現過多ではない」と駄目出しを食らったくらいだ。
しかし、そう思っているのはルルーシュくらいのもので、黒の騎士団の誰一人として、入れ替わりに気づいた者は皆無だった。
『そもそも、ルルーシュのアレも、鬱屈した毎日に対するストレス発散の場だったからな。せいぜい仮面の男になり切って、バレない程度に愉しめ』
少し長めのメールを、人差し指一本で苦心して打ち込んで、送信すると、今度はスザクのほうから電話が掛かってきた。
「そこまで理解してるクセに、やっぱり気持ちを受け入れる気にはなれないのかい？」
Ｃ．Ｃ．は、何も言わずに電話を切ると、代わりにメールを送信した。
『その件に関しては、口を挟むなと前から言ってあるはずだろう？』
『わかってる。でも、話くらいなら、いつだって聞いてあげるよ？

前から言ってるはずだけどね、放っておくと、きみのほうからは梨のつぶてだから、これでも少しは心配してるんだ』

返されてきた文字の羅列を、丸々一分近くＣ．Ｃ．は眺め続けて。

『まァ、そのうちな』

それだけ打って、送信して、ついでに携帯電話の電源をオフにした。

第三話 ： 逡巡

革命のためとはいえ、一時的に祖国を捨て去り、『百万人のゼロ』計画に賛同した日本人（イレブン）たちを収容するために、中華連邦から貸与されている潮力発電用の人工島――蓬莱島。

作戦当時、現場を指揮していたナイトオブセブン・枢木スザクの面目を丸潰しにしてくれた連中が根城（アジト）として構えているその島は、驚くほどの安心感と落ち着きに満たされ切っていた。

何しろそこら中で、シーツや、シャツや、下着の類いがヒラヒラ風に舞い踊り、子供たちが歓声を上げながら洗濯物の影で鬼ごっこを愉しんでいるのである。

「コラァー！　そっちで遊んじゃダメって言ってるでしょうーっ！」
「わーっ！　怒られたーっ！　ごめんなさい～っっ！」

通りすがりの女性隊員が拳を振り上げながら怒声を上げると、なおさらテンションを上げられてしまった子供たちが、キャーキャー笑い転げながらバタバタと走り去っていく。

いつでも急停車できるように、ゆっくり走りゆく車中からその光景を眺めていたスザクは、ポカンと口を半開きにしたまま茫然と子供たちの後ろ姿を見送った。

百万人もの人口が、一挙に別な島に移動したわけだから、中には子供連れの隊員が含まれていたって不思議は無い。

問題は、何の不思議も無く、子供たちが大っぴらに遊んでいられる環境のほうだった。

結成後、わずか数ヶ月で、世界にその名を轟かせたテロリスト集団・黒の騎士団。

――その本拠地が、本当にここなのか？

子供たちの場合は百歩譲って、他には遊ぶ場所が無いのだろうから――と納得することは可能だったが。

数メートルも行かないうちに、昼間っから道端で花札に興じている男性隊員の姿まで見かけてしまった時には、他人事ながらスザクは思わず頭を抱えてしまったものだ。

ここの連中の、士気とか、モラルとか、個人レベルでの危機管理能力といったものは、一体どうなっているのだろうか？

「――んん？　さァな、俺は直接関知していない。環境面に対する改善要求は、放っておいても連中のほうから上がってくるからな。後は適当な人間に、現場の判断を任せてあるだけだ」

ゼロの仮面を共有するために、隠密裏にスザクをこの場所に案内したルルーシュは、いとも平然とそう語った。

「基本的に連中は退屈しているからな。待機中にフラストレーションを溜め込んで、作戦中にそれを発散しているのだろう。どうせ毛色の違った集団の寄せ集めなんだ。いちいち俺が綱紀粛正を唱えて歩くほど、連中も子供ではないだろう？」

そんな連中に、今までさんざん煮え湯を飲まされてきたスザクは、何だかとてつもなく釈然としない気分を味わった。

――たしかに。

ナイトオブラウンズの内幕にしたって、あんまりそう褒められたものではない。

作戦に関係しない私生活レベルでは、ジノにしたって、アーニャにしたって、結構好きなように自由時間を満喫している。

しかし、ナイトオブワンであるビスマルク・ヴァルトシュタインを筆頭に、各々が徹底した自己管理に精を出しているのだし、立場

の違いから百パーセント同じ内容の情報伝達は行われていないが、皆一様に個々の責任で作戦に対する心構えを２４時間体勢で当たり前のように持っているのである。
その点、ここの連中と言ったらどうだろう？
実戦で交えた時の経験から、ゼロに一極集中型の指揮系統である認識は持っていたのだが。
肝心の隊員たちのモチベーションがこれでは、否応無しにゼロの独裁国家――いや、反骨精神だけは一人前に抱えた集団を、『おんぶに抱っこ』状態で強引にでも率いていくしか、正直なところルルーシュも打つ手が存在しなかったのだろう。
仮面の男・ゼロ――そして、その正体は、祖国に棄てられし皇子、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。
その正体を隠して、敵国のテロリストを指揮しているわけだから、さぞかし口先だけの甘言を弄して、何も知らない連中を上手い具合に丸め込んでいるのだとばかり思い込んでいたスザクは、発作的に込み上げてくる可笑しさに、我慢し切れず腹を抱えて笑い始めた。
「――なんだ、突然？　気色の悪い奴だな」
仮にも、敵方の作戦総指揮官まで担当したことのあるラウンズの一員である。
念には念を入れ、トウキョウ租界の沖合いから潜水艦で中華連邦まで移動して、そこから先は用意しておいたハイヤーを利用して蓬莱島に乗り込んだ。
乗車の際、ルルーシュは運転手にギアスを使ったが、スザクを無事に蓬莱島に迎え入れるためには仕方のない手段でもあった。
「――ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる――」
だが、頭ではそう理解しているつもりでも、どうしても駄目だった。
ルルーシュが絶対遵守のギアスを発動した瞬間に、意志の力だけでは抑えようのない嫌悪に虫唾が走った。
出発前からそんな感じだったから、それから車中で過ごした二時

間ほどの道のりは最悪の雰囲気で。
　そんな中、突然車内にスザクの明るい笑い声が響き渡ったものだから、ルルーシュも驚いている様子だったが、内心ではホッと胸を撫で下ろしている様子が手に取るようにわかった。
　全面に目くらましのシールドを張り巡らせてあるスモーク・ガラス。内側からは何の支障もなく外の景色が覗けるが、外側からはマジック・ミラーになっているので、ゼロの衣装に身を包んでいるルルーシュも、今は隠すことなく素顔を晒している。
　その秀でた眉の根に寄せられている皺の数を面白そうに眺めながら、スザクは手の甲で窓ガラスをコンコンと叩いた。
「こういう律儀なところ、ルルーシュらしいって思ってさ」
「？　何の話だ？」
「約束したろ？　『百万人のゼロ』を見逃す代わりに、『彼らを救って見せろ』ってさ」
　ブリタニアの敵・仮面の男ゼロ。
　そして、裏切りの騎士・ナイトオブセブン・枢木スザク。
　互いをあざむいていた当時に、交わし合った約束を。
　一瞬、思い出すのと同時に、当時の風景を彷彿としたルルーシュは、スザクとは反対側の車窓に視線の先を遊ばせると、ゆっくり流れゆく景色を眺めながら、ふいに持っていたバイザー付きの帽子をスザクの膝の上に放り投げた。
　黒の騎士団の隊員ならば、誰でも当たり前に身につけている制服。
　その一式で既に全身を固めているスザクの姿を、しばらく無言で眺めた後、ルルーシュはチラリと皮肉に笑みを浮かべた。
「それを言うなら、おまえのほうこそ約束したはずだ。――エリア１１に残る日本人を救って見せるとな」
　スザクは、受け取った帽子をさっそく目深に被りながら、口元に同じような笑みを浮かべる。
「そのために、自分はブリタニア軍に入ったんだ。償うため――悲劇を、繰り返さないために」

「戦えるのか？　ブリタニアと」
「愚問だよ、ルルーシュ」
ガクンと軽い振動。
地上から、イカルガのドックに滑るようにして一台のハイヤーが飲み込まれていく。
ルルーシュは、口元に笑みを刻んだままゼロの仮面に手を伸ばすと、慣れた仕草で眼前にかざした。
「では、見せてもらおうか？　今度こそ、真に一つの忠誠を」
「誤解するな、ルルーシュ。僕は決して、きみの臣下に下るつもりは無い」
「無論だとも」
シュウィンと小さな空気圧を発して、形の良い後頭部が仮面の中に包み込まれていく。
同時に、変声マイクに切り替えていた声音が、クックッと愉悦げに笑みを刻んだ。
『――誓え、枢木スザクよ。裏切りの騎士よ。自ら演じる『ゼロ』に、人生で一度きりの忠誠を、な――』
言った先から、バサリと翻るマントの音。
イカルガのドックに乗艦していた瞬間から、視界は一段と薄暗くなっていた。
その視界一面を、さらに暗黒で塗りつぶすようにして、スザクの眼前をマントの影が覆い尽くした。
瞬間、まるきり計っていたようなタイミングで、車のドアが外から開けられた。
「お待ちしておりました、ゼロ様」
『出迎え、ご苦労。その後、変わりはないのだろうな？』
「ええ、それが少々…、カイロに潜入中の部隊から――」
『何？　――まあ、良い。至急艦橋（ブリッジ）まで全員に招集を掛けてくれ。そちらで報告を聞こう』
「承知しました」

カッカッとブーツの底を鳴らしてルルーシュが歩き始めるのと同時に、スザクの姿を覆い隠していたマントがズルリと落ちていき。やがて音もなくドアが閉められると、車はスザクを乗せたまま貨物用のエレベータ前まで移動して、エンジンが切られた。
このまま３０分ほど待機して、ルルーシュが全員の注意を集めているうちに、事前に説明を受けていた経路から、単独でゼロの私室まで移動するのだ。
相手がルルーシュとわかっている以上、敵方の大将と同席していても、何の感慨も抱きようが無かったが。
ゼロの仮面を共有する道を選んでしまった以上、自分もとっさの判断で、ああいうキザったらしい真似のひとつくらいは、いつだって平然と出来るようにならなきゃいけないワケなんだよな――と、スザクは今更のように考えて、しみじみ複雑な気分を味わった。

・◇・◇・◇・◇・◇・◇・◇・◇・

戦闘空母イカルガ内に設けられたゼロの私室。
その部屋に一歩足を踏み入れた瞬間に、『なんとなく、ルルーシュらしい部屋だな』とスザクは思った。
殺風景と呼んでやりたいほどに、余分な物はひとつもない。
さりげなく置かれている物の一つ一つが、機能的に配置されている通信スペース。
壁の三面には情報をリアルタイムに映し出す液晶画面が設置されており、背後の一面は可動式の書架で隠せる仕組みだ。
最高級と最新鋭の機材だけで設えてある室内。
だからと言って、一般庶民が思わず贅沢に目を剥くような代物―

―たとえば、豪華なソファに、シャンデリアなどといった余分な調度品などは一切見当たらない。
そこらにあるビジネスホテルでも、もう少しくらいは生活臭といったものが感じられるだろうと皮肉に思ったくらい、味も素っ気もない単なる『綺麗な部屋』だった。
こんな場所で寝起きしながら、今までルルーシュはその身ひとつで、ブリタニア軍と丁々発止の戦略を繰り広げてきたわけである。
――最愛の妹・ナナリーに、『優しい世界』を与えてやりたい一心で。

隠密裏にその片棒を担ぎ始めて、早いもので数ヶ月。
この生活を始めるに当たって、何より先にルルーシュに要求したのは、「自分に無断で、金輪際ギアスを使わないこと」である。
そんなものに頼らなくても、ルルーシュには頼れる頭脳があるからだ。
日常的にはアッシュフォード学園のクラブハウスで人畜無害な仮面を被っているルルーシュに、この先必要になる作戦の詳細を詰めさせて、後に練り上がってきた指示に従って、スザクは現場でゼロの仮面を被って体力面での作業に従事する。
始めてみれば、これがまた予想外に精神的負荷の高い作戦だったが、その辺の事情は十二分に実体験として承知しているルルーシュが、少なくとも十日に一度の割合で、スザクに休暇を与えるために蓬莱島まで足を運んでくる。
初めのうちの数ヶ月は、スザクにゼロの演技と知識を叩き込むために、午前中は蓬莱島、昼前にはC．C．の編入準備を進めるためにアッシュフォードに一時帰還して、夜中にまた蓬莱島までトンボ帰りする生活を続けていたのだから、ルルーシュという男の執念は、どうやら実際の体力をたやすく上回ってしまうらしいと、しみじみ感心させられたものだった。
一方、体力には滅法自信があるものの、ルルーシュとは違って「

他人を演じ切る」という精神的な重圧に慣れていないスザクは、その日もだらしなくグッタリ疲れ切っている姿を晒して、通信スペースの肘掛け椅子に深々身体を預けながら、大画面に映し出されている『もう一人のゼロ』の姿を横目に眺めていた。
「……元気そうだね、ルルーシュ？　何か良いことでも有ったのかい？」
『んん？　いや別に、言うほどのことは何もないけどな』
口ではすぐにそうやって否定するクセに、いつもに比べて唇の角度が若干ゆるんでいるようにスザクの目には映った。
彼の実父であり、神聖ブリタニア帝国第９８代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアに命令されたのが始まりで、ルルーシュの行動を監視し続けてきて、もうじき丸二年。
その間に培ってきた経験から、ルルーシュの嘘を見抜くことに関しては、妙に鋭くセンサーが作動してしまうのだ。
Ｃ．Ｃ．と最後にメールを交わしたのは二日前。
その間にひょっとして、私生活のほうで何かうれしい進展でもあったのだろうか？
スザクは一瞬思案して、『いや、それは無いな』とすぐにも否定した。
先日交わしたメールだけでは、明確な確証は何ひとつ手に入れようが無かったが、何を隠そうスザクとＣ．Ｃ．は、ああした内容のメールを五日と置かずに交換しているのである。
いっそスザクだけが知るＣ．Ｃ．の反応を、試しに口走ってみるのも面白そうだなと考えなくもなかったが。
唯一の雑談相手であるＣ．Ｃ．に今はまだ嫌われたくなかったし、それ以前にＣ．Ｃ．の知らないところで、ルルーシュを喜ばせてしまうのが何だか癪だった。
――だってアレ、どう考えても両想いの反応だろ？

何事に対しても、歯に絹を着せないタイプであるはずのＣ．Ｃ．が、ルルーシュに対する気持ちだけ曖昧にぼやかし続けているのである。

あんまり態度が曖昧すぎて、そのうち理性の歯止めを見失ってしまったルルーシュに、強引に押し切られるのを待っているようにしか思えない。

そんなスザクの本心には気づく気配もなく。大画面の中でゆったり寛いでいるルルーシュは、組んだ膝の上で黒手袋の指先を絡ませながら、いつになく屈託の無い笑みを浮かべて見せている。

『そういうおまえは、相変わらずだな』

完全にやさぐれ気分のスザクは、椅子の背にズルズル身体を沈めると、当て付けのようにゴキッ、ゴキッと首の骨を鳴らした。

「おかげさまでね。コレでも少しは慣れたつもりなんだけど。昨夜は、たまたまラクシャータさんに寝込みを襲われたモンだからさ」

『ラクシャータが？　――おい、スザクおまえ……』

おやおや。

ルルーシュにしては、珍しいこともあるものだ。

いつになく過敏な反応を示して見せる様子に、意外な発見をした気分のスザクは、満足そうに眼を細めて微笑んだ。

「誤解するなよ。設計図持参で、『ちょっとＫＭＦの性能に関して、相談したいことがあるんだけどォ～』って突然乗り込んでこられただけ。パジャマに着替えた後だったから、かなり焦ったけど」

いったい何を想像したのやら。

気まずげに目の淵を赤く染めているルルーシュは、『そうか』と唸るような低音で答えて、『それで、大事無かったのだろうな？』とついでのように訊ねてきた。

どうやらルルーシュなりに片想いの苦衷をさんざん舐め味わって、嫌でも精神的に成長している部分があるのだろう。

二人とも妙なところで押しの弱いタイプだったから、見ている側には全くもどかしい限りだが。

ひょっとして、ようやくキスでもしたのかな？　と勝手な感想を抱きながら、スザクは肘掛け椅子の上でウンッと大きく背伸びをすると、眠そうな目をゴシゴシこすった。
結局ゆうべはラクシャータが帰った後も妙なぐあいに目が冴えてしまったので、一睡もしていないのだ。
「たぶんね。ロイドさんとセシルさんに鍛えられているから大丈夫だと思うけど。ルルーシュには少しばかり専門用語を覚えてもらう必要があるかも。心配事と言ったら、それくらい？」
『なら、最初からそう言え。会見の様子は、例の如くビデオで撮影してあるのだろう？』
二人がゼロの仮面を共有するに当たって、一番初めに解決する必要に迫られたのは、「記憶の共有」である。
毎日定時に報告書を送ることを取り決めた際、ルルーシュは当然の顔をして、「その日に話をした全員の名前と、会話の内容を一切書き記せ」と求めた。
スザクは、「そんなの無茶だよ！」と反対した。
あいにくルルーシュとは違って、ごくごく一般的な記憶力しか持ち合わせてないのである。
仕方なくルルーシュは、アーカーシャの剣から帰還すると、大至急でゼロの仮面のスクリーン部分に高性能の録画機能を追加した。仮面の内部に大記憶容量のＩＣチップを組み込んで、そこから後日ダウンロードした記録を互いに確認することにしたわけだ。
要するに、ゼロの仮面を被っている最中に発した独り言から、無意識の視線の動きまで一切記録されてしまうわけである。
軍の生活が長いスザクも、これには若干戸惑いを感じた。
だが、ルルーシュという男は、変なところでおおらか過ぎるくらいに大物だった。
「作戦のためなんだから、仕方がないだろう？」の一言であっさりプライバシーの権利を放棄して、
「そもそも俺は、丸々一年どっかの誰かさんに、２４時間体勢で監

視される生活を送っていたわけだからな」とトドメの一言で、あっさりスザクの反論を遮った。
別に僕だって、好きで監視してたわけじゃないんだけどね――と大いに不満に思ったが。
仕方なくスザクも割り切ると、『互いの行動をピーピングし合う』という異常な生活を始めたわけだ。
初めのうちの数日は、試験的に一日交代でゼロの仮面を被った。
何をしていても、『後でコレ、ルルーシュに覗かれるワケなんだよな？』と考えるだに、息の詰まるような不快感を覚えたものだが。
三日で慣れた。――というよりも、飽きた。
ルルーシュって本当に、「如何にして他人の鼻を明かしてやろうか」とかアクドイことを、四六時中大真面目に考えてるだけなんだからさ。
ふたたび大きなアクビを洩らしたスザクは、そのまま三秒ほど放心して。
ハッと意識を取り戻すと、「何の話だったっけ？」と慌てたように背筋を伸ばした。
画面の中ではルルーシュが、呆れた様子でクスクスと笑って見せている。
『あと一時間ほどでそちらに着く。外で鉢合わるとマズイからな、俺が着くまで部屋から動くなよ』
「了ォ～解」
どうやら今は、話していても実りのないことを理解したのだろう。ルルーシュのほうから切り上げの文句を口にしたので、これ幸いとスザクは、用の済んだメインモニターの電源に手を伸ばした。
ところが。
『……いい加減慣れるべきだと、頭では理解しているつもりなんだがな。おまえにその格好で迎えられるのは妙な気分だな』
いつだって、自分の用件が済んでしまえば、さっさと通信を終えてしまうルルーシュにしては珍しく、そんなふうな軽口を付け加え

て、スザクが少々驚いているうちにも、面映そうな微笑を残して通信は途切れた。
しばらくの間、口を半開きにしてポカンと画面を凝視していたスザクは、ややあってグッタリ疲れ切った態度で椅子の背中に身体を預けると、どことなく拗ねたような口調で愚痴を吐き出した。
「……それはね、ルルーシュ。僕が言いたいセリフだよ」

――奇跡なんて無い。全ては計算と演出。
――ゼロという仮面は記号なんだ。嘘をつくための装置に過ぎない。

あの日、枢木神社で、そう告白したのはルルーシュだった。
その「嘘」をつくための装置の一環として、いかにもブリタニアの皇子然とした風体で、華麗に仕立て上げられているその衣装。
身長を偽装しているブーツの底はそのままだが、体格を良く見せるために入れている肩パットのサイズはずいぶん小さいものに変更した。
ズボンの股下を短くカットした代わりに、太腿周りにずいぶん余裕を与えた。
見た目には完全に瓜二つのシルエットを維持しながら、細かい部分にずいぶん変更を加えた。
おかげで、すっかり自分の身体に馴染んでしまっている、『仮面の男・ゼロ』の姿。
腹の上で両手を組み、しばらく放心していたスザクは、ふいに黒手袋の指先でゴソリと襟元を探ると、胸元から見慣れた騎士章を取り出した。
白い鳥が羽を広げたような形。
彼女が、ユーフェミアが、手渡してくれた騎士の証(あかし)だった。

――スザク、私ね、わかったんです。理想の国家とか、大儀とか、

そういう難しいことじゃなくて、ただ私は笑顔が見たいんだって。
今大好きな人と、かつて大好きだった人の笑顔が。
――私を、手伝ってくれますか？

今でも、耳の奥に刻み付けられている。
叶うはずだった、彼女の願い。
叶えられなかった、自分の願い。

ラグナレクの接続を阻止した後、スザクは一度だけ復讐の刃（やいば）をルルーシュの喉元に突きつけた。
ルルーシュが、仮面の男を演じ始めた理由はふたつ。
一つは、最愛の妹、ナナリーのために『優しい世界』を用意すること。
そして、母殺しの真相を暴き出し、自分たちを捨てたシャルル・ジ・ブリタニアに復讐すること。
それを実現するために、数多の嘘を重ねて謀略の限りを尽くしてきた。
その男が、ついには自らスザクの足元に膝を屈して見せたのである。
全ての仮面が崩落して、廃墟と成り果てている黄昏の神殿で、わずかな光を受け鈍く光っている刃の切っ先をしばらく無言で見つめた後、ルルーシュは何の躊躇いもなくスザクの足元に臣下の礼を示した。
片膝を地面の上につき、片腕を胸の前に押し当てた格好で。
完全に抵抗を放棄している意思を示すために、自ら復讐の刃の切っ先に、仰け反らせた首筋を押し当てた。
「――止めろッ！！」
ぷつりと切れる薄い皮膚。
流れ始めるひとすじの血潮に、思わず叫んでいたのは、枢木神社でのやり取りを何も知らないＣ．Ｃ．であった。

焦りに任せて「ギアスの暴走」という新事実を口走ってしまったが、今更そんなことを聞かされてもスザクの心は微動だにしなかった。
むしろ、激昂したのはルルーシュだ。
首筋がなおさら赤い血潮で染まるのも構わずに、「おまえは黙っていろっ！！」と一言の元に、Ｃ．Ｃ．を恫喝して黙らせた。
だからと言ってルルーシュは、スザクに対して臣下の礼を取ったわけではない。
ルルーシュは、ユーフェミアの魂に対して臣下の礼を示したのだ。
今現在も彼女ひとりの騎士である、ナイトオブセブン・枢木スザクの関知しないところでは、金輪際ギアスを使用しないことを復讐の刃の前に誓った。
あれ以来ルルーシュは、個人の判断だけではギアスを使っていない。
機密情報部まで指揮して、ルルーシュの行動を監視していた当時とは違って、ルルーシュの行動を把握する術はないのだから、完全に信用取引に過ぎなかったが、疑う必要はないだろうとスザクは考えている。
今更スザクを裏切ったところで、ルルーシュには一切の利点が存在しないからだ。
共通の敵は、神聖ブリタニア帝国第９９代皇帝、シュナイゼル・エル・ブリタニア。

枢木神社での対話の後、当時はまだ公式にラウンズであったスザクが手引きをして、政庁からナナリーを奪還する作戦に成功していた。
その時には既に、シャルル・ジ・ブリタニアから直々にエリア１１の総督権限を一切停止されていたナナリーは、後に第９９代皇帝に即位したシュナイゼル・エル・ブリタニアから「謀反」の罪を着せられていた。

父王の下した勅命を不服とし、本国への送還を嫌って、補佐役であったナイトオブセブンを皇族権限でそそのかし、脱出の手助けをさせたのだという事実無根の反逆罪。
本来ならば大罪である。
だからシュナイゼルは、『皇籍奉還特権』の使用を無断で強行し、皇位継承権を剥奪した上で、ナナリーの自由を保障した。

――きみのお望みどおり、ナナリーの自由は保障してあげよう。
――ただし、これ以上私に逆らうつもりなら……わかっているのだろうね、ルルーシュ？

もちろんシュナイゼルは、全ての事実を知っていた。
ルルーシュのギアスのことも、ゼロであることも。
後に、ラグナレクの接続を阻止するために、ルルーシュの犯した親殺しの大罪も。
そしてルルーシュが、そうまでして守りたいと躍起になっているのは、夢見がちな少女の願望で『優しい世界』の実現を願っているだけの、実際には役にも立たない不具の異母兄弟。
エリア11のお飾り提督程度にしかその価値を認めていなかったナナリーを、これ幸いと手元から放出するのと同時に、ルルーシュに対しては、暗黙の了解で破格の口止め料を請求したわけだった。
ルルーシュは煩悶を抱えたが、スザクがその甘さを容認しなかった。
シュナイゼルにゼロの正体を知られている以上、ルルーシュがゼロの仮面を被り続けるわけにはいかない。
だからスザクが、ゼロの仮面を引き受けることにした。
一刻も早く、ゼロの正体を完全に自分の物にして、黒の騎士団――必要であれば、世界中の人間に対して、正体をバラしてしまう必要があった。
それさえ無事にクリア出来れば、シュナイゼルが脅しを掛けてき

たところで恐れる必要はない。
それを目標に、今現在は実行に移すタイミングを計っている最中ではあったが。

「――……ねえ、ユフィ？　……本当に僕は、間違ってないのかな？」

白い鳥が羽を広げたような形の騎士章。
それを、ひたいに押し付け、問いかける。
不器用なところも、過去に犯してきた罪も全部含めて、スザクの存在を丸ごと認めてくれた。
きみのその言葉があったから、僕の心の中で止まっていた時間は、ふたたび時の歩みを刻み始めた。
でも、そんな僕の時間さえ、いずれは時の経過に従って、必ず終わりを迎える時は訪れる。
その終わりの瞬間が、目前に見え隠れし始めてから自分の判断が間違いであることに気づいても、その時にはもう既に手遅れなのだ。
肺の中で鬱屈していた溜息を吐き出した刹那、部屋の扉に設置してあるインタフォンから聞き慣れた女の声が聞こえてきた。

『ゼロ、入っても宜しいでしょうか？　私です』

――カレン、だ。
瞬間的に心拍数が上がるのを感じたスザクは、慌てて胸元に騎士章を収めると、コンソールの上からゼロの仮面を取り上げた。
カッカッと足早に通信スペースから抜け出すと、応接スペースに歩みを進めながら、『入れ』とゼロの口調で応答した。
スザクが、カレンを苦手にしているのにはワケがある。
自分の知らないところで、機密情報部さえルルーシュの配下に下っていた。その事実に憤慨したスザクは、ルルーシュがゼロである

確証を得るために、『リフレイン』を使ってカレンに自白を強要した。
ところが、いざとなったらスザクは非情に徹することが出来なかったのである。
挙句の果てに、激怒したカレンからフルボッコの反撃を食らってしまったものだから、正直言えば、今更合わせる顔が無かった。
やがて扉の向こう側から姿を現したカレンは、仮面を装着しているゼロの姿を眺めて苦笑して、いつものように気さくな態度で持っていた資料を手渡した。
「はい、これラクシャータさんから。『エナジーウィングの基本構造概念まで理解してるなんて、相変わらず抜け目のない大将ねェ～』って褒めてたけど。『キャメロット』と言ったかしら？　ランスロットを開発している部隊」
『――あ、ああ』
「あんな所にまで、息の掛かった人間を送り込んでいるなんて流石ね。スザクが知ったら、泣いて悔しがるんじゃないかしら？　いい気味だわ」
泣いて悔しがりはしなかったが、今にも逃げ出したい気分で一杯だった。
もしくは一刻も早く、カレンに謝ってしまいたい。
その一件を、ルルーシュに話して聞かせるのは抵抗を感じたが、黙ってやり過ごせる問題でもなかったので、早いうちにスザクのほうから白状していた。
ルルーシュは他人事の気楽さで笑って、「気にする必要はないだろう？」とあっさり聞き流した。
ブリタニアの皇子であるルルーシュの正体すら最終的には容認して見せたのだから心配ない――と。
そんなに簡単な問題かなァと、すっかり疑心暗鬼なスザクは、さっそく渡された資料に目を通しながら、向かって左側の椅子に腰を下ろした。

『用件はそれだけか？』
ゼロの演技でも、ルルーシュの演技でも、『本当にそっけない男だなァ』と自分で演じていて感心してしまう。
だが、こんな場合には、そのそっけなさが役に立つのは事実であった。
しかし、そんな態度には慣れているらしいカレンが、苦笑まじりに歩みを進めてきた。
「そうね、表向きの用件は、それだけなんだけど」
さらに砕けた口調で言いながら、カレンは横から資料を覗き込める位置にストンと腰を下ろしてきた。
スザクの心拍数は一挙に跳ね上がったが、今度のそれは、さっきとはまた違った理由だった。
「C・C・、元気にしてる？」
いつも通り、気さくな声。
けれども、本来の用件はそっちだな――と、なんとなくスザクは直感した。
『ああ、前に話した通りだ』
政庁からナナリーを奪還する際に、捕虜として身柄を拘束されていたカレンの救出に一役買ったのもスザクだ。
結果的に度重なる反乱を起こしたナイトオブセブン・枢木スザクは、その罪をナナリーに行使した『皇籍奉還特権』で特赦され、今現在はナイトオブラウンズから除名されている身の上だった。
世間ではその行方が密やかに囁かれている昨今だが、もちろんカレンは気づいていない。
ただ、戻ってきたイカルガにC・C・の姿が消えていることに気づいて、ルルーシュにその行方を訊ねた。
ルルーシュは、ただ一言「アッシュフォードに通わせている」とだけ答えた。
そのシーンを、ICチップからダウンロードした映像で眺めていたスザクは、果てしなく嫌な胸騒ぎがしたものだったが。

表面上は鉄壁の無表情を装いながら、パラリと資料を一枚めくった刹那、毅然とした仕草でカレンが左手をゼロの右手の上に重ねてきた。
「――ねえ、答えてルルーシュ。一度しか聞かないから」
――頼むよ、ルルーシュ。
スザクは、内心でそう叫んだ。
こういうことは、きっちり事前に教えておいてくれなきゃ。
だが、カレンの質問は、少しだけスザクの考えを裏切った。
「もし――もしも、よ？　C．C．がアンタの傍に居なかったら……ひょっとして私にも、少しくらいなら……希望はあった？」
『……カレン、……』
てっきり今から「恋の告白」でもされるのかと思い込んでいたスザクは、一瞬ゼロの演技を忘れて、正面からカレンの顔を見つめ返した。
変声マイクを通している以上、誰の耳にも違いは認められない。
微妙な言葉遣いや、イントネーションの違いはあるにしろ、声紋鑑定の分析機材さえ騙してしまえる代物なのである。
もちろん違いを見破ることの出来なかったカレンは、ゼロの声音から驚きの気配を察して、自ら解答を導き出してしまった様子だった。
泣き笑いの表情で視線を落とすと、「わかってたけど、――」と強がりのセリフを最後まで言い切れずに、思わず言葉を詰まらせる。
「……シャーリーから、時々話は聞いてるんだ。アンタたち、今ではアッシュフォードで一番似合いのカップルなんですって？　アンタが大学に進学すると同時に、籍でも入れるんじゃないかって、巷ではトトカルチョまがいの行為まで横行してるんだから。アンタは何も知らないと思うけど」
本気なの？　と訊ねられ、スザクは真剣に返事に窮した。

答えるだけなら、その返事に該当するものをスザクは知っている。
だが、仮にも部外者である自分が、口を挟んでいい問題ではない。
それより、どのみち入れ替わりの事実を告白する必要があるわけだから、いっそのこと、今すぐ正体を明かしてしまったほうが良いのではないかと真剣に悩み始めていた。
カレンは、傷つくだろう。激するだろう。ひょっとすると、また殴られるかもしれない。
けれども、こんなふうに切ない告白を、ルルーシュではない別の人間に聞かせるべきではない。

『――カレン、実は』

だからルルーシュには悪いが、自分の判断で正体を明かすためにゼロの仮面に手を伸ばした時だった。
何の前フリもなく、ゼロの私室の二重扉が開けられた。

『――待たせたな、スッ…――ッ』

――――――――――フルボッコ、確定。

おそらく、眠気を我慢して待っているスザクに配慮して、出来る限り迅速に足を運んでくれたのだろう。
予定よりもずいぶん早いルルーシュの到着に、なんとなくスザクは、胸の前で「アーメン」と十字を切っていた。

・◇・◇・◇・◇・◇・◇・◇・◇・

「――これは、一体どういうことなのかしら？」
仲の良い双子のように、応接スペースの椅子に肩を寄せ合って腰を下ろしている『二人のゼロ』の面前で、仁王立ちしているカレンが怖いほどに落ち着き払っている声音で訊ねた。
スザクはいっそ、椅子の上に正座でもしたい気分だったが、ルルーシュに止められたので我慢した。
その代わり、無言の圧力で「仮面を外しなさいよ」と命じられ。しぶしぶ手放した、二つのゼロの仮面がテーブルの上で放っている無機質な輝きがやけにむなしい。
正面からギリギリと殺人光線をぶつけてくるカレンの眼力に耐えかねて、恨めしそうに横目でルルーシュを一瞥した一瞬に大体の経緯を察したのだろう。あっさり開き直った様子のルルーシュが、真剣な表情でカレンに向き直った。
「――作戦の一貫だ。シュナイゼルに、ゼロの正体を知られている」
「ッ…って、アンタそれ…っ！」
理性的な少女だ。
こんな場合でさえ、私情を忘れて事態の深刻さを冷静に受け止めている。
それを当然のように受け取ったルルーシュは、「騙していて、済まなかった」と頭を下げて謝罪した。
「ただでさえおまえには、余計な負担を与えている。だからこの際、新しくゼロの正体を公表する時には、他のメンバーたちと同時期であるほうが、心理的な負担が軽減されるだろうと判断したまでだ」
スザクは内心で息を呑む。
その言い方では、あまりにもカレンに対して残酷だ。

『ゼロの正体を知っている』という事実は、カレンの中では負担なんかでは決してなく、『それでも自分は、ゼロを信じて日本を取り戻すために戦う』という矜持にすら成長していたはずだ。
そんな彼女を、ルルーシュはいとも平然と、「他のメンバーたちと同等に扱う」と宣言しているのである。
案の定、露骨に傷ついた眼をしたカレンは、一瞬頼りなく視線の先を揺らしたが。
気丈なことに、わずか数秒で自分を立て直すことに成功すると、「なら、今はまだ黙っていろというワケね？」と冷静に訊ね返した。
ルルーシュのほうも冷静に、「ああ」とそれに応じる。
「正式に情報を開示する日が決まり次第、事前に伝えたほうが良いなら、希望に沿うよう便宜を図るが」
「結構よ。私は、ゼロ番隊隊長・紅月カレン。中身は誰であれ、ゼロをお守りするのが仕事ですから」
「ああ、そうしてくれると助かる」
あくまで淡々と言うルルーシュの言葉を受けたカレンは、スラリと姿勢を正して視線を移すと、まっすぐスザクのほうに向き直った。
「――申し訳ありません、ゼロ。少しだけご足労願えますか？」
スザクは動揺していたが、無言で頷いた。
即座にきびすを返したカレンの背中に従って、二重扉の内側のドアをくぐり抜けたが、カレンはその先にあるドアを開こうとはしなかった。
もっとも、ゼロの衣装を身に纏っているだけで、仮面は持ってきていなかったので、迂闊にドアを開けられても困るのだが。
にわかに密室の完成した狭い室内で、思いのほかに明るい表情でカレンがクルリと振り向いた。
「――かえって、中身がアンタで良かったのかも」
「……カレン、……」
精一杯に眉根を寄せて、どこからどう見ても無理をしているのがミエミエの表情で、それでも笑って見せたカレンは、天真爛漫に跳

ねさせている髪の先を、意気揚々と指先で弾いた。
「結局、アンタとの決着がつけられなかったのは癪だけど。この先は、しばらくゼロに徹するつもり？」
答える前にスザクは、数秒間、迷いを克服するための時間を要した。
カレンを傷つけることがわかり切っていたからだ。
「そうだね、おそらく僕の寿命が尽きるまで、きみには付き合って貰うことになりそうだよ、カレン」
思ったとおり、カレンは動揺した。『なら、ルルーシュは？』と揺れる瞳が問いたがっている。スザクはその質問に、今はまだ答えるわけにはいかなかった。
カレンはしばらく言葉を発することができなかったが、小さく肩を落とすとあきらめた。
「……そう。だったら悪いけど、さっきのアレ、ルルーシュには内緒にしてくれる？」
おそらく誤解したのだろう。スザクの胸元より上には上げられない視線の先。たしかにルルーシュはC．C．と共に生きる道を選んだ。けれども、彼の将来に待ち受けているヴィジョンは、今のきみが考えているほど幸福じゃない。
「……本当にきみは、それでもいいの？」
せめて、それくらいは。話してやったほうが、カレンも救われるのだろうか？　と躊躇いながら訊ねると、
「ええ、もちろんよ」
カレンは、いかにも彼女らしい潔さを発揮して、スザクの差し出口を断った。
一瞬で潤んでしまった瞳を隠そうともせずに、その言葉を誇るように晴れやかに笑った。
「私は、ゼロ番隊隊長・紅月カレンなんですからね！　一生、ゼロを守る役目に添い遂げられるなら、本望だわ」
「カレン、……」

「――お忙しいところ、ご足労頂き失礼致しました、ゼロ。これまで通り、貴方の命は私が全力で守ります」
言って、素早くきびすを返したカレンは、「……先に行って、スザク」と小声で付け足した。
それでもスザクの足は前に進まなかった。「早く」と少しだけ苛立っているような声に急かされて、ようやくスザクもきびすを返した。
悄然と肩を落としながらゼロの私室に戻ると、ルルーシュは無人の室内で、両手を組んで、俯き加減に視線を落としていた。
わずかな苛立ちと、息苦しさのようなもの。
それを同時に感じたスザクは無言で歩みを進めると、部屋の奥にある給湯室でコーヒーを淹れて、マグカップを二つ手にルルーシュのところに戻った。

「――謝らないよ、僕は。今回の一件は、必要な情報を伝えておかなかったルルーシュの責任だ」

今現在の黒の騎士団とは、何の関係もない存在だったから、C.C.に関することは何ひとつとしてスザクはルルーシュに訊ねない。
だがしかし、職場に恋愛事情を介入させているのなら、話は別だった。
カレンがルルーシュに対して想いを傾けている事実を、ルルーシュは事前に話しておくべきだった。
そしたら、迂闊な告白を聞かされる前に、そうした状況を作り出す危険性は避けられたはずだから。
俯いているルルーシュの視線の先に、グイッと押し付けがましくマグカップを差し出すと、三秒ほどそれを凝視していたルルーシュは、苦笑まじりにスザクの手からマグカップを受け取った。
その表情を横目に睨め付けながら、スザクは机を挟んだ向かい側に腰を下ろした。

インスタントコーヒー独特の安っぽい酸味のようなもの。
普段のスザクなら、気にした覚えのないわずかな刺激が、喉の奥に突き刺さったまま抜けない魚の小骨のように舌の上に纏わりついてくる。
そして、普段なら豆のひき方から口うるさいルルーシュは、黙ってマグカップを口に運んでいる。
思わず一瞬その顔面に、熱いコーヒーをぶちまけてやりたい衝動に駆られたスザクは、結局我慢し切れずに自分のほうから話を切り出した。
「――C．C．は、元気にしてるかい？　カレンの話も、そこから始まったんだけどね」
皮肉な口調。まるで喧嘩を売っているみたいだと、スザクは自分でも思った。
いちいち口に出して説明しなくても、どうせ後で記録の映像を眺めるわけだから。出来ることならば、これ以上余計な干渉は避けたかった。
そうやって他人行儀に振る舞い続けているものだから、今回の場合にしたって、その気になれば防げたはずの事故。
挙句の果てに、あんな形でカレンのことまで傷つけて。
他人のことをどうこう言う以前に、自分とルルーシュも、肝心なところで圧倒的に会話の数が足りていなかった。
カレンの名前を出した一瞬だけ、チラリと視線の先を動かしたルルーシュは、『なるほどな』と事の発端と経緯を推察したような顔になる。
「それにしても、マズいコーヒーだな」
「うるさいよ。黙って飲みなよ」
「インスタントでも、俺ならもっとマシに淹れられるぞ？」
ブツブツ文句を言いながら、それでも素直に飲み干したルルーシュは、身体の中から押し出すように背中を丸めて溜息を吐き出した。
「……元気だぞ」

「なにが？」
「だから、C．C．だ。――相変わらず元気で、相変わらず俺の気持ちを振り回してる」
僕の眼にはむしろ、『弄ばれている』ようにしか映ってないんだけどね――と腹の底まで冷え切っている視線をルルーシュに投げかけた。
内心の思いに囚われていて、それに気づく気配もないルルーシュは、気だるそうな指先で前髪をパラリとかき上げた。
ずいぶんとルルーシュらしくない、アンニュイな溜息。
「アイツだって俺のことが好きなクセしてな。いい加減、『いつまで余計な心配事を、一人で抱え込んでいるつもりだ？』と問い詰めたくもなってくる」
いつもの事だが。呆れる以外に返す言葉を持っていなかったスザクは、ただでさえマズいコーヒーを、なおさらマズそうにズズッと啜った。
「大した自信だけどね。それって、本当にきみの思い込みじゃないのかい？」
「馬鹿を言うな」
ルルーシュは、いつものように断定口調でやり返した。
「たしかに俺は、おまえの言うように、こうした問題に鈍いのかもしれない。だが、それ以前にC．C．は、他人からの好意を我慢して容認できるタイプじゃない。本気で嫌なら、俺をこっぴどく傷つけるのが目的で、とっくに姿を消しているはずさ。俺に嫌われたい一心でな」
だから、今現在もアッシュフォードに留まっているC．C．の行動自体が、ルルーシュに対する執着心のバロメーター。――すなわち、気持ちを告白されているも同然だと、ルルーシュは断言しているわけだった。
共犯者だか、何だか知らないが、まったく大した自信だよ。
心底ムシャクシャしながらスザクは、残っていたコーヒーをガブ

リと飲み干すと、空いたマグカップをゼロの仮面の隣に置き戻した。
正直言って、ルルーシュが誰と付き合おうが一切興味はないのである。
問題は、あくまでルルーシュ本人の気の持ちようだ。
「――今更念を押すのも馬鹿馬鹿しい気分なんだけどね、ルルーシュ。僕には、『生きろ』というギアスがある。けど、前にも話して聞かせたとおり、場合によってはその命令も絶対ではないんだ。ビスマルク卿のように手強い人物が現れて、シュナイゼルが生きているうちに僕の身に何かが起こった場合には、きみがC・C・のコードを奪って僕の代わりに生きるんだ。そのためには、一刻も早く彼女の信用を取りつける必要がある。絶対にきみの要求を拒む気になれないくらい、確実な方法でね」
「わかっている。だからこうして、そのための努力を続けているのだろう？」
迷いなど、最初からカケラも存在しなかった。
アーカーシャの剣から帰還した一ヶ月間、ルルーシュと主に話し合ったのは、如何にしてシュナイゼルを出し抜くかということに終始した。
その時スザクのほうから、ナイトオブラウンズに関する情報を提供する返礼に、ルルーシュは自らコードの継承方法とあわせて、ギアスに関する情報の一切を話して聞かせたのである。
その上で、「俺は近い将来必ず、アイツのコードを継承するつもりだ」と語った。
「……あのねェ、ルルーシュ。こう言っちゃ何だけど、そうまでしてC・C・に尽くす必要があるのかい？　彼女の願いは『死ぬこと』だ。そしてきみは彼女の願望を拒絶した。きみたちの関係の根幹にある契約を破棄したも同然なワケだから、これ以上彼女を引き止めてしまうのは、あまりにもエゴイスト過ぎるんじゃないのかい？」
それは、スザクが最初から抱いていた感想だった。
今ではC・C・も、『死ぬこと』だけはあきらめているのを知っ

ている。
けれども、変化といったらそれだけだ。
たしかに、数百年の時の歩みを孤独に見つめ続けてきたのかもしれない。
スザクなどには、想像も及ばないほど凄惨な経験を重ねてきたのかもしれない。
だからと言って、優先順位で話をするならば、やはりスザクにとって大事にしたいのはルルーシュのほうだった。
これ以上むやみに不老不死の魔女なんかに関わって、今度こそ叶えられるかもしれない『優しい世界』の構想を台無しにされてしまっては困るのだ。
結構すごい目つきでルルーシュはギロリとスザクを睨んだが、瞳の奥はどう見ても笑っていた。
ここで笑っていられる神経が理解できなくて、スザクが不審の眼差しをぶつけると、その反応を面白がっているような顔つきで、ルルーシュはフンと軽く鼻を鳴らして微笑む。
「俺の予想したとおり、カレンは怒らなかっただろう？」
「は？　――ああ、まァ、あの状況じゃね」
相手が『枢木スザク』個人ならともかく、自分の与り知らないところで、憎むべき相手が、守るべき対象にすり替わっていたわけだから、カレンの心情を察するに、「怒られなくて良かった」などと安易に胸を撫で下ろしている場合ではない。
ルルーシュは、組んだ足の上で黒手袋に包み込まれた繊細な指先を、たがい違いに絡み合わせながらクスリと微笑んだ。
「つまりおまえは、俺の人物評を評価しているわけだ。それでも俺が、C・C・に対してエゴイストであると言い切れるのか？」
「――…ッ」
新参者が、わかったような口を利くなと遠まわしに皮肉られ。
スザクが握った拳を思わず一瞬ブルリと震わせると、ルルーシュは意に介した様子もなく「怒るな」と簡単に鼻の先であしらった。

「たしかに、おまえの意見にも一理ある。俺は、C．C．に対してエゴイストであり、最悪の詭弁家だ。アイツの本当の願いを、俺自身にも都合が良いように解釈しているだけだからな」
「本当の……願い？」
そんな話は初耳だった。
だがルルーシュには最初から答える気が無いようで、スザクに視線を合わせたまま肩をすくめた。
「いずれにせよ、俺は、俺自身にも都合が良いからアイツの願いを利用しているだけだ。尽くしているように感じるなら、たしかにその通りなのだろう。何しろ俺は、尽くされるよりも、尽くしたいタイプだからな」
「よく言うよ」
「何を言う？　我ながら、良く尽くしているじゃないか。おまえに対しても、世界に対しても」

――ルルーシュ、きみの嘘を償う方法はひとつ。その嘘を本当にしてしまえば良い。
――きみは、正義の味方だと嘘をついたな。だったら、本当に正義の味方になってみろ。
――ついた嘘には、最後まで――

その要求を受け入れることだけが、あの当時ルルーシュに残されていた最後のカードでもあった。
そしてルルーシュは、ナナリーを取り戻したい一心で、無条件にその要求を受け入れた。

――でもね、ルルーシュ。寿命が尽きれば、嫌でも僕は退場する定めにあるんだ。
万が一、ルルーシュのほうが運悪く先に他界する羽目に陥っても、

スザクにはC．C．のコードを継承してやるつもりはカケラもない。
あくまで、自分自身に用意されている時間だけを、『優しい世界』の実現に提供するための覚悟を固めている。――それだけだ。
スザクの中では、コードやギアスといった超常の力は、今でもやっぱり許されざる悪であり、間違った方法である認識が変わってないからだ。

「……世界は間違いなく、僕たち二人の力で変えられるよ。だけどね、ルルーシュ。きみの未来に、本当に希望はあるのかい？」
後悔しないのかい？　と訊ねた時、ルルーシュは最後まで返事をしなかった。
視線を落としたまましばらく考え込んでいたルルーシュは、おもむろに肩から余分な力を抜き去ると、ごく自然にリラックスした態度で微笑んだ。
「そのために、まずは出来る努力に励んでいるんだろう？」
やっぱりここ数日で、ルルーシュは変わってしまった。
おそらくC．C．が、ルルーシュの迷いを振り切るような力づけの言葉を与えてしまったのだろうが。
あんまりむやみな口出しは止めにして欲しいなと、スザクは内心で軽く憤慨した。

――きみがルルーシュを好きか嫌いか別にして、ルルーシュの目的すら知らないことだけは事実なんだからさ――。

憮然としながらカレンから言付かっていた資料を差し出すと、中身にザッと目を通したルルーシュは、顔を上げるなり目の下に皺を刻んで、「余計な宿題を増やしやがって」と悪戯な口調で答えた。
通信の際には時間の都合上、至って簡単に説明していたが。あのラクシャータと二人きりで二時間半にも及ぶ丁々発止の議論を繰り広げたわけだから、その間に頻出した専門知識の量は半端な数でな

いのだ。
「聞く耳を持たないね。どうせルルーシュなら、一晩あれば充分だろ？」
精一杯の皮肉でやり返しながら、自分の被っていたゼロの仮面を差し出すと、ルルーシュも当然のようにそれを受け取った。
スザクには絶対真似の出来ない手段だが、ルルーシュはゼロとして行動している最中に、仮面の内部に増設したモニターで、録画したスザクの行動を四倍速で同時に流し見ているのだ。
「観察するだけなら、１６倍速でも可能なんだがな」と残念そうに言ってくれるが、それでは会話の内容が早すぎて、さすがのルルーシュも聞き取れないらしい。
「久しぶりの休暇だからな、せいぜい羽を伸ばせよ」
さっそく仮面を被り直しながら、カッカッと快活に部屋を後にしたルルーシュの背中を見送って。
無意識のうちにもスザクの指先は、また自分の胸元へと伸びていた。
白い鳥が羽を広げたような形の騎士章。
ユフィと、自分が、交わした数多の約束。

「――ねえ、ユフィ。……僕は本当に、ルルーシュを止めなくてもいいのかな？」

答えてくれる人は誰もいない。
だからこそ一日も早く、Ｃ．Ｃ．に自覚を促がしてしまいたいのに。
呑気に恋愛を愉しむな――とまではスザクも言わないが、ルルーシュの将来に待ち受けているのは、カレンの想像したような薔薇色の人生などではなく、不死の地獄で一色だ。
たしかにルルーシュは、ユフィを殺した憎むべき相手だ。
だからと言って、みすみす自分の目の前で間違った方法を選ぼう

としているルルーシュを、見逃すことなんて出来そうにない。
ユフィだって、知れば必ず悲しむに決まっている。――その確信があるからこそ。

「……きみには、一日も早く、自覚してもらわなくっちゃ困るんだ――」

茫然と途方に暮れたようにそう呟き。
スザクは気だるい仕草で携帯電話を取り出すと、知ればルルーシュが激怒するとわかっている内容のメールを送信した。

『――C．C．へ。
入れ替わり完了したよ。
今夜また一晩お世話になるけど、お土産は何が良い？』

番外？　：　平和的な夜の過ごし方（前書き）

ちょっと未来設定の短編で、既にルルーシュとC．C．は両想いになってます。

番外？　：　平和的な夜の過ごし方

例年に比べると、今年の冬は比較的降水量が多いのだそうだ。
咲世子などに言わせると「洗濯物を乾かすタイミングが難しくて」と苦労の一面を覗かせてくれるが、ゼロとして活動を続ける分には一向に支障を感じて無かったルルーシュは、相変わらず平穏無事な学生生活を続けるかたわら、毎日を忙しく過ごしていた。
だが、ルルーシュの求めに従って、同じような毎日を一緒に過ごしている魔女の心情的には、少しばかり事情の違う部分が存在したらしい。

・◇・◇・◇・◇・◇・◇・◇・◇・

サラサラと夜の深さに遠慮しているような細かい霧雨が、ときおり風向きの影響でガラス窓を弾いている。
それよりずっと遠慮深い降り方で部屋の中でもパタパタと何かが零れる水音が、かれこれ半時間ばかりもルルーシュの聴覚を刺激していた。
音の発信源は、窓際に一番近いソファに腰を下ろしているC．C．である。
何となく普段とは逆の位置関係で、その向かい側のベッドに腰を下ろしているルルーシュは、作戦に必要になる資料をベッドの上に広げながら、見るとはなしにC．C．の様子に視線を注いでいた。

ルルーシュには背中を向けている状態で、熱心に雨の降りしきる様子を眺めていたC．C．は、ややあって魂まで抜けてしまいそうなほどに大きな溜息をハアと力なく吐き出した。
思わず釣られて嘆息してしまいそうだったルルーシュは、寸でのところで我慢すると、資料の上に視線を落としたまま、そっけない、いつもの口調で訊ねた。

「気が済んだのか？」
小さな掠れ声で「うん？」と応じたC．C．は、小首を傾げながら腕の中に膝を抱えて。
「どうなんだろうな？　自分でもあんまり良くわからない」
淡々と応じながら、しとどに濡れそぼっている頬を手のひらでグイと無造作に拭った。
そのまましばらく沈黙が続いたものだから、反応に困ったルルーシュが迷っているうちに、思いのほかに明るい口調でC．C．が先を続けた。
「でもな、ひとつだけなら発見したぞ？」
胡散臭そうな顔つきで「何が？」とルルーシュが促すと、そんな彼の内心を察しているC．C．は、ほんのり照れているような表情で微笑む。
「……なんかもう、疲れた。泣くだけでこんなに疲れると知っていたら、もうすこしくらい我慢したのにな」
どうせ、そんなことだろうと思ったさ――と予想に違わぬ呆れた反応に、ルルーシュは資料を繰りながらフンと鼻の先であしらった。
「そんなに、今の自分に慣れないのか？」
おそらく自分でも言ったとおり、心底疲れ切っているのだろう。
口を開くのも億劫そうに、グッタリうな垂れながらしばらく考え込んでいたC．C．は、「慣れないと言うよりも、感情の存在自体が珍しいのだろうさ」と答える。

「感情など意識しないで過ごしているほうが、魔女として暮らしていた人生では楽だった。――その点が、おまえとの出会いで、根底から覆ってしまったんだからな。我ながら、泣いたり怒ったり笑ったり、よくもまァ忙しいことだと感心しているさ」

着ているシャツの袖で大雑把に顔を拭ったC．C．は、照れた様子もなく視線を返してきたのだが、白皙の美貌は、まるきり洗いたてのシーツのようにすっかりくたびれてしまっている。

そんな顔を晒してまで、笑うなよ――と、チラリと上目遣いにその様子を眺めていたルルーシュは、じきに不機嫌そうに視線を外した。

正直なところ、一体どう反応してやったら良いのか、判断がつきかねていたせいも有る。

「結構な話じゃないか。めでたく無事に感情を取り戻したんだろう？　どんな気分だ？」

「面倒くさいな」

軽く仰のきながらフゥと小さく吐息したC．C．は、そんな自分に吹き出しながら眼を閉ざすとクスリと温容に微笑んだ。

「すっかり騙された気分だぞ？　以前と比べれば、単純に生きているだけでも、倍ほど体力が必要なんだ。物理的な事情以外にも、考えることまで嫌になるほど多すぎて、たまには無性に泣いてしまいたい気分にもなる。――だがな、泣いたら泣いたで、今度は逆にスッキリしすぎて、しばらくの間はなァ～んにも考える気分になれないんだ。自分でも、どうしてやったら良いのかわからん。まったく、とんでもない策謀を仕掛けられてしまった気分さ」

そんなことを言うクセに、何だかひどく満たされているような顔をして微笑んでくれるので、一体どう反応していいのかわからなかったルルーシュは、心底困り果ててしまったが。

じきにあっさり開き直ると、ことさら横柄に足を組み、腕まで組んで顎先をグッと持ち上げ――要するに、いつもと同じふてぶてし

い態度で訊ね返した。
「なら、たまには素直に感謝して見せたらどうなんだ？　可愛くない女だな」
「えらそうに言うな」
ようやくいつもの調子を取り戻したC．C．は、気まぐれな猫のような顔をして笑って。
腰を上げると、悠然と部屋を横切り、ルルーシュの隣りに肩を並べて座り直した。

「そう言うおまえのほうこそ、どうなんだ？」
「何が？」
「ゼロの時のおまえは一体どうだか知らないが。とりあえずここ最近は、ずいぶん感情の起伏が穏やかになっているだろう？」
「そうか？」
「そうとも。あんまり激しく怒らなくなったしな、私の目にするかぎり、穏やかな表情ばかりのオンパレードだ」
そういうセリフを、いかにも「つまらない」と言いたげな口調で言ってくれるので、ルルーシュだって思わず半眼で睨み返したくもなる。
C．C．は、構わずルルーシュの顔を両手で挟み込むと、いつになく熱心にうながした。

「いいからほら、おまえもちょっと泣いてみろ」
「――今、ここでか？」
「そうだ」
「その必要もないのに、どうして？」
返事を予感しながらルルーシュが問い返すと、C．C．は「私が見たいからだ」と即答した。
ここで、しみじみ溜息を吐き出したくもなる男の心理を、一体誰が責められようか？

「言っておくがな、俺だって別に喜んで、おまえの泣き顔を眺めたわけでは無い」
「いいじゃないか、別に。恥ずかしいのか？　今なら、見ているのは私しか居ないぞ？」
　気にするのはそこの部分じゃないだろう？　と、よっぽど切り替えしてやりたい気分だったが、皮肉なことに、要するに今は、『何かに執着する』といった感情を愉しんでいる女の心理が丸わかりなのだ。
「……ちょっと待ってろ」
　ルルーシュは言って、本当に渋々あきらめの息を吐き出した。

　やがて前置きしてから、３０秒ほどが経過した頃だろうか。
　紫水晶（アメジスト）色の両眼からツウツウと流れ始める涙の様子を観察して、２０センチと離れていない距離の先からＣ．Ｃ．が、絹のようになめらかな静かな声で訊ねる。
「今、どんなことを考えた？」
　ルルーシュは、いつもの口調で淡々と応じる。
「そんなものは秘密だ」
　予想していたのだろう。それとも単純に興味が無いのだろうか、Ｃ．Ｃ．もそれ以上は、しつこく追求しようとしなかった。
　その代わりに、至近距離から遠慮なく男の涙を観察し、しみじみ感心している口調で言ってくれたものだ。

「綺麗なものだな。紫色の瞳が涙に潤って、なんだか触ると壊れそうな宝石みたいだ」
　それを言う自分のほうこそ、今の今まで泣いていたのもすっかり忘れた様子で、満足そうに金の瞳を輝かせながら微笑んで見せるのだから、あきれたルルーシュはフッと瞳を細めて微笑んだ。
「どう考えてもそれは、男を口説くセリフでは無いな」
「あ、こら笑うな。せっかく良い眺めだったのに」

「呆れた魔女だな。俺の笑顔より、涙のほうを好むのか？」
一瞬きょとんと黙り込んでしまったC．C．は、いかにも心外だといわんばかりに唇の先を尖らせた。
「当然だろう？　笑顔なら、相手構わず誰にだって大盤振る舞いじゃないか、おまえは」
まったくコイツは――とルルーシュは尚も笑いを転がしながら、頬の上の濡れた感触を手のひらでサッと拭った。
「おまえな、どれだけ俺の素顔を独占したら気が済むんだ？」
「別に？　そんなに言うほど独占してないぞ？」
「してるんだよ。――おまえの自覚の無いところでな」

そっけなく言いながらC．C．のほうにグイと上体を乗り出すと、それを予測していなかったC．C．はとっさの判断で仰け反り難なく身をかわしたが、それこそ予想の範疇だったルルーシュがさらに追い討ちをかけると、それには対応し切れなかったC．C．が、勢い余って後ろ向きに「ぅわっ！」とベッドの上に倒れ込む。
ルルーシュは流れる動きで悠然とC．C．の上に覆い被さると、チュッ、チュッと音を鳴らしながら頬のラインを辿って、唇の上まで軽いキスの感触で辿った。
その延長線上で、親密なキスを求める際にはいつも決まってC．C．の下唇を噛んでしまうのは、実際ルルーシュも無意識で行っている癖なのだが。すっかり習慣の一つとして身に馴染んでしまっているC．C．は、抵抗を思いつく暇もなく条件反射で唇の防御を緩めてしまって。クチュリと小さく濡れた音を鳴らして、遠慮なくルルーシュの舌先が奥まで忍び込んできたところで、ようやく抗議の声を上げ始めた。
「――っん、んん～っ、――んんん～っっ」
ルルーシュは、C．C．の甘い口腔内を舐めながら吹き出してしまって。
とりあえず舌を抜き出してやったところで、思わせぶりに視線を

絡めて微笑む。
「こんな俺の素顔を知っているのは、おまえくらいのものだろう？」
見る間に、耳朶まで真っ赤に顔を染めたC・C・は、なおさら不満そうに唸った。
「そんなもの、私だって知るか！　そもそもこういった接触は、本来感覚的なものであって」
「そうか？　俺は結構、知った気分でいるんだがな。ちなみに最近のお気に入りは、抱いてる最中に見せる最後の泣き顔だ」

前々から最中には、人の変わったような饒舌を発揮して、「可愛い」だの、「もっと見せろ」だの恥ずかしいセリフをしつこく言われ慣れていたC・C・は、たちまち真っ赤に燃え上がるほどに激昂しながら睨み返すと、「要するにそれは、『見せろ』とリクエストでもしているつもりか？」と獰猛に訊ねた。
そんなC・C・のひたいに被さる前髪を戯れに指先で弄びながら、ルルーシュは呆れている様子で呟く。
「この状況で、『見せたくない』というほうが、無理な相談だと思うがな」
C・C・は真っ赤に顔を火照らせたまま、無造作にルルーシュの指を振り払うと、惚れ惚れするほど高飛車に言い返してくれたものだ。
「まったく、たまには言うようになったよなァ？　この素人童貞が！」
「――なッ、どういう意味だ？」
「そのまんまの意味じゃないか？　魔女しか抱いたことが無いクセに、えらそうに言うな」
つらつらと小憎らしい顔をして言われれば、今度はルルーシュのほうが憮然と顔を顰める番だった。
「……魔女しか抱く気になれなくても、この場合、いったい何の支障があるんだ？」

「大いにあるぞ？　青少年の有り余る性欲を私一人で受け止めるには、幾らなんでも限度というものが」
「――人を勝手に性欲魔人のような言い方をするな！」
「あ、いいなァ、それ。魔王が転じて、性欲魔人に成長したわけか？」
「――黙れ魔女！」

業を煮やしたルルーシュは、憎まれ口を叩きまくる女の唇を塞いでやるために、すかさず身を屈めたが、今度は唇が触れる寸前で、ルルーシュの口の上にC．C．の手のひらが割り込み邪魔をした。
逆に苦しいほど呼吸器官を塞がれて、ルルーシュは目的を達し得なかった無様な姿を晒して、見る間にカァッと羞恥に顔を歪める。
だがC．C．は、そんな男の姿を眺めてさえ、ニコニコッと上機嫌で微笑んでくれるのだ。
そのまましばらく抵抗するのも忘れて、目前の微笑を眺めていたルルーシュは、ややあって、それはもう見事に、心底疲れ切っている気分で溜息を吐き出した。
「……要するに、今のおまえは、『俺にわがままを言う』感情を愉しんでいるわけだな？」
「いけないか？」
自分にはそれを言う権利があるのだと信じて疑いもしない表情で。
ここぞとばかりに愉しげに、可愛らしく微笑む顔を見せつけられてしまったルルーシュは、心底腹立たしい気分で歯噛みしながら顔を顰めた。
その眉間に深く深く刻まれた皺を、C．C．は人差し指でスリスリとなぞりながら言ったものだ。
「こんな顔をするくらいなら、私の願いなど叶えなければいいだろうに？」
ルルーシュは言った。

腹の底からきっぱりと、男らしく断定的に。
「それが出来れば、苦労はしない」
いつだって勝手気ままな振る舞いで、あっさり男の純情をあしらってしまう性悪魔女は、それはもう見事に、愉しそうに笑い出してくれるので、本当にどうしようもない女だなと呆れてしまうが。
やっぱりどんな泣き顔を眺めるよりも、幸福そうに笑う女の笑顔に勝る敵は存在しないのだ。
そんな当たり前の実感を、今更のように噛み締めてしまっている、実に平和的な夜の過ごし方。
サラサラと降り止まない雨の音は今もずっと続いている。

番外？　：　平和的な夜の過ごし方（後書き）

こんなふうな甘々な関係に近づくために、物語はまだ随分続きます。
ルルーシュにはひたすら忍耐の日々……。
ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2100m/

コードギアス　絶望エトランジェ

2010年10月10日12時12分発行